

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊

津島岡大遺跡 4

—第5次調査—

(大学院自然科学研究科棟新営予定地)

1994年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊

津島岡大遺跡第5次調査

—— 縄文時代後・晩期を中心とした低地性遺跡の調査 ——

1994年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

本報告書は、岡山大学大学院自然科学研究科棟建設にともなう発掘調査の成果をまとめたものである。この調査は、津島岡大遺跡第5次発掘調査として1988年度に実施した。

調査を行った遺構・遺物の主体は、縄文時代後・晩期に属している。東から西へ流れる幅20メートルほどの旧河道が発掘区の大部分を占めており、北側の岸に縄文時代後期中葉の貯蔵穴が7基、南側の岸にはそれよりも新しい縄文時代晩期の貯蔵穴が3基設けられ、遺構としては比較的単純な構成であった。しかし北側貯蔵穴の周辺には良好な遺物包含層がひろがり、当地における縄文時代後期の土器の研究、とくに土器型式の細分とその変遷および関東地方等の土器型式との対比などと関連して、有意義な資料が出土した。

後期中葉の貯蔵穴には、食料であったドングリ類がのこっていた。これらの貯蔵穴中に含まれる土を分析したところ、その他の微細な種子化石を検出することができた。本学農学部沖陽子助教授の同定によれば、そのなかに畑地あるいは水田といった耕作地に伴う雑草の種子が含まれるという。また宮崎大学農学部藤原宏志教授は、同じく後期中葉の土器片の胎土分析を行い、イネのプラント・オパールを確認されたということである。これらは、縄文時代後期中葉の頃、当地に稲作がすでに存在したのではないかという、重要な問題に結びつく。

従来縄文時代晩期後半期とされてきた時期に水稻耕作が行われていたことはほぼ確実であり、その時期についてはすでに弥生時代に含めて理解する説（弥生早期—B.C.約400年—）が有力となりつつある。はたして縄文時代後期中葉（B.C.1500年前後）までそれが遡るのであろうか。後期における稲作の有無についてはさらに多くの遺跡での検証が必要であろうし、存在したとすれば、水稻・陸稲の区別を含めてそれがどのような性格の稲作であったのか、農耕具や耕作地等さまざまな関連要素の検討も不可欠となろう。

このたびの発掘調査とその研究成果は、日本における農耕の起源に関し、新たな問題を投げかけた。これは、調査・研究の過程でご協力いただいた本学およびその他の大学・研究機関における各専門分野の研究者各位のご努力のたまものである。また発掘調査の実施や報告書刊行にあたって、大学院自然科学研究科をはじめ大学内外の諸機関のご協力・ご支援をたまわった。以上の機関・各位にあらためてお礼申し上げるとともに、本報告書が関係する研究諸分野で広く活用されることを期待するものである。

1994年2月27日

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長

稲田孝司

例 言

- 1 本書は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが1988年6月27日より1989年3月19日までの期間で行った大学院自然科学研究科棟新営工事にもなう発掘調査の報告書である。調査地は津島地区構内座標 AY06-08および AZ06-07区に位置し、調査対象面積は1537㎡である。
- 2 発掘調査ならびに報告書作成までの諸作業は、管理委員会・運営委員会の指導のもとに行われた。委員・幹事の方々に感謝申し上げる。
- 3 本地点の調査の概要は『岡山大学構内遺跡調査研究年報』6としてすでに一部を報告しているが、細部にわたる事実関係は本報告書をもって正式のものとする。
- 4 整理作業は基本的には以下の分担でおこない、遺物の基礎的な整理作業の過程で、内田 恵、恩藤富子、片山純子、黒藪美代子、萩野早苗の協力を得た。また報告書の作成にあたって、土井基司、松木武彦の助言を受けた。

遺物の実測、トレース、写真撮影等の作業は、縄文時代の土器・土製品を阿部芳郎、縄文時代・弥生時代の石器を富樫孝志、弥生時代前期土器を山本悦世、古墳時代～中世の土器を阿部、富樫が担当した。また遺構のトレースは縄文時代と弥生時代前期のものは山本が、弥生時代後期は富樫が、中～近世・近代のものについては阿部がそれぞれ担当した。

- 5 本書の作成はセンター長および調査研究員の討議により分担を決定した。分担は目次に明示するとともに、第I、II、III、V章では各文末に、第IV章については、各位の論文の文頭に記した。
- 6 本書の編集は、稲田孝司（センター長）、新納 泉（調査研究室長）の指導と助言のもとに、阿部がこれをおこなった。
- 7 報告書の作成にあたり出土遺物の自然科学的分析を次の各氏に依頼し、有益な教示と指導を得た。記して感謝申し上げます。また各々の成果は事実記載中の記述および第IV章に各論として掲載した。

縄文時代後期土器の粒度分析：帝京大学山梨文化財研究所 河西 学

縄文時代後期土器のプラント・オパール分析：宮崎大学農学部教授 藤原宏志

縄文時代後期土器の炭化物分析：東京大学総合研究資料館 松谷暁子

縄文時代後、晩期貯蔵穴内出土の植物遺体の同定：岡山大学農学部助教授 沖 陽子

縄文、弥生時代石器の石材鑑定：岡山大学理学部講師 鈴木茂之

縄文時代土器、土製品に塗布された赤色顔料の分析：徳島県立博物館 魚島純一

8 発掘調査から報告書の作成に至るまでの過程で多くの方々のご協力、ご指導をいただいた。記して感謝申し上げます。(敬称略)

栗屋 聡、石川日出志、犬飼徹夫、扇崎 由、大塚達朗、岡田文男、恩田 勇、五味田裕、粉川昭平、北野信彦、木下哲夫、久保穰二郎、熊野正也、鈴木茂之、鈴木康之、鈴木正博、園尾 裕、竹広文明、高橋 護、高橋 学、千葉 豊、出原恵三、戸沢充則、中沢道彦、中村五郎、根木 修、能代修一、林 謙作、平井 勝、間壁忠彦、圓山 裕、水ノ江和同、宮本一夫、矢島國雄、山田昌久

9 本報告書に掲載した調査の記録類、出土遺物等は、すべて当センターで保管している。

10 本文中における表記および記述に関する凡例は以下の通りである。

- a 本文中の図版遺物番号は原則として遺構、層位別に付した。
- b 遺物観察表は縄文土器と石器は第Ⅲ章末に一括して掲載し、それ以外の遺物は図版と組にして掲載してある。縄文土器の観察表凡例は、第Ⅲ章末に記載した。また表中の番号と遺物図版、巻末写真図版の番号は統一してある。
- c 弥生前期土器の観察表の胎土表記は微砂：径0.5mm以下、細砂：径0.5～1mm、粗砂：径1～2mm、細礫：径2mm以上の基準で示した。また表内の法量の欄では残存部分が1/2以下のものについては()を付けている。
- d 遺物の縮尺は土器を1/3・1/4、石器を2/3・1/3を基本として、それ以外は個別に縮尺を示してある。
- e 本報告で用いる高度値は標高であり、方位は真北を示す。

目 次

第 I 章 遺跡の位置と環境	1~6
1. 周辺遺跡の分布と性格	阿部芳郎 (1)
2. 遺跡の立地と景観	阿部芳郎 (3)
第 II 章 調査の経過と概要	7~12
1. 調査に至る経過	山本悦世 (7)
2. 調査の方法・目的と経過	山本悦世 (7)
3. 調査組織	山本悦世 (10)
4. 調査の概要	山本悦世 (11)
5. 整理作業の経過	阿部芳郎 (12)
第 III 章 調査の記録	13~218
1. 層序と地形	山本悦世 (13)
2. 縄文後期土器の分類	阿部芳郎 (20)
3. 縄文時代の遺構と遺物	山本悦世・阿部芳郎・富樫孝志 (22)
4. 縄文時代包含層の出土遺物	山本悦世・阿部芳郎・富樫孝志 (52)
5. 弥生・古墳時代の遺構と遺物	山本悦世・富樫孝志 (160)
6. 近世・近代の遺構	阿部芳郎 (176)
7. 古墳時代以降の包含層出土の遺物	阿部芳郎 (179)
8. 縄文土器・石器観察表	阿部芳郎・富樫孝志 (182)
第 IV 章 出土遺物の自然科学的分析	219~260
1. 津島岡大遺跡出土縄文土器の粒度組成	河西 学 (219)
2. 津島岡大遺跡出土土器に関するプラント・オパール胎土分析	藤原宏志 (236)
3. 津島岡大遺跡 (第 5 次調査) 出土土器内面付着物について	松谷暁子 (243)
4. 貯蔵穴出土の種子	沖 陽子・山本悦世 (249)
第 V 章 調査の成果と課題	261~330
1. 後期第 IV 群土器の型式学的検討	阿部芳郎 (261)
2. 彦崎 K 2 式に先行する土器群について	橋本雄一 (278)
3. 後期第 IV 群土器の製作技術と機能	阿部芳郎 (291)
4. 津島岡大遺跡第 5 次調査出土の縄文時代後期石器群の技術構造	富樫孝志 (312)
総 括	阿部芳郎 (331~332)

図版目次

図1 周辺遺跡分布図 ……………1	図29 南側微高地斜面土層断面図 ……………46
図2 津島構内における 縄文時代遺物の出土状況 ……………3	図30 貯蔵穴 SP 8 実測図 ……………47
図3 津島地区構内座標と各調査地点 ……………7	図31 貯蔵穴 SP 8 出土遺物 ……………48
図4 調査区土層断面位置図 ……………14	図32 貯蔵穴 SP 9 実測図 ……………49
図5 調査区内土層断面図 ……………19	図33 貯蔵穴 SP10実測図 ……………50
図6 後期第Ⅳ群の器種分類 ……………21	図34 縄文時代後期の遺物包含層の 堆積状態と出土遺物の概要 ……53
図7 縄文時代遺構配置図 ……………22	図35 29層出土遺物 ……………54
図8 北側微高地斜面土層断面図 ……………23	図36 33 a 層出土遺物 ……………56
図9 貯蔵穴 SP 1 実測図 ……………24	図37 25 a 層における遺物分布状態 ……58
図10 貯蔵穴 SP 1 土器埋設状況 ……………25	図38 25 a 層出土遺物(1) ……………59
図11 貯蔵穴 SP 1 出土遺物(1) ……………26	図39 25 a 層出土遺物(2) ……………60
図12 貯蔵穴 SP 1 出土遺物(2) ……………27	図40 25 a 層出土遺物(3) ……………61
図13 貯蔵穴 SP 2 実測図 ……………28	図41 25 a 層出土遺物(4) ……………62
図14 貯蔵穴 SP 2 出土遺物(1) ……………30	図42 25 a 層出土遺物(5) ……………63
図15 貯蔵穴 SP 2 出土遺物(2) ……………31	図43 25 a 層出土遺物(6) ……………65
図16 貯蔵穴 SP 3 実測図 ……………32	図44 25 a 層出土遺物(7) ……………66
図17 貯蔵穴 SP 3 出土遺物(1) ……………33	図45 25 a 層出土遺物(8) ……………67
図18 貯蔵穴 SP 3 出土遺物(2) ……………33	図46 25 a 層出土遺物(9) ……………68
図19 貯蔵穴 SP 4 実測図 ……………34	図47 25 a 層出土遺物(10) ……………69
図20 貯蔵穴 SP 4 出土遺物(1) ……………36	図48 25 a 層出土遺物(11) ……………71
図21 貯蔵穴 SP 4 出土遺物(2) ……………36	図49 25 a 層出土遺物(12) ……………72
図22 貯蔵穴 SP 5 実測図 ……………38	図50 25 a 層出土遺物(13) ……………73
図23 貯蔵穴 SP 5 出土遺物(1) ……………39	図51 25 a 層出土遺物(14) ……………74
図24 貯蔵穴 SP 5 出土遺物(2) ……………40	図52 25 a 層出土遺物(15) ……………75
図25 貯蔵穴 SP 6 実測図 ……………41	図53 25 a 層出土遺物(16) ……………76
図26 貯蔵穴 SP 6 出土遺物 ……………42	図54 25 a 層出土遺物(17) ……………78
図27 貯蔵穴 SP 7 実測図 ……………43	図55 北陸地方における 加曾利 B 1 式平行土器群 ……79
図28 貯蔵穴 SP 7 出土遺物 ……………45	

図56	25 a 層出土遺物(18)	80	図 88	27 b 層出土遺物(18)	118
図57	25 a 層出土遺物(19)	81	図 89	深鉢B類の口縁部断面形態の分類	119
図58	25 a 層出土遺物(20)	82	図 90	27 b 層出土遺物(19)	120
図59	25 a 層出土遺物(21)	83	図 91	27 b 層出土遺物(20)	122
図60	25 a 層出土遺物(22)	84	図 92	27 b 層出土遺物(21)	123
図61	25 a 層出土遺物(23)	86	図 93	27 b 層出土遺物(22)	124
図62	25 a 層出土遺物(24)	87	図 94	27 b 層出土遺物(23)	125
図63	25 a 層出土遺物(25)	88	図 95	27 b 層出土遺物(24)	126
図64	25 a 層出土遺物(26)	90	図 96	27 b 層出土遺物(25)	127
図65	25 a 層出土遺物(27)	91	図 97	27 b 層出土遺物(26)	128
図66	25 a 層出土遺物(28)	93	図 98	27 b 層出土遺物(27)	130
図67	25 a 層出土遺物(29)	95	図 99	27 b 層出土遺物(28)	131
図68	25 a ・ 23層下面出土遺物	96	図100	深鉢C類の口縁部断面形態の分類	132
図69	23層下面出土遺物	97	図101	27 b 層出土遺物(29)	133
図70	27 b 層における土器の重量分布	98	図102	27 b 層出土遺物(30)	135
図71	27 b 層出土遺物(1)	99	図103	27 b 層出土遺物(31)	136
図72	27 b 層出土遺物(2)	100	図104	27 b 層出土遺物(32)	137
図73	27 b 層出土遺物(3)	101	図105	27 b 層出土遺物(33)	139
図74	27 b 層出土遺物(4)	102	図106	27 b 層出土遺物(34)	139
図75	27 b 層出土遺物(5)	103	図107	27 b 層出土遺物(35)	140
図76	27 b 層出土遺物(6)	104	図108	27 b 層出土遺物(36)	141
図77	27 b 層出土遺物(7)	106	図109	27 b 層出土遺物(37)	142
図78	27 b 層出土遺物(8)	107	図110	27 b 層出土遺物(38)	143
図79	27 b 層出土遺物(9)	108	図111	スプーン形土製品出土遺跡分布図	143
図80	27 b 層出土遺物(10)	110	図112	27 b 層における グリッド別石器出土点数	144
図81	27 b 層出土遺物(11)	111	図113	27 b 層出土遺物(39)	145
図82	27 b 層出土遺物(12)	112	図114	27 b 層出土遺物(40)	146
図83	27 b 層出土遺物(13)	113	図115	27 b 層出土遺物(41)	148
図84	27 b 層出土遺物(14)	114	図116	27 b 層出土遺物(42)	150
図85	27 b 層出土遺物(15)	115	図117	27 b 層出土遺物(43)	153
図86	27 b 層出土遺物(16)	116	図118	27 b 層出土遺物(44)	154
図87	27 b 層出土遺物(17)	117			

図119	27 b層出土遺物(45) ……………	155	図150	平均粒径一分級度 ……………	227
図120	27 b層出土遺物(46) ……………	156	図151	分級度一歪度 ……………	227
図121	27 b層出土遺物(47) ……………	158	図152	粗粒砂/砂一砂含有率 ……………	228
図122	33、26層出土遺物 ……………	159	図153	土器胎土分析ダイアグラム ……………	237
図123	弥生時代前期(18層)地形図 および出土遺物分布域 ……………	160	図154	分析試料実測図 ……………	237
図124	弥生時代前期土器出土層位 ……………	160	図155	27 b層調査範囲と 分析試料出土地点 ……………	238
図125	弥生時代前期土器(1) ……………	161	図156	27 b層出土土器の接合関係 ……………	262
図126	弥生時代前期土器(2) ……………	162	図157	炭化物付着土器の分布 ……………	263
図127	弥生時代前期土器(3) ……………	163	図158	廃棄ブロック別の土器組成率 ……………	264
図128	弥生時代前期土器(4) ……………	165	図159	装飾別土器組成率 ……………	265
図129	弥生時代前期土器(5) ……………	166	図160	25 a、27 b層出土の深鉢A類 ……………	266
図130	7層上面検出遺構関連土層断面図 ……	168	図161	深鉢B類1種の口縁部形態の組成率	267
図131	7層上面検出遺構 ……………	169	図162	深鉢C類の口縁部断面形態 ……………	268
図132	7層出土遺物 ……………	170	図163	深鉢C類の口縁部形態の セリエーション ……………	269
図133	5 a層検出遺構関連土層断面図 ……	171	図164	深鉢A類と鉢A類の 口縁部文様帯の連鎖と変遷 ……	271
図134	5 a層上面検出遺構 ……………	172	図165	津雲A式の器種間における 文様帯連鎖 ……………	273
図135	5 a層出土遺物 ……………	173	図166	深鉢A類と深鉢B類 ……………	279
図136	5層出土遺物(1) ……………	174	図167	後期第IV群の内文 ……………	279
図137	5層出土遺物(2) ……………	175	図168	内文模式図 ……………	280
図138	畝状遺構実測図 ……………	176	図169	S字形沈線文 ……………	280
図139	近世・近代の遺構位置図 ……………	177	図170	深鉢B類口縁部文様形態の分類 ……	281
図140	SK06土坑実測図 ……………	177	図171	口縁部文様形態の変遷 ……………	282
図141	土坑実測図 ……………	178	図172	口縁端部外面の 肥厚の度合いの変遷 ……	282
図142	5層出土遺物 ……………	179	図173	縄文原体の撚りの方向の変化 ……	283
図143	4 b層出土遺物 ……………	180	図174	平城I式の内文 ……………	284
図144	4 a層出土遺物 ……………	181	図175	九州の内文 ……………	285
図145	分析試料実測図(1) ……………	220	図176	永井遺跡の鐘崎式 ……………	285
図146	分析試料実測図(2) ……………	221			
図147	粒径頻度分布 ……………	223			
図148	粒径頻度分布 ……………	224			
図149	確率累積曲線の分解例 ……………	226			

図177	桑飼下第Ⅳ群の内文	287	図191	剥片の背面の剥離面構成	317
図178	内文 e 類	288	図192	27 b、25 a 層出土剥片の 背面の剥離方向	317
図179	底部形態の分類	292	図193	27 b、25 a、23層下面 出土石器の長幅比	318
図180	福田貝塚における 底部形態の層位的出土状態	294	図194	楔形石器削片の長幅比	319
図181	津島岡大遺跡における 底部形態と底部径	294	図195	27 b、25 a 層出土 楔形石器削片の厚さ	319
図182	底部形態と内面成形	295	図196	27 b、25 a 層出土 楔形石器の長幅比	321
図183	底部付近の器面調整痕	300	図197	百間川沢田遺跡の 石器集積土坑と出土石器	323
図184	25 a 層における器種と口縁径	303	図198	盤状剥片の長幅比	324
図185	27 b 層における器種と口縁径	304	図199	津島岡大遺跡第 5 次調査出土の 縄文後期石器群の技術構造	325
図186	深鉢形土器の使用痕跡	305	図200	打製石鎌の長幅比	326
図187	断面色調構造の類型	305			
図188	27 b、25 a 層出土剥片の長幅比	316			
図189	27 b、25 a 層出土剥片の厚さ	316			
図190	27 b、25 a 層出土剥片の打面形態	316			

表 目 次

表 1	貯蔵穴一覧表	51	表 8	木本類 2 (A a-2 類)	256
表 2	分析試料および粒度分析結果	222	表 9	木本類 3 (B a-2 類)	257
表 3	津島岡大遺跡 (第 5 次調査) 出土土器胎 土のプラント・オパール分析結果一覧	238	表10	木本類 4 (B a-3 類)	257
表 4	貯蔵穴出土小形種子一覧	253~254	表11	木本類 5 (B a-1 類)	257
表 5	草本類 1 (A a 類)	255	表12	木本類 6 (B a-2 類)	257
表 6	草本類 2 (A b 類)	255	表13	廃棄ブロックにおける底部出土数	293
表 7	木本類 1 (B a-1 類)	256	表14	縄文時代後期の石器組成 (第Ⅲ章 8 の観察表は除く)	313

本文中写真目次

写真1	調査地点遠景 ……………4	写真19	土器薄片顕微鏡写真 ……………235
写真2	縄文時代の河道と 貯蔵穴群の調査状況 ……………5	写真20	後期第Ⅳ群土器胎土中検出の プラント・オパール ……240
写真3	縄文時代河道内における 土層の堆積状況 ……16	写真21	後期第Ⅳ群土器胎土中検出の プラント・オパール ……241
写真4	北側斜面における縄文後期貯蔵穴群 23	写真22	後期第Ⅳ群土器胎土中検出の プラント・オパール ……242
写真5	貯蔵穴 SP 2 調査状況 ……………29	写真23	津島岡大遺跡（5次）と 他遺跡出土の土器附着炭化物 ……247
写真6	貯蔵穴 SP 4 半截状態 ……………35	写真24	津島岡大遺跡（5次）と 他遺跡出土の土器附着炭化物 ……248
写真7	貯蔵穴 SP 5 完掘状態 ……………37	写真25	貯蔵穴出土種子(1) ……………258
写真8	貯蔵穴 SP 6 半截状態 ……………42	写真26	貯蔵穴出土種子(2) ……………259
写真9	貯蔵穴 SP 7 完掘状態 ……………44	写真27	貯蔵穴出土銭子(3) ……………260
写真10	南側斜面における 縄文晩期貯蔵穴群 ……………46	写真28	貯蔵穴出土堅果類 ……………260
写真11	北側斜面における調査状況 ……………55	写真29	底面の形状と 底部側端部付近の剝離痕 ……296
写真12	25 a 層における 後期第Ⅳ群土器の出土状態 ……57	写真30	底面の成形状態 ……………297
写真13	加曾利 B 1 式の双口土器と注口土器 77	写真31	擬口縁の形状 ……………299
写真14	5 a 層上面における 水田遺構検出状況 ……176	写真32	深鉢 C 類の内面における積み上げ痕 ……………299
写真15	土器薄片顕微鏡写真 ……………231	写真33	器面調整と器表面における剝離痕 301
写真16	土器薄片顕微鏡写真 ……………232		
写真17	土器薄片顕微鏡写真 ……………233		
写真18	土器薄片顕微鏡写真 ……………234		

巻末写真図版目次

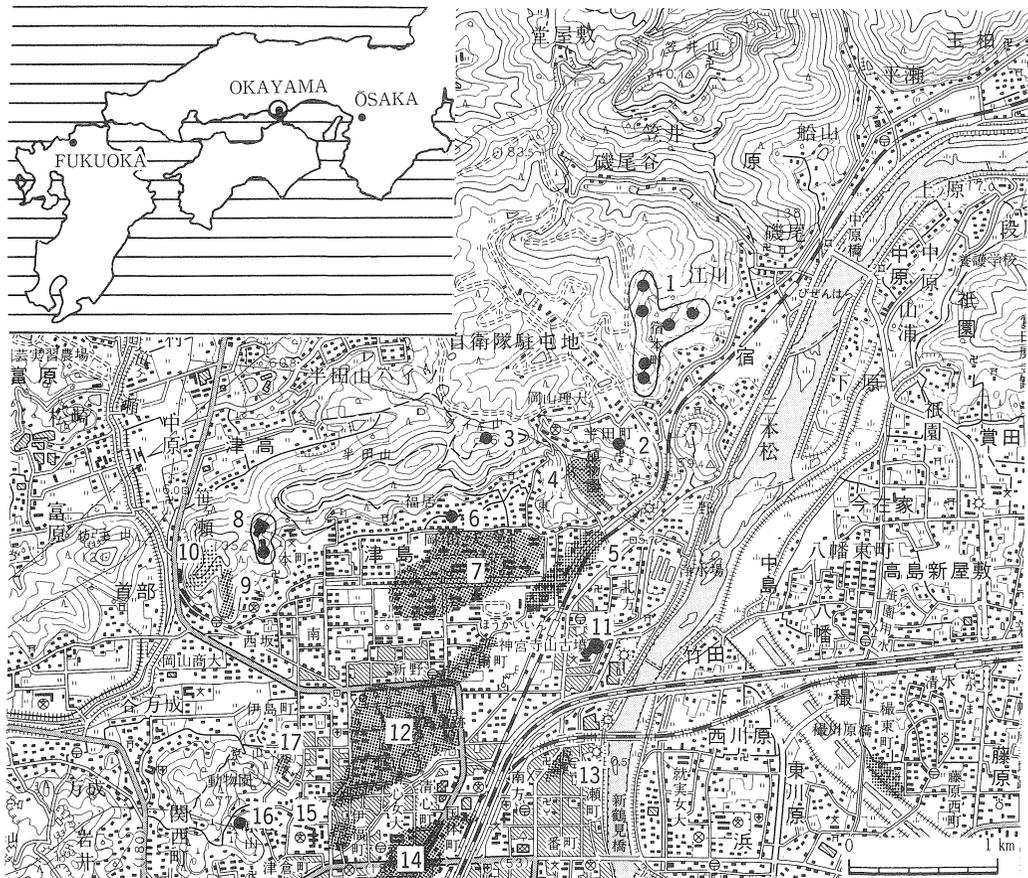
図版一- 1 . 29層出土後期第Ⅰ、Ⅱ群土器	- 2 . 25 a 層出土後期第Ⅳ群土器
- 2 . 33 a 層出土後期第Ⅰ、Ⅱ群土器	図版三- 1 . 25 a 層出土後期第Ⅳ群土器
図版二- 1 . 25 a 層出土後期第Ⅰ、Ⅱ群土器	- 2 . 25 a 層出土後期第Ⅳ群土器

- 図版四-1. 25 a 層出土後期第Ⅳ群土器
 - 2. 25 a 層出土後期第Ⅳ群土器
- 図版五 25 a 層および貯蔵穴出土
 後期第Ⅳ群土器
- 図版六 25 a 層および貯蔵穴出土
 後期第Ⅳ群土器
- 図版七 25 a 層出土後期第Ⅳ群土器に共伴した
 異系統の土器
- 図版八 後期貯蔵穴内出土の
 後期第Ⅳ群土器
- 図版九 25 a 層出土の
 後期第Ⅳ群土器の底部
- 図版一〇-1. 27 b 層出土の後期第Ⅱ、Ⅲ群土器
 - 2. 27 b 層出土の後期第Ⅲ群土器
- 図版一一 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
- 図版一二-1. 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
 - 2. 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
- 図版一三-1. 7 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
 - 2. 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
- 図版一四 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
- 図版一五-1. 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
 - 2. 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
- 図版一六 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
- 図版一七 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
- 図版一八-1. 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
 - 2. 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
- 図版一九-1. 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
 - 2. 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
- 図版二〇-1. 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器
 - 2. 27 b 層出土の土製品
- 図版二一 27 b 層出土の後期第Ⅳ群土器底部
- 図版二二 後期第Ⅳ群土器の
 深鉢B類の内文
- 図版二三 後期第Ⅳ群土器の
 深鉢B類の内文
- 図版二四 後期第Ⅳ群土器の文様表出技法
- 図版二五 後期第Ⅳ群土器の
 器面成形、調整痕
- 図版二六-1. 貯蔵穴出土の石器
 - 2. 25層出土石器(1)
- 図版二七-1. 25層出土石器(2)
 - 2. 25層・23層下面出土石器
- 図版二八-1. 27 b 層出土石器(1)
 - 2. 27 b 層出土石器(2)
- 図版二九-1. 27 b 層出土石器(3)
 - 2. 27 b 層出土石器(4)
- 図版三〇-1. 27 b 層出土石器(5)
 - 2. 27 b 層出土石器(6)
- 図版三一 弥生時代前期土器(1)
- 図版三二 弥生時代前期土器(2)

第 I 章 遺跡の位置と環境

1. 周辺遺跡の分布と性格

津島岡大遺跡は、岡山大学津島キャンパス内に位置する縄文時代中期から近代にいたるまでの複合遺跡である。本遺跡は大学構内において実施されてきた遺跡の発掘調査によりその存在が明らかにされ、現在までの成果によると大学敷地内の西側の一部を除いて、ほぼその全体に



- | | | | |
|------------|-----------|-------------|--------------|
| 1. 宿古墳群 | 2. 不動堂古墳 | 3. タイミ山古墳 | 4. 一本松古墳群 |
| 5. 津島江道遺跡 | 6. お塚様古墳群 | 7. 津島岡大遺跡 | 8. 都月坂墳墓・古墳群 |
| 9. 七つ坑古墳群 | 10. 鳥山城 | 11. 神宮寺山古墳群 | 12. 津島遺跡 |
| 13. 広瀬遺跡 | 14. 南方遺跡 | 15. 上伊福遺跡 | 16. 津倉古墳 |
| 17. 上伊福西遺跡 | | | |

図1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/50,000)

広がりをもつものと推定されている。しかしながら、各時期毎の遺跡の分布やひろがり、当時の地形や周辺遺跡との関係等に左右されるところが大きく、複雑なありかたをしているようである。以下今次調査に係る時期の周辺遺跡を中心にして概観する。

津島岡大遺跡は岡山市内を南流する旭川により形成された沖積平野上に位置する。周辺における遺跡の性格や立地も、河川の堆積作用によって形成された自然堤防状の地形や微高地の形成と関係するものが多い。いまのところ最古の遺跡は操山山塊で採集されたナイフ形石器や細石器がある。人々が沖積平野に積極的に進出をみせるのは、縄文時代中期以降のようであり、津島岡大遺跡に近接した半田山丘陵下には中期末から後期にかけて形成された朝寝鼻貝塚がある。また百間川遺跡群では後期中葉の貝塚も発見されており、水産資源の活用を含めた活動が、沖積地を中心に展開されていた様子を物語るであろう。

後期以降の遺跡は、数の上では比較的多く、それらの大半が旭川の旧河道やそれにつながる樹枝状の小河川により形成された微高地を中心にして展開するようである。沖積平野における活発な活動は、晩期においても継続し、百間川遺跡群や津島岡大遺跡第3次調査などで、比較的豊富な遺物をともなう生活址が検出されているほか、本遺跡に近接する津島江道遺跡では、晩期の突帯文期（弥生早期とする考えもある）に遡るとされる水田の一部が発見されている。

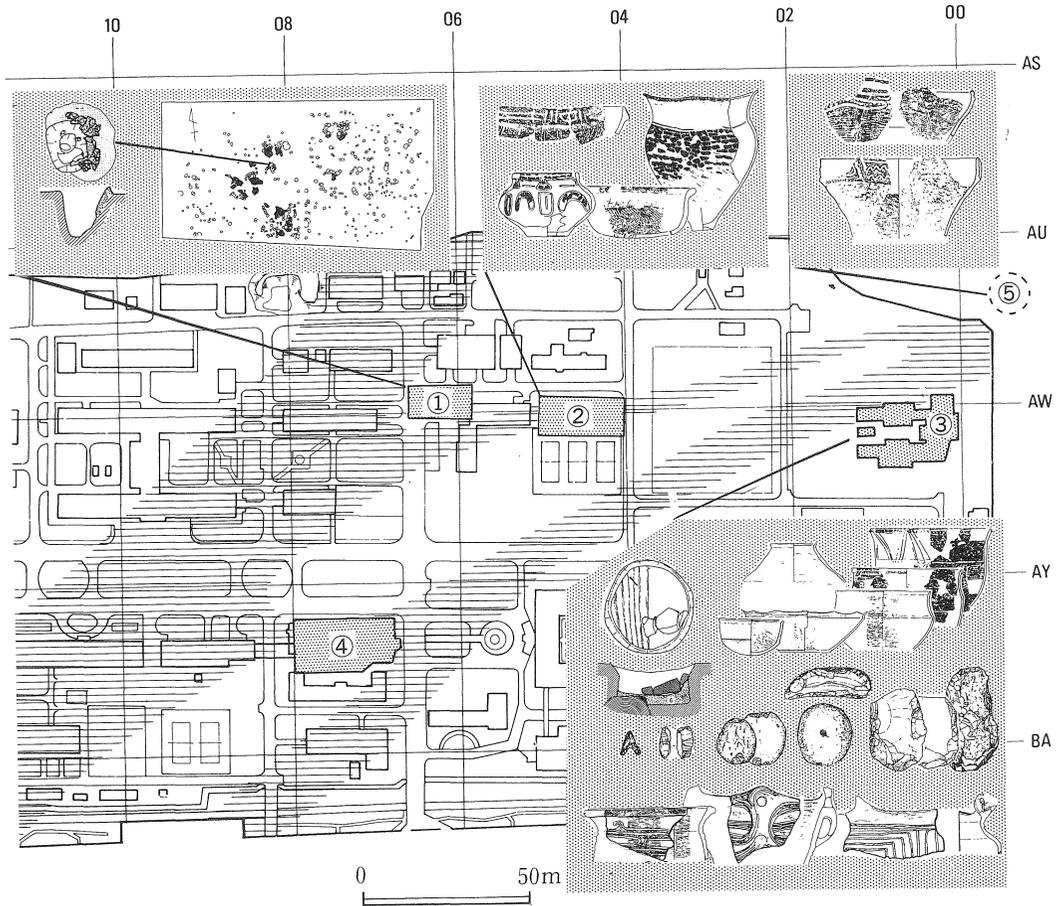
縄文晩期における農耕化の兆しを引き継いで、当地域には津島遺跡を代表とする弥生時代以降の水田経営が連綿と行われた。津島岡大遺跡や江道遺跡、百間川遺跡群などでは、前期の水田は微高地の縁辺を中心にして展開する。中期以降の遺跡では津島岡大遺跡をはじめ津島遺跡、南方遺跡、上伊福遺跡、鹿田遺跡、天瀬遺跡などがあり、遺跡数の上での増加がみられる。また水田域の拡大がみられ、水田経営のひとつの画期ともいえ、両者の現象はおそらく無関係ではない。前期以降の時期における旧河道の急速な埋積は、こうした土地利用史とも関係するであろう。また、弥生時代終末から古墳時代にかけて、本遺跡北方の半田山には都月坂墳墓、古墳群等の墳丘墓や古墳が造営され、水田の経営を中心にした安定した生産基盤のうえに地域社会が形成されていた事実が想定される。 (阿部)

参考文献

- 1 『岡山大学構内遺跡調査研究年報10』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993
- 2 「第一編 原始時代」『岡山県史（古代編）』1962 岡山県史編纂委員会
- 3 『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県史編纂委員会 1986
- 4 「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 古代吉備文化財センター 1993
- 5 『津島岡大遺跡』3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1992
- 6 「津島江道遺跡」『日本における稲作社会の起源と展開——資料集——』日本古考古学協会静岡大会実行委員会 1988
- 7 『岡山市埋蔵文化財地図』岡山市教育委員会 1983

2. 遺跡の立地と景観

旭川の氾濫により形成された沖積平野の発達した岡山市内は、縄文海進時に形成された旧児島湾の東側部分に相当する。この時期における浅海の侵入は、現在の倉敷市周辺に数多く分布する貝塚の形成にみられる様に、水産資源に多くを依存する縄文人の活動の舞台となった。縄文前期以降の海退と河川の埋積作用による沖積平野の発達が現在の岡山平野を形成した。市内には河川のと埋積と浸蝕によって形成された微高地が広く分布する。それらは時期毎に複雑な様相を見せるが、津島岡大遺跡の形成された縄文時代にあつては、後期以降に顕著となる小河川により開折された微高地を中心として、居住活動が展開されたものと推測される。



- ①工学部情報工学科棟(7次) ②工学部生物応用工学科棟(6次) ③男子学生寮予定地(3次)
 // 生体機能応用工学科棟(9次)
 ④大学院自然科学研究棟(5次) ⑤朝寝鼻貝塚(推定) (スクリーンは旧河道推定部分)

図2 津島構内における縄文時代遺物の出土状況(北東部分)

この沖積平野にはいまのところ縄文時代前期終末を最古とする人類活動の痕跡が残されているが、その活動が活発になるのは中期後半以降のようである。津島岡大遺跡の位置する地域では旭川東岸の四元遺跡で後期中葉の生活址が発見されている。ここでは堅果類の貯蔵穴や小規模ながらヤマトシジミを主体とした貝塚が形成されており、汽水域を控えた多角的な生産活動の展開が想定される。

また本遺跡の位置する沖積面に突出する半田山丘陵の南端下には、中期終末から後期の土器をともなう朝寝鼻貝塚が立地しており、沖積面あるいはそれを控えた地域での水産資源の活用を物語る。

岡山大学津島キャンパスは、北側に標高約160mのダイミ山を擁する丘陵が東西に横たわる、大きく見れば丘陵状の地形から沖積地に至る変換点を含む沖積面に位置する。現在の旭川は岡山市内を北から南に流れるが、縄文時代にあっては、その流路が幾分西に偏っていたようである。そのために津島キャンパスの位置する地域は、その支流による浸食と埋積作用が絶えることなく、各時代毎に複雑な様相をもつ地形変遷を遂げていたようである。

そうした地理的な景観のなかで、津島キャンパス内では、試掘調査や本調査によって、各地点に縄文時代の生活址が存在する事実があきらかになってきた(図2)。このなかには少量の遺



写真1 調査地点遠景 (西方より)

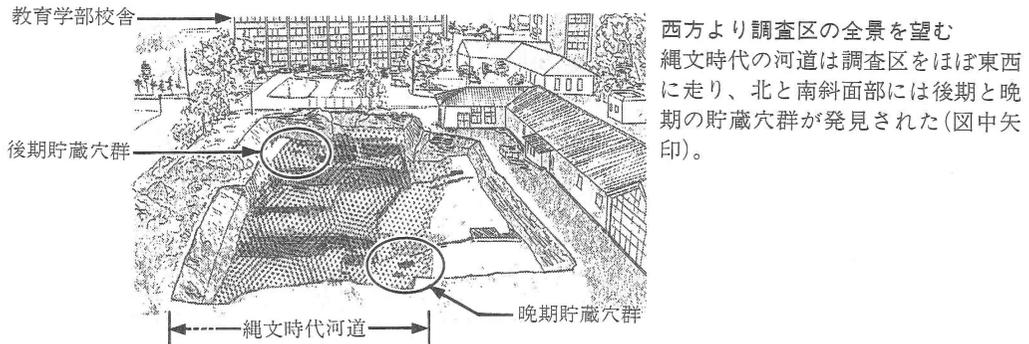


写真2 縄文時代の河道と貯蔵穴群の調査状況

物のみが散発的に出土しただけのものもあるが、学生部男子学生寮予定地(図2-③)や工学部生物応用工学科棟予定地(②)では、旧河道内に堅果類の貯蔵穴が検出され、また工学部情報工学科棟(①)や遺伝子実験施設予定地では、微高地上に炉址状遺構が検出されている。これらは、出土した遺物の特徴や、炭素による年代測定の結果から推して、いずれも縄文時代中期から晩期のものと推定されている。津島キャンパスは東西約1.4km、南北0.75kmの広さをもつが、そのなかにおける縄文時代遺跡の分布密度は今後の調査による新発見も予測に入れると比較的高いものと思われる。一定範囲内における遺跡の数的な密度の高さは、形成期間の比較的短い生活址あるいは、複数の活動拠点を残す居住形態の特徴であるかもしれない。狩猟具や撿携具などの石器類やそれらの加工具、そして旧河道の周辺に構築された貯蔵穴から出土した植物遺

体などの豊富な出土遺物からは、特定の生産対象に偏向することなく、周辺環境における潜在的な資源を多角的に利用するという生産形態の特徴が想定できるであろう。縄文時代後期から晩期にいたる期間に、こうした微高地と小河川という環境の遷移帯における活動が活発に展開されたという事実と、次期の水田稲作社会への傾斜は、遺跡立地の類似性という現象面だけでなく、縄文人の環境適応技術の蓄積という点においても、決して無関係なこととは思われない。

(阿部)

注 図2の作成にあたっては、山本悦世氏に教示いただいた。

参考文献

- 1 『百間川沢田遺跡3』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 1993 古代吉備文化財センター
- 2 鎌木義昌「第一編 原始時代」『岡山県史（古代編）』1962
- 3 『津島岡大遺跡』3 1992 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 4 『岡山大学構内遺跡調査研究年報』10 1993 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 5 『岡山大学構内遺跡調査研究年報』6 1988 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 6 『岡山大学構内遺跡調査研究年報』9 1991 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第II章 調査の経過と概要

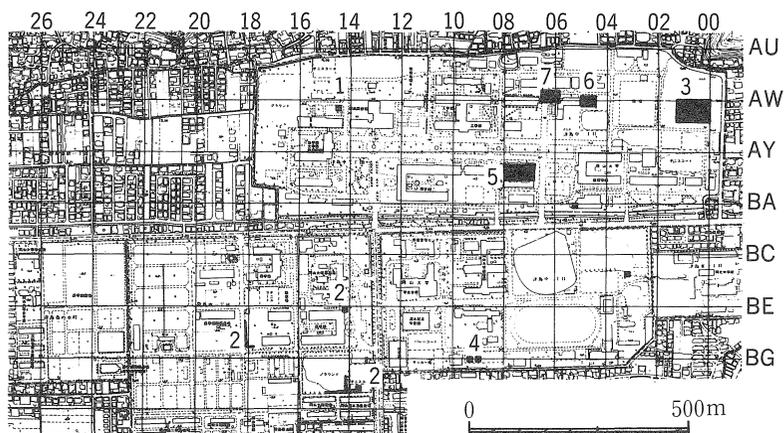
1. 調査に至る経過

津島地区に自然科学系の大学院研究科棟を建設する計画に伴い、当該地域の埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を1986年度に実施した。対象となった地域は、理学部の東側に隣接し、教育学部の西側にあたる。試掘調査は3箇所¹に3×3mの試掘坑を設定し、最深部では現地表から3m強に達する調査を実施した。その結果、須恵器片などのほかに多数の縄文土器および同時期に属すると判断される土坑群を検出した。こうした遺構・遺物は南側に設定した試掘坑に集中的に認められた。また、土層観察から、古墳時代以降は比較的高低差の少ない地形をなし、水田として利用されるが、縄文時代には南側が微高地に北側が低湿地であったことが想定された。この調査結果から、予定地域内の南に遺跡の中心が広がることが予想され、遺跡破壊を最小限に止めるためには建物の建設はより北側が望まれた。その後、1988年に入ってから計画が具体化し、対象地域の北寄りに建物位置が決定し、試掘調査結果を基にした計画に沿って、同年6月27日から発掘調査を開始した。(山本)

2. 調査の方法・目的と経過

a. 構内座標の設定と区割り

津島地区構内には、国土地理院第5座標系の南北軸座標値(X=-144,500m)と東西軸座標値(Y=-37,000m)を原点とした構内座標を設定している。その軸方向は、本地区の全体的な敷地の方向が、市街地中央部において認められる正方位の条里地割りと一致し、ほぼ東西南北に合致していることか



- | | |
|-------------|-----------------------|
| 1. 小橋法目黒遺跡 | 5. 大学院自然科学研究科棟(本調査地点) |
| 2. 農学部構内 | 6. 工学部生物応用工学科棟 |
| 3. 男子学生寮予定地 | 7. 工学部情報工学科棟 |
| 4. 屋内運動場 | ※数字は調査次に対応する |

図3 津島地区構内座標と各調査地点(縮尺1/15,000)

ら、真北に合わせている。そして、原点から一辺50mの間隔で方形に区切り、南北軸は北からAA～BG線、東西軸は東から00～48線として、50m四方の一区画は、その東北角で交わる二方向の線名を組み合わせ、AA00区のごとく呼称する（図3）。原点は半田山山塊の一部が大学の敷地に含まれるため、キャンパスから約900m北に位置している。

本調査区は構内座標AY06～08区およびAZ06・07区に位置する。調査にあたっては、構内座標で設定した50m区画の中をさらに5m間隔に細分したものを最小単位の区画とし、これを基準に各調査面ごとに記録を行った。

b. 調査経過

発掘調査は、既設建物の解体後、下に残る基礎とともに厚さ0.8～1.0mの造成土を機械で除去後、手掘りの調査に入った。

造成土直下の明治期層（2層）では南北に走る畝が明瞭に残存しており、攪乱の除去とともに検出を行った。畝の他には北端部に東西に走る溝を確認した。3～5層では土層の堆積状況から水田の存在が予想されたため、畦畔検出に努めたが、確実性の高いものを見いだすことはできなかった。近世層にあたる3層上面で野壺状遺構2基を、そして、中世にあたる4a層上面では、野壺状遺構2基と土坑5基を検出した。4a層上面の遺構群は、土層観察などから、上層からの掘削であることが判明し、いずれも近世あるいは明治期に属すると考えられる。

5層除去後、6～10層においても水田の可能性が予想された。精査の結果、調査区中央部において、6a層上面と7層上面の二面に畦畔を検出した。その両面に関しては、気球による写真撮影も実施し、記録に努めた。また、南側に広がる微高地上では、5層除去中に土手状の高まりを確認し、続いて、同層除去後、33a層を掘り込む形で同遺構に近接して走る溝を検出した。調査段階から両者の関係および帰属時期が問題となった。両者の関係については、土層関係あるいは遺構の切り合い関係から、溝の方が古いと判断された。時期は土手状遺構は弥生～古墳時代初頭に属する土器を伴う6a層によって形成されるが、周囲の覆土は5層（古代層）であることから古代に削り出された可能性もあり、古代以前という範囲で検討された。溝は弥生層を掘り込み埋没した後、上面を古代層に覆われていることから、その所属時期は弥生時代に属する可能性が高いが、上部削平も考えられるなど不確定要素も捨てきれない状況であった。

こうした調査を行っている段階で、今後のより効率的な調査計画を立てるために調査区内の随所に深掘を行い、縄文～弥生時代前期の地形あるいは遺構・遺物の残存状況を確認し、具体的な地形復元を試みた。その結果、同時期には、調査区中央部に河道がほぼ東西方向に走っており、その河道の南側斜面西端部および北側斜面の東半部に貯蔵穴群が、そして河道内を埋める埋土中（10～17層）には前期土器、北斜面には縄文後期土器がそれぞれ比較的まとまったかたちで堆積することが確認された。また中央ベルト付近および調査区の西壁側溝において、標

高0.7m前後の砂礫層中(27b層)からも縄文後期土器片が僅かに出土した。以上のデータから、遺構・遺物の在り方は、限定的な地域に集中する可能性が強いことが予想された。また、縄文時代のものは出土レベルが非常に低く、上部に無遺物層が厚く堆積部分が存在することも判明した。以上の結果から、全面調査は弥生層までとし、以下については、地域を限定して集中的な調査を実施することとした。

まず、7層水田の調査後、弥生前期包含層までを掘り下げた。この段階の地形は、南側には微高地部、中央部から北には谷部が東西に走る。谷部は縄文期の河道上にあたり、前期土器はその谷部の埋土中に含まれるが、特に、中央部を走る幅1m前後の流路部分(11・13・15・17層)と南の微高地斜面にかけて集中的に出土することから、調査区の南半部に重点が置かれた。

縄文時代には、地形は南側の微高地に加え、北部分にも緩やかに立ち上がる微高地が形成されている。南側では弥生前期層除去以後、微高地斜面下端において晩期後半に属する貯蔵穴3基が検出された。いずれも調査区の西端部に近接した位置にある。遺物は非常に希薄で、周辺部から突帯文土器の小片が僅かに出土する程度であった。微高地部は砂層あるいは砂礫層によって形成されるが、いずれからも遺物の出土は見られなかったことから、上面(33a層)までを調査して終了した。一方、北側斜面及び河道内においては、後期に属する遺構・遺物が検出された。まず、北側斜面部では弥生前期対応層除去後、縄文晩期対応層が確認されたが、遺構はいうまでもなく、遺物もほとんど出土しないことから、その下の後期包含層の調査に移った。後期の遺物は斜面に張りつく形でまとまって出土し、その直下に貯蔵穴群が検出された。検出された8基の貯蔵穴は、東に集中的に認められ、西に向かっては地形に沿ってやや北にその位置をふる傾向を見せ、遺物の分布域とはほぼ一致していることが窺われた。調査は、両者の広がり限界を確認しつつ、範囲を設定し、貯蔵穴の基盤層(25b層)までを実施して終了した。河道底部で確認されていた遺物は、地表下3.7m(標高0.7m前後)の砂礫層に含まれ、無遺物の間層が上部に厚く堆積していることから、人力による除去は困難であると判断し、上部の調査がすべて終了後、重機を使用することとした。遺物包含層となる砂礫層上面(27b層)までの土層除去後、新たに5m区画のグリッドを設定し(S-1～9区、N-1～9区)、出土位置の記録を行った。遺物は砂礫に混在した状態で、27b層からコンテナ30箱程度の量が出土した。その他に、一部29層においても少量の遺物を採集している。最終的には、土層の確認を行うために、南微高地側に深掘をいれたところ、湧水層に当たり、それ以上の調査は不可能となった。調査員は4名が中心となって行い、後半はさらに2名が参加した。調査面積は1,537㎡である。期間は1988年6月29日～1989年3月19日である。

また本体部分の調査終了後、調査区北側に工事用道路の設置が必要となり、1989年4月19、20日に追加調査を行った結果、近世の溝1条と弥生時代水田の畦畔を検出した。(山本)

3. 調査組織

管理委員	高橋 克明(学長)	石井 旭(教養部長)
	坪井 清彦(文学部長)	小合 龍夫(自然科学研究科長)
	秋山 和夫(教育学部部長)	河崎 利夫(資源生物研究所長)
	上野 雅和(法学部長)	佐藤 二郎(附属図書館長)
	土生 芳人(経済学部長)	田邊 剛造(医学部附属病院長)
	富島 康雄(理学部長)	井上 清(歯学部附属病院長)
	金政 泰弘(医学部長)	松井 義人(地球内部研究センター長)
	加藤慶二郎(歯学部長)	坂田 洵(学生部長)
	大和 正利(薬学部長)	喜多嶋康一(医療技術短期大学部主事)
	鳥居 滋(工学部長)	城倉 英人(事務局長)
	長堀 金造(農学部長)	近藤 義郎(本センター長)
幹事	川崎 晃(庶務部長)	倉部 隆司(経理部長)
	上村 保人(施設部長)	
運営委員	近藤 義郎(文学部教授・センター長)	小田嶋梧郎(歯学部教授)
	本田 和男(工学部教授)	山本 悦世(文学部助手・調査研究室長)
	中山 沃(医学部教授)	上村 保人(施設部長)
	定兼 範明(教養部教授)	
調査主体	高橋 克明	岡山大学学長
調査総括	近藤 義郎	埋蔵文化財調査研究センター長(文学部教授)
調査員	入倉 徳裕	埋蔵文化財センター調査研究員(文学部助手)
	若林 卓	埋蔵文化財センター調査研究員(文学部助手)
	高橋 進一	埋蔵文化財センター調査研究員(技術補佐員)
	安井 宣也	埋蔵文化財センター調査研究員(技術補佐員)
	石坂 俊郎	埋蔵文化財センター調査研究員(文学部助手)
	山本 悦世	埋蔵文化財センター調査研究員調査研究室長(文学部助手)
調査補助員	福田 真久	岡山大学学生
	前原 伸也	〃
	竹内 浩一	〃
	中塚 孝信	〃
	朴 基柱	〃

4. 調査の概要

近代(2層)：南北に走る畝が70cm間隔で明瞭に残存する。また、調査区北端部には東西にはしる溝を確認した。長期間にわたる利用が窺われ、位置的にも条里関係の溝と考えられる。

近世(3層)：水田層が広がる。そのほかに野壺状遺構4基と土坑5基が存在する。

中世(4層)・古代(5層)：水田層が広がる。4b層には多数の古代土器が含まれることから、中世段階の大規模な造成の存在を窺うことができる。また、5層の調査において南側の微高地上で土手状遺構が検出されている。幅約70cm、高さは5cmで、微高地の縁辺をやや弧を描いてめぐる。6a層で形成されているが、古代水田に伴って削り出された可能性が考えられる。

古墳時代初頭(6層)：弥生時代あるいは古墳時代初頭の遺物が主に認められる。調査区中央部においては、6a層上面で水田畦畔を検出した。砂で被覆されておらず、遺存状態は明瞭とはいえないが、微高地に沿って段状を呈することが予想された。また南側の微高地上では、土手状遺構が認められる。時期が確定できないことから古代のところでも挙げている。

弥生時代(7～17層)：南側の微高地上では6層下面(33a層上面)において、幅30cm、深さ10cmの溝を検出した。土手状遺構と近接して走り、やはり微高地縁辺をめぐる。7層上面では、水田畦畔を検出した。状況は6a層に類似する。8・9層も水田層の可能性が高いが、畦畔は確認されなかった。9層は18層の再堆積土と判断され、造成の存在を窺うことができる。10～17層は弥生時代前期～中期に存在した谷部分の埋土あるいは谷部内に走る流路の埋土である。弥生前期から中期初頭にかけて急速に谷が埋没し、平坦化が進む状況が看取される。また、前期土器がこの流路を中心として出土している。

縄文時代晩期～弥生時代前期(18・19～24層)：18層津島地区で特徴的な「黒色土」である。微高地の肩部に僅かに残存する程度で遺構等は確認されていない。上部がカットされた様相を呈す。

19～24層はいずれも粘土層である。泥炭層的なものも認められ、自然環境は湿地的様相を示す。遺構は調査区中央部を東西に走る河道部分の南側斜面下端において、貯蔵穴3基を確認した。いずれも調査区西端部にあり、規模は径1m程度の丸い土坑で、2～4m間隔で配される。堅果類の残存は僅少であり、完全に使用済みで廃棄された貯蔵穴である。遺物も少なく、突帯土器の小片が僅かに確認されるのみである。

縄文時代後期(25～29層)：堆積土は晩期とは異なり、砂・砂礫と流木・木質包含層の互層状態を基本としており、水量の豊かな状態が看取される。遺構・遺物は調査区中央部を東西に走る河道部分の北側斜面および底部において検出された。北側斜面では下端付近に貯蔵穴7基が集中し、その上面を覆う状態で遺物が一括出土した。貯蔵穴は径1～2mの円形～不整形を呈し、深さは60～90cmである。現状では底部にかなりの湧水が認められる。その大半は、量の差

はあるが、堅果類を貯蔵した状態を示す。完形の深鉢を取めたものもあり、良好な資料となっている。遺物は谷部の底部で、標高0.7m前後の27b層中から砂礫に混在した状態で、コンテナ30箱程度の量が出土したほか、29層においても少量ではあるが採集している。赤色顔料を塗布した耳栓・櫛、双口土器なども含まれる。(山本)

5. 整理作業の経過

発掘調査の終了後に計画された整理分析作業は、報告書の作成に向けての調査記録の基本的な整理と出土遺物の洗浄、注記作業をはじめに行い、その終了を待って調査と成果の概要を報告した(岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1989)。

縄文時代後期より近代にいたる連綿とつづく生活面の調査の成果のなかで、質、量ともに大きなウェイトを占めるのは、縄文時代の旧河道の斜面に構築された貯蔵穴群の発見と、それとともに出土した土器や石器などの人工遺物と、貯蔵穴内に遺存した植物遺体であった。またそうした遺構、遺物を包含した縄文時代後期の文化層の形成以後、河道は次第に埋没し、弥生時代後期以降の水田開発に伴い規模のおおきな地形の改変が行われるという、複雑な土地利用の変遷が明らかにされた。こうした自然埋没と人工的な改変にともなう土砂の移動は、調査区域内に複雑な土層の堆積となって現れた。残された記録を手掛かりに、地形の変遷と人間活動の対応関係を復元するには、いくつかの困難がともなったが、調査の当初の成果を損なうものではなかった。

基礎的な整理を終了した段階で本格的な整理分析が計画され、そこでは縄文時代後期の生活址と、そこから出土した遺物をできるだけ客観的に資料化し、今後の活用に耐えうるものとするために、遺物の図化に限らず出土層位や出土地点、出土量といった情報もできる限り加えた。また発見された遺構や出土した遺物から、遺跡や遺物の特性を多角的に分析するために、(1)縄文土器の型式学的分析、(2)製作技術論的分析、(3)石器の技術構造論的分析などの考古学的手法による分析に加えて、(4)土器胎土の粒度分析、(5)土器に付着した炭化物の分析、(6)植物遺体の同定、(7)土器胎土内のプラントオーバー分析を計画し、これらの自然科学的な分析については外部に依頼した。こうした分析の成果は個別的な成果としての意義とともに、相互の関係性にもとづく歴史的な叙述が今後計画されなければならない。本報告は発掘調査の記録と、約2年間の整理期間のあいだに得られた、いくつかの目的意識と展望に基づいた整理作業の成果の記録である。(阿部)

参考文献

『岡山大学構内遺跡調査研究年報』6 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1989

第三章 調査の記録

1. 層序と地形

土層堆積状況は、周囲の壁面に加え、中央に設定した南北土手の観察によって確認した。また、調査の過程で、調査区内に縄文時代～弥生時代前期に東西方向の大規模な谷地形が復元されたことから、随所に、それに直交する南北土手を設定し、全体的な土層関係の把握に努めた。ここでは、中央部の南北土手の観察から、全体の土層堆積を概略する。

1層：花崗岩媒乱土で、1907年の陸軍屯営地造営に伴う造成土である。上面は標高4.2～4.4m（以下標高は略す）に位置する。

2層：灰色粘質土である。上面は3.7mに位置し、1907年の造成によって密閉された畝が残存する。出土遺物から近代に属すると思われる。

3層：灰褐色粘質土で上面は3.6mを測る。粘性の違いによって、上からa～c層に三分される。b層はやや砂質を帯びる。乾田に特有の酸化鉄とマンガンの斑紋集積層の連続が顕著に認められる。b・c層からは近世の陶磁器類が出土しており、本層の時期を示している。

4層：上面は3.3mに位置し、a・b層に分けられる。a層は灰褐色粘質土を基調とし、3層と同様に酸化鉄とマンガンの斑紋集積層の連続が顕著である。色調の明暗によってさらに二層に細分可能である。b層は灰色砂質土で、酸化鉄・マンガンの集積は認められない。出土遺物の中には、古代の遺物のほかに13世紀あるいは14世紀に入るものを含んでいる点から、14世紀の段階に古代層にまで達する造成が行われ、その時点で形成された中世の土層と判断される。また、a層からは13・14世紀代の遺物が出土しているが、b層との関係からその堆積時期は中世後半（14世紀後半～15世紀）と考えられる。

5層：黄灰色粘質土を呈し、比較的粘性が強い。古代の遺物が出土しており、本土層の時期を窺うことができる。上面は3～3.1mを測る。

6層：上面は2.8～3.1mに位置する。黄灰色粘質土を基調にするが、a～c層に三分され、中間のb層は灰色を強める。分布の南限はa層は南微高地上の土手状遺構まで、b・c層は徐々に北にずれ、時間とともに堆積が低位部（旧谷部の上部）から微高地部にまで広がる状態が認められる。そのため、層厚は微高地部に薄く、低位部に厚い。a層は土手状遺構や水田畦畔を形成している。本層の時期は、縄文時代晩期～古墳時代初頭の遺物が出土していることから、古墳時代初頭に中心があると考えられる。

7層：暗灰褐色粘質土である。低位部にのみ堆積し、南の微高地上には認められない。上面は

低位部中央部で2.5m、南端部で2.9m、北部分で2.7mにあり、ややたわんだ状態をみせる。層厚は比較的均一である。水田畦畔が検出され、遺物は弥生土器が出土している。弥生中期～後期の範囲で所属時期が考えられる。

8層：淡黄褐色粘質土で低位部のみに堆積し、南の微高地には広がらない。上面は南から北に向かって2.7m・2.3m・2.5mと変化し、層厚もばらつきが大きい。南端部では、下半部で茶色が強まり、細分も可能である。所属時期は、土層関係から弥生時代中期の可能性が高いが、後期にまで下ることも考えられる。

9層：暗茶褐色粘質土で、酸化マンガンの粒状斑紋が顕著にみられる。分布域は限定的で、南微高地の肩部をめぐる状態で堆積する。上面は2.9～3.0mに位置し、谷部に向かって2.5mまで下降する。上面は段状を呈し、弥生前期土器が含まれる。土質は18層（津島地区では縄文晩期後半～弥生前期に形成される黒色土）に類似するが、やや砂質が強く、均質性に欠けることから、18層の二次堆積土としての性格を有するものと判断される。時期は弥生前期後半（～中期）と考えられる。

10層：谷部から北に向かって堆積する。上面は南半部で2.5m前後、北半部では2.3～2.4mを測る。層厚は北端部付近で厚く、a・b層に二分される。この周辺は、縄文時代にはやや低い微高地が形成されているところで、その影響によるものかもしれない。a層は暗黄褐色砂質土、b層は暗灰色粘質土で黄褐色砂を含む。いずれも酸化鉄・マンガンの集積が認められる。弥生前期の遺物が出土しており、該期に属すると考えられる。

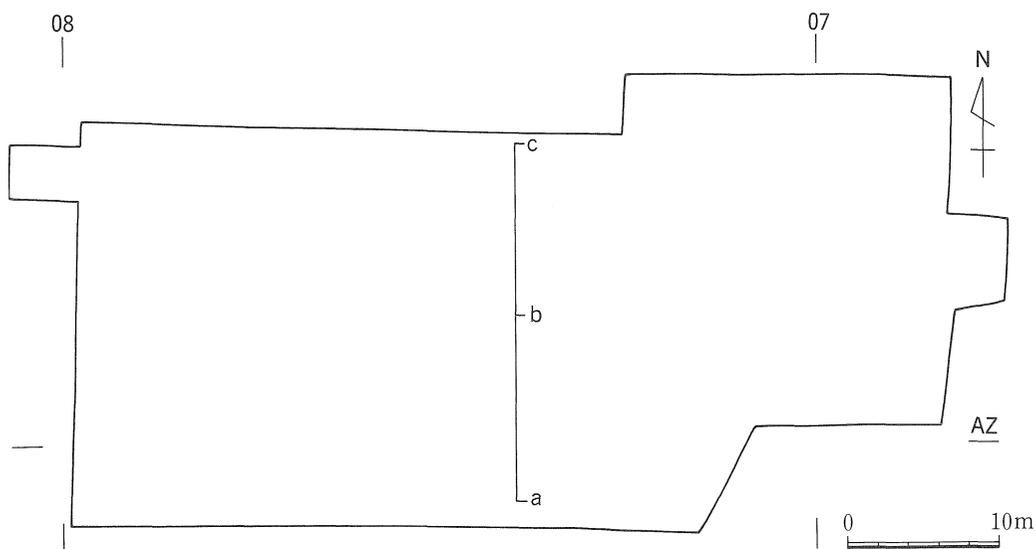


図4 調査区土層断面位置図（縮尺1/500）

11層：12層をえぐる灰褐色砂で谷部中央を走る流路の埋土である。弥生前期土器が出土した。

12層：谷部分から北に向かって堆積し、その性状から三分される。a層は灰茶褐色土～砂質土で、マンガンの集積を見る。分布域は11層周辺から南にかけての谷部内である。上面は2.4mを測る。b層は灰褐色粘質土でa層の北に続いて谷部内に堆積する。上面は2.1～2.2mに位置する。c層は暗灰褐色粘質土である。b層の北側に続き、調査区北端の縄文時代の微高地上を覆う。上面は2.3mである。各層はいずれも黄褐色系の砂を少し含み、漸移的变化を見せる。a・b層からは弥生前期の遺物が出土しており、本層の時期を示す。

13層：11層同様に谷中央部を走る流路の埋土で、14層を挟む形で堆積する。大きくは二分される。a層はやや南よりの流路内埋土で、灰褐色粘土混細～粗砂である。下半の方が砂質が強く砂の目も粗い傾向が認められる。b層はやや北よりでa層に切られた状態を示す灰褐色細砂層である。上下層の関係から弥生前期に属することは明白である。

14層：谷部のみ堆積し、南北の微高地上には認められない。13層が埋積する流路の南側ではa層(灰褐色砂混粘質土～灰褐色粘質土)が堆積し、下半では粘性を強める。上面は2.2～2.3mにある。流路の北側に堆積するb層は砂の包含率が高く、暗灰褐色～青灰褐色粘(質)土と青灰色砂が互層に堆積する。13層が埋積する流路からの砂の流出が広がったものと考えられる。上面は1.9～2.1mにある。全体にマンガンの沈着が認められる。弥生前期に属する。

15層：11・13層と同様に、流路の埋土で、16層を挟んでいる。黒灰色粘土と灰白色細～粗砂の互層によって形成される。最下面には粗砂が溜まる。

16層：14層と同様に谷部分にのみ堆積する。上面には15層の流路周辺の2.1mを頂部に南側で2.0m前後、北側で1.8m前後に至る。そのため層厚もかなりの差を見せる。また、斜面部では2.1～2.2mまで上がる。15層の南側では灰褐色粘質土(a層)であるが、北側では砂の包含率が高く青灰色砂混粘土層(b層)を成す。14層と同様に流路内埋土(15層)からの砂の流出の影響が考えられる。a層からは弥生前期の遺物が出土している。

17層：11・13・15層と同様に、谷部中央を走る流路の埋土である。19層を挟む。黒灰色粘土と灰色細～粗砂の互層によって形成される。下半では砂が粗くなる傾向が認められる。いずれも僅かに炭が含まれる。

以上、10～17層は谷部を埋める弥生前期の土層と判断される。

18層：南微高地肩部をめぐる土層で、上面は2.7mから下降し、2.2mまでは確認される。暗茶褐色粘質土を呈し、マンガンの沈着が顕著である。津島地区で「黒色土」と通称されている縄文晩期後半～弥生前期に形成される鍵層に対応する。本来は南微高地上にもう少し広がると考えられるが、9層によって削平されている。弥生前期土器が出土している。

19層：河道部分にのみ堆積する青灰色粘土で、比較的均質である。炭を僅かに含む。遺物量は

少ないが、突帯文土器が認められる。上面は流路（17層）より南側で約2.0m、北側で1.7m前後を測り、北側に低い傾向を示す。斜面部分では2.2～2.1mまで上昇する。

20層：19層と同様の堆積範囲を見せる。上面は流路（17層）以南では1.8m、以北では1.7～1.6mを測る。黒色粘土で炭化有機物を多量に含み、非常に明瞭に区別される層である。僅かな出土遺物から縄文晩期後半の層と考えられる。

21層：南側の微高地の斜面部分を形成する。上面は2.7mで、北に向かって下降し北端は1.8mに至る。黒灰色粘土層で、白色砂と若干の炭を含む。a層はやや砂質を帯びる。b層が晩期貯蔵穴の基盤層となっている。

22層：北側の微高地を形成する。上面は2.1mにあり、層厚は厚く50cm程度が認められるが、南に向かって下降し1.6mに至る。a層は黒褐色粘土層で、茶褐色砂と少量の有機物が含まれる。b層は黒色粘土層で、炭化物と有機物を少量含む。土層関係から21層に対応する層と判断され、縄文晩期に属する可能性が高い。

23層：河道部分下半を厚く埋める黒灰色粘土層である。上面は1.7～1.5mを測り、北に向かって下降する。層厚は厚く約50cmである。出土遺物から縄文晩期後半の時期が考えられる。

24層：23層の下部に堆積する淡灰色粘土～粘質土である。上面は南端部で1.4m、河道付近で1.3m、北半部で1.1mを測り、北端部で低くなる。北側上半部には上層との漸移層が一部で認められる。上下の土層関係から縄文後期後葉あるいは縄文晩期に属すると考えられる。

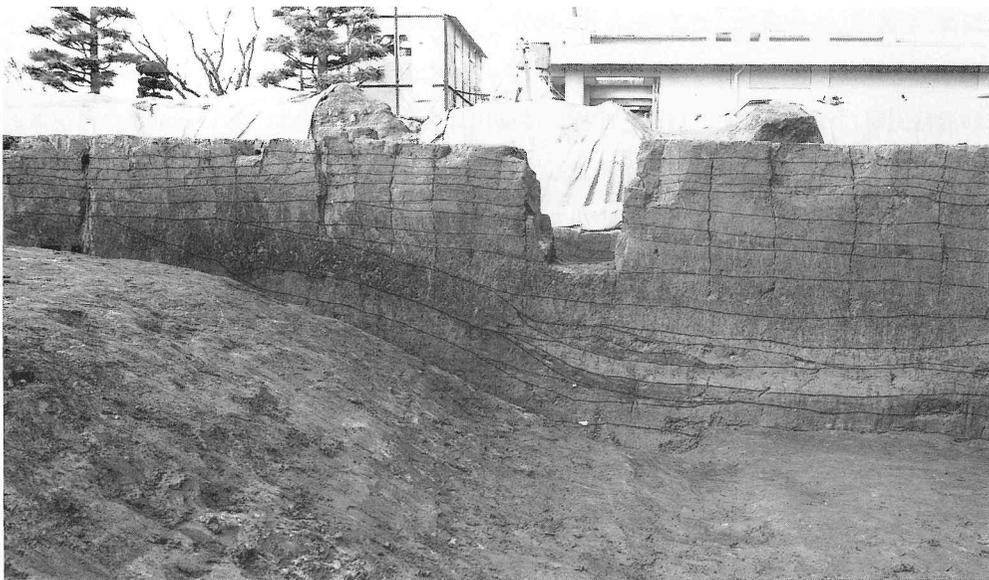


写真3 縄文時代河道内における土層の堆積状況（AY07-80ライン：東方より）

25層：北側の微高地を形成する緑灰色砂質土である。上面は1.6mを測り、層厚は60cm程度である。包含物の差によってa・b層に二分される。本層の主体をなすb層は比較的均質で汚れが少なく、縄文後期の貯蔵穴の基盤層を成す。a層は暗緑灰色粘質土で、b層上面に薄く堆積し、炭などの包含からやや暗い色調を示す。貯蔵穴が集中する調査区東半部では、炭・焼土粒を伴い、多数の縄文後期中葉の遺物を含む。

26層：河道部中央付近から北に向かって堆積し、北側微高地（25層）の下部に広がる。茶褐色土あるいは茶褐色砂質土をベースに流木あるいは木質を多く含む。炭も認められる。上面は0.9m前後～1.1mを測る。

27層：砂礫層（礫は2～5cm大）である。木質を多く含むほか、暗青灰色粗砂・炭も認められる。下半のb層にはそのほかに縄文後期中葉の遺物が包含されている。河道部中央部の底に堆積し、南北の微高地部の下部までは広がらない。上面は0.7～1.1mである。

28層：灰茶褐色土～砂層で、木質・流木を含む。上面は0.6m前後である。

29層：灰色砂で、含まれる木質は僅かである。縄文後期後葉の土器が含まれる。上面は0.4m前後である。

30層：灰茶褐色土で、木質を含む。上面は0.3m前後である。

31層：砂礫層である。木質は少なく、粗砂を含む。a層は灰褐色粗砂、下層のb層では明橙褐色粗砂を含む。上面は0.2m前後である。

32層：茶褐色土で、木質を含む。上面は0m前後である。

以上27層～32層は、一部の深掘地点で確認したものであるため詳細は不明であるが、基本的には砂礫あるいは砂層で、木質を含む層と含まない層が互層に堆積する状態を示す。

33層：南側に微高地を形成する。上面は2.7mで、層厚は厚く、全体で1.2～1.3mにおよぶ。色調の差などによって、a～f層に分けられる。a層は暗黄褐色細砂、b層は暗黄褐色粗砂、c層は暗灰褐色粗砂、d層は明橙褐色粗砂、e層は暗灰褐色粗砂、f層は青灰色粗砂である。酸化鉄の沈着が顕著であるが、上部のa・b層にはマンガンも認められる。遺物は未確認であるが、試掘調査では、a層に当たる上面から縄文後期前葉～中葉の土器が出土している。

34層：上面は約1.5mにある砂礫層である。木質は僅かで、一部に茶褐色～暗灰色砂を挟む。礫の大きさは、上半では2～5cmであるが、下半では10cm程度の礫も包含され、下半に向かって大きなものを含む傾向が認められる。無遺物層である。南微高地下部から北に向かって認められるが、調査範囲が狭いことから、北に広がる28～32層との関係は不明である。

35層：粗砂を僅かに含む砂礫層である。礫の大きさは2～3cmのものも認められるが、10cm前後のものが中心である。無遺物層で、堆積範囲及び28～32層との関係も34層と同様である。上面は1.2～0.9mで北に向かって下降する傾向を見せる。

36層：一部の深掘り部分で35層下部に確認された暗青灰色粗砂層で、礫を僅かに含む。分布域など詳細は不明である。上面は0.7mに確認されている。

以上、各層に関しての概略を行ったが、ここで、地形を復元しながら全体の状況をまとめてみよう。

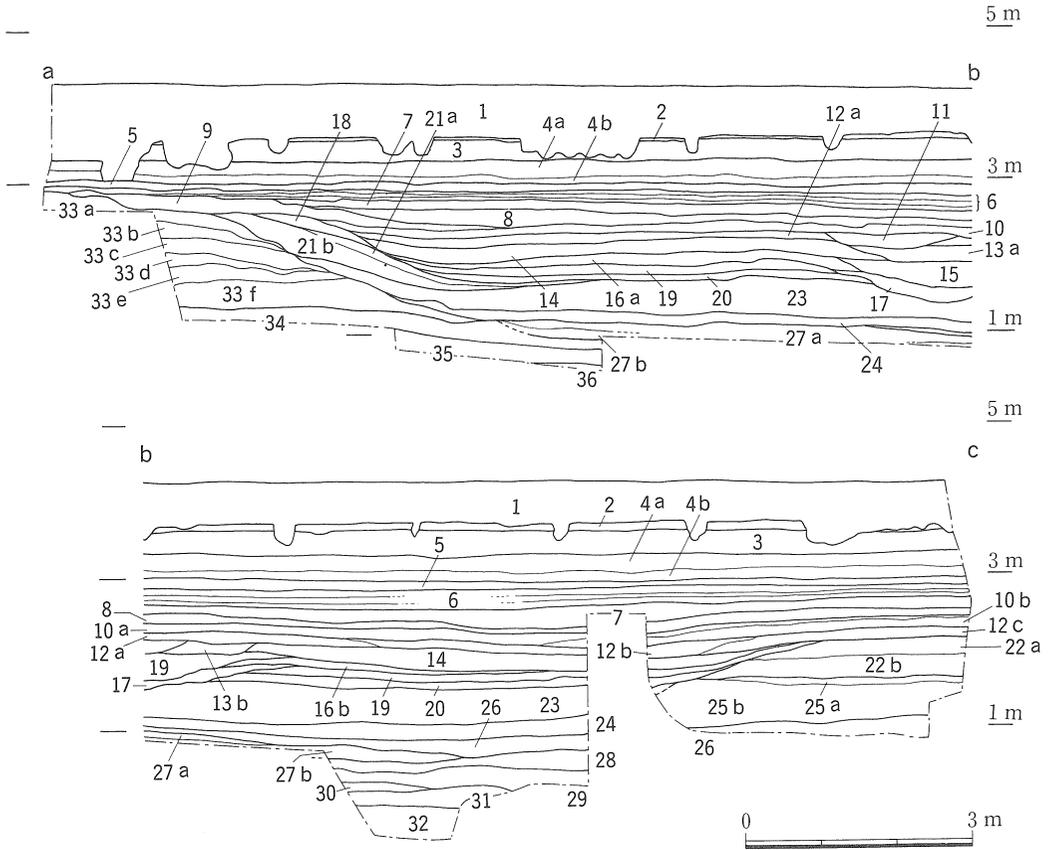
まず、縄文後期以前の状況である。25層以下の層が含まれる。それらを大別すると、微高地部を形成する33層（南微高地）と25層（北微高地）、河道部に堆積する砂礫層（34～36層）および木質包含層と砂層の互層堆積（26～32層）とにまとめられる。河道部に堆積する両層群に関しては、木質もほとんど含まない無遺物層である砂礫層が南に高く、北に向かって落ち込む傾向があることから、まずその砂礫層が33層の砂の高まりを伴って南側の微高地を形成し、その北側の下降部分に後者の互層群が堆積した可能性が考えられる。そして、次に、北側の微高地（25層）が形成され、貯蔵穴の構築・埋没が行われる。こうした過程は、遺物の時期から比較的急速に進んだものと判断される。ただし、調査範囲の狭小さからその関係はやや不明確な部分も残る。

晩期後半（突帯文土器を中心とする）には19～24層が堆積する。前段階に形成されはじめた北側微高地は、依然として南側よりも約1.1mも低い状態であった。その上部に引き続いて22層が堆積し、北側微高地の発達を進める。この段階で、その差は50cm程度まで縮まる。一方、河道部分では、24層から19層まで粘土の堆積が進むが、その中で、23層から20層にかけては泥炭化が進んでおり、20層では特にその傾向が強くなる炭層のような状態を呈す。後期段階に見られるような水量の豊かな水流の存在は陰をひそめ、泥湿地的な状態が広がっていたことが想定される。南側の貯蔵穴はそうしたなかで構築されている。

この状況は弥生前期に入るまで続いたようで、21層の上部に晩期から弥生前期に属する黒色土系の18層が認められる。また、河道部分は埋積が進み谷地形へと移行し、急速に埋没が進む。17層から10層までがその埋土で、中央部に豊かな水量を有する流路が走り、数度にわたってそこからあふれ出した砂が、特に北半部を中心に広がり、粘土層と互層状態を形成する。その結果、最大1.5m前後の比高差を有していた谷部分は、前期段階に30cm程度の差にまで埋没し、低位部として痕跡をとどめる。

それを受けて、弥生時代中期・後期には水田が従来の谷部上にまで広がりをみせ、水田域の拡大が進み、以後、近世、近代に至るまで水田が継続的に営まれる。ただし、その間に、古代には弥生層にいたる造成が、そして中世には古代層に達する造成がそれぞれ行われた可能性が高い。中世段階の造成では、調査区内の平坦化が完成され、高低差はほとんど消失する。以後、大きな地形の変化はない。

（山本）



- | | | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p><近代～現代></p> <p>1. 造成土</p> <p><近代></p> <p>2. 灰色粘質土</p> <p><近世></p> <p>3. 灰褐色粘質土
(遺物、Fe・Mn 集積層)</p> <p><中世></p> <p>4a. 灰褐色粘質土
(遺物、Fe・Mn 集積層)</p> <p>4b. 灰色砂質土(遺物)</p> <p><古代></p> <p>5. 灰色粘質土(遺物)</p> <p><古墳時代></p> <p>6. 黄灰色粘質土(遺物)</p> <p><弥生時代></p> <p>7. 暗灰褐色粘質土(遺物)</p> <p>8. 淡黄褐色粘質土</p> <p>9. 暗茶褐色粘質土(Mn、遺物)</p> <p>10a. 暗黄褐色砂質土(遺物、Fe、Mn)</p> <p>10b. 暗灰色粘質土(砂、遺物、Fe、Mn)</p> <p>11. 灰褐色砂</p> <p>12a. 灰茶褐色土～砂質土
(暗黄褐色砂少、Mn、遺物)</p> <p>12b. 灰褐色粘質土(遺物、黄褐色砂少)</p> <p>12c. 暗灰褐色粘質土(黄褐色砂少)</p> | <p>13a. 灰褐色粘土混細～粗砂</p> <p>13b. 灰褐色細砂</p> <p>14a. 灰褐色砂混粘質土～粘土(Mn)</p> <p>14b. 暗灰褐色～青灰褐色粘(質)土と
青灰色砂の互層(Mn、炭若干)</p> <p>15. 黒灰色粘土と
灰白色細～粗砂の互層</p> <p>16a. 灰褐色粘質土(遺物)</p> <p>16b. 青灰色砂混粘土</p> <p>17. 黒灰色粘土と灰色細～粗砂の互層
(炭若干)</p> <p><縄文時代晩期～弥生時代前期></p> <p>18. 暗茶褐色粘質土(Mn、Fe、遺物)</p> <p><縄文時代晩期></p> <p>19. 青灰色粘土(白色砂・炭僅少)</p> <p>20. 黒色粘土(遺物、炭多)</p> <p>21. 黒灰色粘土(白色砂・炭若干)
[a層はやや砂質]</p> <p>22a. 黒褐色粘土
(茶褐色砂・有機物少)</p> <p>22b. 黒色粘土(炭・有機物少)</p> <p>23. 黒灰色粘土(遺物、炭少)</p> <p>24. 淡灰色粘(質)土(炭少)</p> <p><縄文時代後期></p> <p>25a. 暗緑灰色粘質土(炭少)</p> <p>25b. 緑灰色砂質土(炭少)</p> | <p>26. 茶褐色土～砂質土
(木質、流木、炭)</p> <p>27a. 砂礫 [礫は2～5cm大]
(木質、炭、暗青灰色粗砂)</p> <p>27b. 砂礫 [礫は2～5cm大]
(木質、炭、遺物多、暗青灰色粗砂)</p> <p>28. 灰茶褐色土～砂(木質、炭少)</p> <p>29. 灰色砂(木質、炭少、遺物)</p> <p><縄文時代後期以前></p> <p>30. 灰茶褐色土(木質、炭少)</p> <p>31a. 砂礫
(木質、炭少、灰茶褐色粗砂)</p> <p>31b. 砂礫
(木質、炭少、明褐色粗砂)</p> <p>32. 茶褐色土(木質、炭少)</p> <p>33a. 暗黄褐色細砂(Mn、Fe)</p> <p>33b. 暗黄褐色粗砂(Fe、Mn)</p> <p>33c. 暗灰褐色粗砂(Fe)</p> <p>33d. 明橙褐色粗砂(Fe)</p> <p>33e. 暗灰色粗砂(Fe)</p> <p>33f. 青灰色粗砂(Fe)</p> <p>34. 砂礫 [砂礫は2～10cm大]
(茶褐色粗砂、木質少)</p> <p>35. 砂礫 [砂礫は10cm前後大]
(粗砂、2～3cmの礫、木質少)</p> <p>36. 暗青灰色粗砂(礫少)</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

図5 調査区内土層断面図 (縮尺1/100)

2. 縄文後期土器の分類

今回の調査では、縄文時代の旧河道より大量の縄文後期の土器が出土した。それらは多くの複雑な特徴をもつので、ここでは事実記載の便宜をはかるために、まず初めに既存の型式編年を基準にした、大別をおこなう。

出土した土器は後期を（初頭）、前葉、中葉、後葉、（終末）と大きく区分した場合、初頭から中葉に含まれるものであり、広域編年の上で指標となる関東地方との平行関係は、初頭が称名寺式に、中葉が加曽利B式に平行関係を想定できる。本遺跡の後期土器の年代的な上限と下限はこの年代的な枠組みを基本にすると、後期初頭から中葉の時期のものとして位置づけられる。

以上の編年観と区分法から、本遺跡の土器群を大きく4群（第Ⅰ～Ⅳ群）に分類した。これらは互いに型式学的に良く連続しているという訳ではなく、あいだにいくつかの既存あるいは未命名の型式が入る余地を残すものであったので、ここでは年代差を基準に古から新へと配列した。

第Ⅰ群：太い2本の沈線によって描かれたモチーフに縄文を充填するもので、後期初頭の中津式に比定できるものをまとめた。

第Ⅱ群：2乃至3本の沈線によりモチーフを描き内部に縄文を充填するもので、鉢や深鉢といういくつかの器形がある。中津式に後続する福田K2式に比定できるものであり、後期初頭から前葉にあたる。

第Ⅲ類：文様が口縁部と胴部に分離する深鉢がともなうが、個々の特徴からいくつかの型式を含む。彦崎K1式、津雲A式といった既存の型式ないしそれに若干前後する時期のものを含む。ほぼ後期前葉に対応する。

第Ⅳ群：第Ⅲ群に遡り得る系譜をもつが、型式学的には明らかに後出的な要素をもち、また、出土状態からも区分が可能な一群で、関東地方の堀之内2式と加曽利B1式あるいはその影響を受けた異系統の土器を共伴する一群で、本遺跡の主体をなす土器群である。後期中葉にあたる。

第Ⅳ群土器の年代的位置は以上に述べた通りであるが、ここでは事実記載の便宜を図るために、複雑な構成をもつ器種の分類を加える。

浅鉢：A類：磨消縄文による文様を描くもの。

B類：成形痕をそのままに残す素文もの。

鉢：A類：口縁部の周辺に帯状の幅の狭い文様帯が配置されるもの。

B類：形態がA類に近似する素文のもので、幾分小形のものが多い。

C類：胴部が緩く膨らみ頸部以上が外反する器形で、丸底である。口縁部と胴部に縄文が施文されるものが一般的である。胴部が緩く膨らむもの（C-1種）と下半が屈曲をもち無紋となるもの（C-2種）とに細分できる。

D類：小形の無文の丸底土器。

深鉢：A類：口縁部と胴部に文様帯を配置し、頸部が緩く外反し、緩い波状口縁の深鉢。

B類：緩く膨らむ胴部に縄文が施文され、頸部は無文となる。口縁部に狭い縄文帯を配置するものが多い。また口縁部内面に沈線と縄文を用いた内文を描くものがある。波状口縁と平縁がある。

C類：胴部が緩く膨らみ、口縁部が外反する深鉢で器表面には調整痕をとどめるものが多い。緩い波状口縁と平縁がある。

注口：器体に管状の注ぎ口をもつもの。

（阿部）

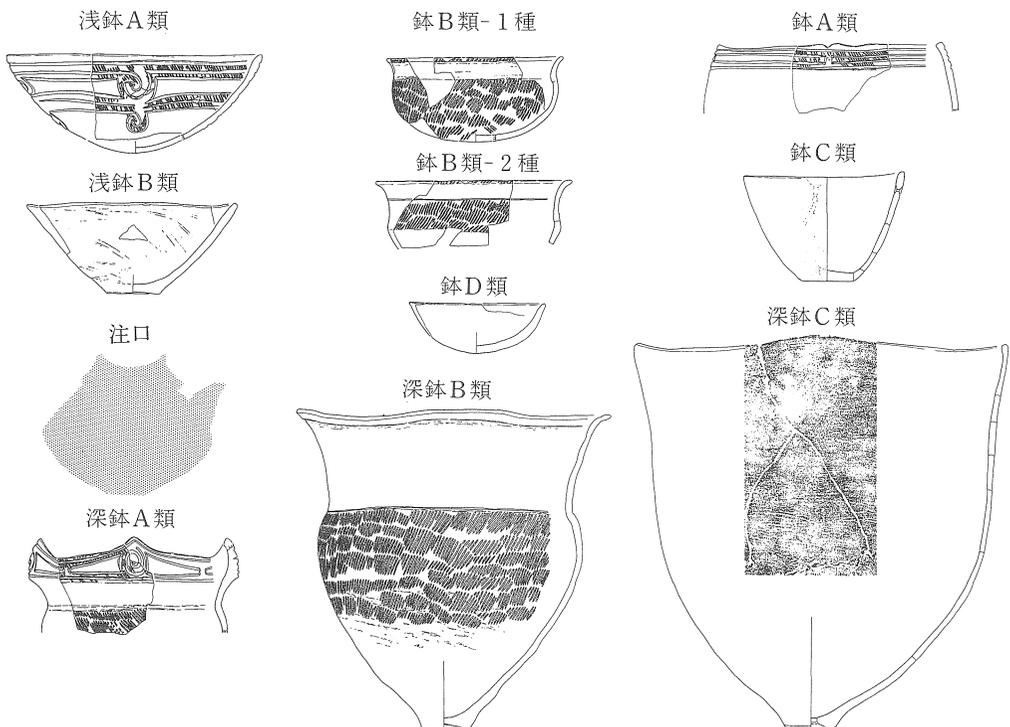


図6 後期第IV群の器種分類

3. 縄文時代の遺構と遺物

1. 後期の貯蔵穴

縄文時代の遺構としては貯蔵穴10基があげられる。当時の地形を概観すると、調査区の南・北端部にわずかに微高地が姿を見せ、中央部に東西方向の河道が走る状態が想定される。後期以前に属する砂礫層の状況を見ると、北半部に堆積する26~32層（図5、以下同）では木質を含む層と砂~砂礫層が互層に堆積するのに対して、南半部の34~36層はやや大きめの砂礫を中心とし、木質をほとんど含まず、北に下降する傾向があり、両者間の差を認めることができる。つまり、南側の砂礫層上に、33層が微高地部を形成した後、谷部への堆積が進むと考えられる。この堆積にはかなり豊富な水量が伴ったようで、大形の流木も数多く含まれる。また、29層が遺物を包含することから、この段階には既に周辺部に集落が存在したことは確かである。その後、25層が北側に微高地を形成し、南側に急峻な傾斜の微高地、北側に比較的緩やかな斜面をもつ微高地がそれぞれ出現する。後期の貯蔵穴7基はこの北側の緩やかな斜面下端付近に作られる。晩期には、地形的に低い谷部から北側の微高地にかけて堆積が進むが、後期のような急速な微高地形成は認められない。土質も異なり、19~24層にみられる粘性の高い粘土が主体を成す。20層では泥炭化した状態が認められ、泥湿地的な様相を窺うことができる。貯蔵穴3基は、谷部の埋積によってやや比高差の縮まった南側微高地部の斜面下端に形成される。

後期の貯蔵穴周辺の状況を図7・8によってもう少し詳しく検討しよう。貯蔵穴の基盤層を成すのが8層である。北側の微高地から南に向かって下降する斜面が、調査区北端付近でやや段状に落ちた後、平坦な面を形成する。この面は若干波打つようなたわみを有す。幅は6~7m

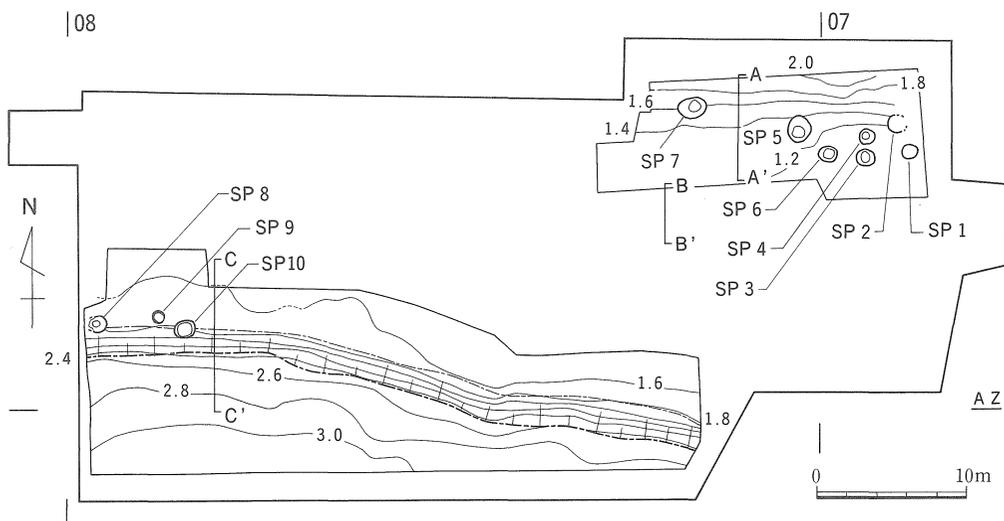
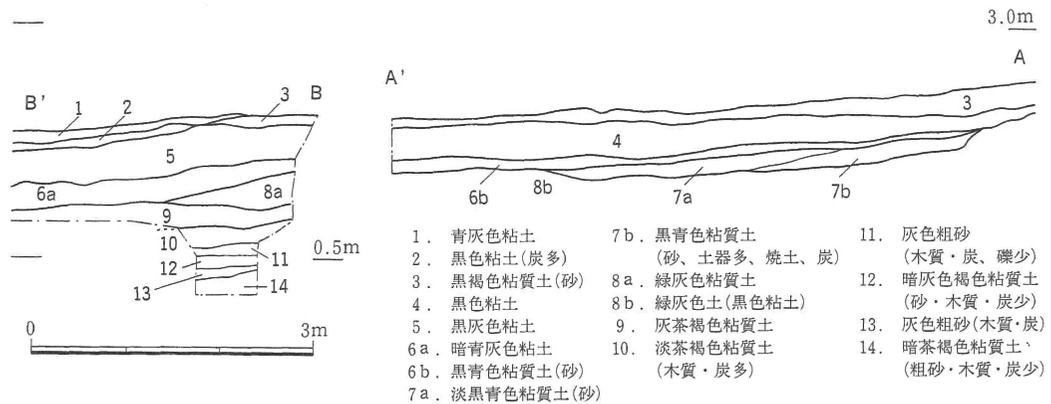


図7 縄文時代遺構配置図（縮尺1/500） ※コンタは標高m

の広がりがあり、南端部では谷底部に落ち込む。貯蔵穴はこの平坦部に集中する。微高地側の斜面下端付近には貯蔵穴を覆う状態で遺物が面的に広がる。炭・焼土も多く含み包含層（7 b層）を形成する。厚さは10~20cm程度で、短期間に形成されたことが予想される。

晩期の貯蔵穴に関してはその詳細は後述する。 (山本)



〈全体の層序〉との対応関係

1…〈19〉、2…〈20〉、3…〈22a〉、4…〈22b〉か〈23〉、5…〈23〉、6…〈24〉、7a…〈25a〉、7b…〈25a〉
8…〈25b〉、9…〈26〉、10…〈28〉、11…〈29〉、12…〈30〉、13…〈31〉、14…〈32〉

図8 北側微高地斜面土層断面図(縮尺1/80)



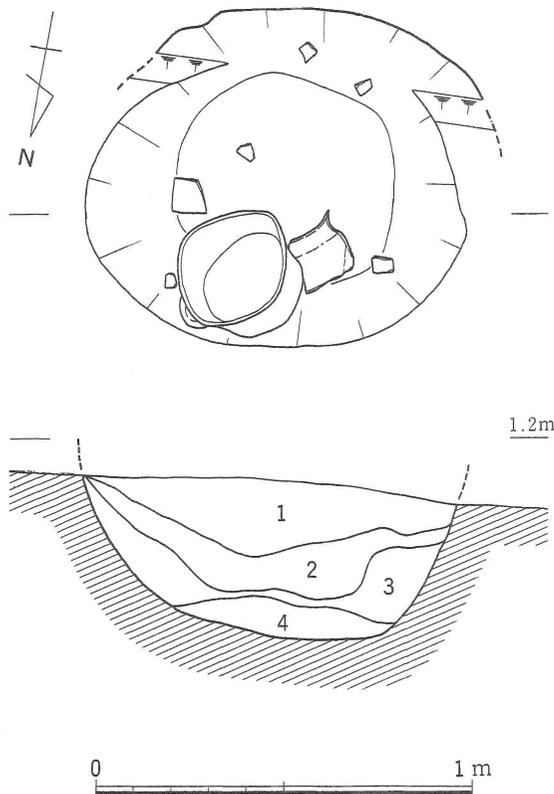
写真4 北側斜面における縄文後期貯蔵穴群(東から)

貯蔵穴 SP 1 (図9~12)

遺構の構造 北側微高地の斜面下端で検出された。調査区の東端部に位置する。土層確認のトレンチにかかったため、上部は削平されている。検出面は標高1m前後で、〈25b〉層内である。平面形は残存部分で100×90cmの楕円形を呈し、深さは43cmが残存する。底面は直径58cmの円形で、標高0.55mに位置し、〈28〉層に対応する砂層に達す。断面形はボール状である。

埋土は四分される。1・2層は茶褐色土である。特に1層は純粹な有機物層ともいえ、ペースト状を成す面は、削った直後から酸化によって黒ずむ状態であった。2層には土器・炭化物・木片・堅果類が含まれる。完形で出土した深鉢もこの層に含まれる。3層は1・2層と基盤の砂層が混ざったような土層で、堅果類などの包含物は少ない。4層は1層と同様に有機物の包含率の高い層で、やはり、空気に触れた直後に黒ずむ状態を見せた。堅果類も少量含まれる。3層を除くと1・2層と4層は共通性が高い。

次に包含物のあり方を検討してみよう。この貯蔵穴からは、完形の深鉢(図12-6)が出土している。出土位置は、底部が4層上面にあり、貯蔵穴底面からは約10cm程度浮いた状態で、全



▲貯蔵穴に埋設された深鉢形土器(後期第IV群)
貯蔵穴の使用用途において深鉢を埋設し内部に堅果類を入れた状態で検出された。

土層説明

1. 茶褐色土〈有機質層〉
2. 茶褐色土〈有機質層〉
(木片・堅果類・炭化物・土器多)
3. 青灰色砂混茶褐色粘質土
4. 茶褐色粘質土〈有機質層〉
(堅果類少)

図9 貯蔵穴 SP 1 実測図 (縮尺1/20)

体は3層の窪んだ中央部にすっぽりと入っている。3層上面ラインの不自然さはこの影響によるものと考えられる。また、堅果類は深鉢内と2・4層に含まれる。最も量が多いのは深鉢内であり、2層出土の堅果類は深鉢周辺に他の遺物とともに認められることから、深鉢使用時にこぼれたものと判断される。以上の出土状況から、本遺構は少なくとも2回の使用がなされた可能性が高い。つまり、4層が前回の堅果類貯蔵時の残土であり、間層となる3層が本遺構の半分程度を埋めた状態で、最終の使用が行われ、堅果類を入れた深鉢が3層中に押し込まれたことが想定される。そして1・2層が最終使用に伴う埋土である。また、深鉢の位置が貯蔵穴

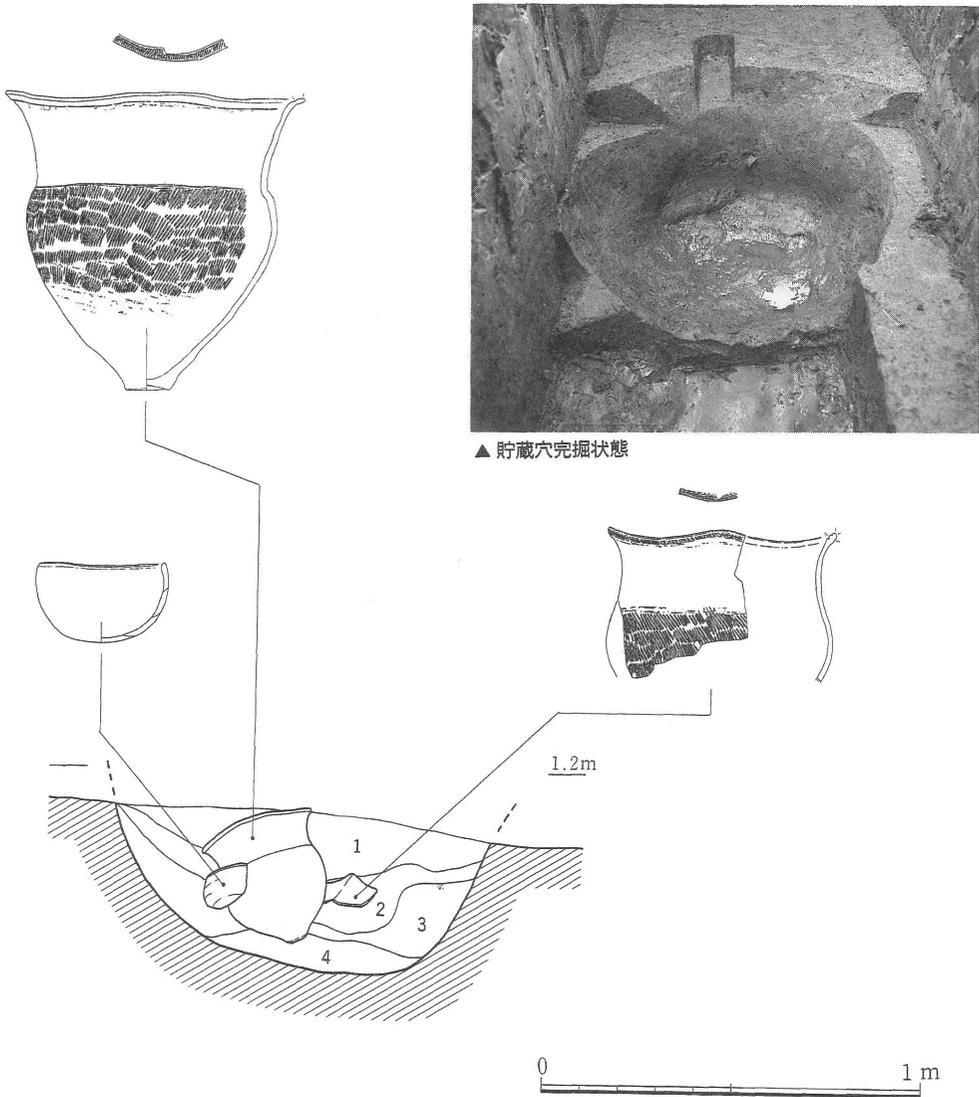


図10 貯蔵穴 SP 1 土器埋設状況 (縮尺1/20)

内に北よりに片寄っていることから、本来は2個以上の深鉢が入っていたことも予想され、用途上で放棄された可能性が考えられる。

その他の遺物では、約半分が欠けた鉢(図11-4)と口縁部から頸部にかけての深鉢の破片(図12-5)がそれぞれ1点ずつ完形の深鉢に接して出土している。いずれも他に同一個体の破片はなく、特に鉢は、深鉢内に堅果類がかなり入っていたことを考慮すると、杓子のような役目をもって置かれたことも考えられる。堅果類は、大半はアラカシで、コナラ・トチも少量認められ、アベマキ・シラカシも僅かに姿を見せる。遺構の時期は後期中葉である。(山本)

出土遺物

出土した人工遺物は土器26点、石鏃1点、剥片1点である。

土器(図11, 12) 図11-2は条痕のみを残す深鉢の破片で、口縁部が幾分外反する。口縁部の形状などから、第IV群以前の粗製土器である可能性が高い。3は器面が良く研磨され上部に文様が描かれる鉢であろう。図11-4および図12-5、6は貯蔵穴の内部に遺棄された状態で発見されたものである(図10)。4は丸底の鉢で約半分のみが図12-6の深鉢の胴部に接するようにして出土した。器面は良く研磨され、外面は底部を除く全面に黒色の付着物がみられる。

図12-5、6は第IV群土器を構成する深鉢B類とした器種である。6は貯蔵穴の中央にやや傾いて正位の状態で見られた完形の個体である。緩く外反する頸部は無文で良く研磨され、縄文の施文される胴部とは沈線で区画される。口縁部は4単位の小波状縁で、外面が肥厚する。内面には沈線が周回し、波頂部分でクランク状に屈曲する。沈線で区画された上端部には縄文が施文されている。胴部は上半部に縄文が施文されているが、分厚い炭化物の層が覆い、縄文の実測はやや模式的である。5も同様の特徴をもつが、肥厚した口縁部の外面に縄文が施文されている点、頸部の無文帯と胴部を区切る沈線のない点が異なる。(阿部)

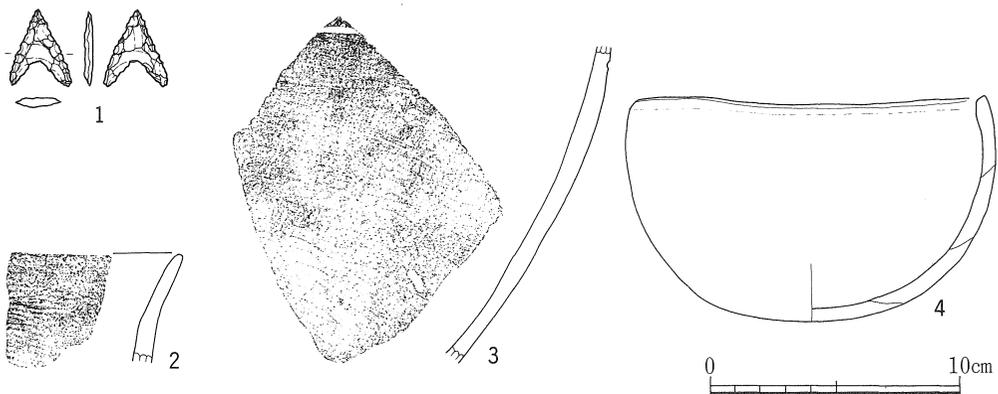


図11 貯蔵穴 SP 1 出土遺物(1) (縮尺1/3、1のみ2/3)

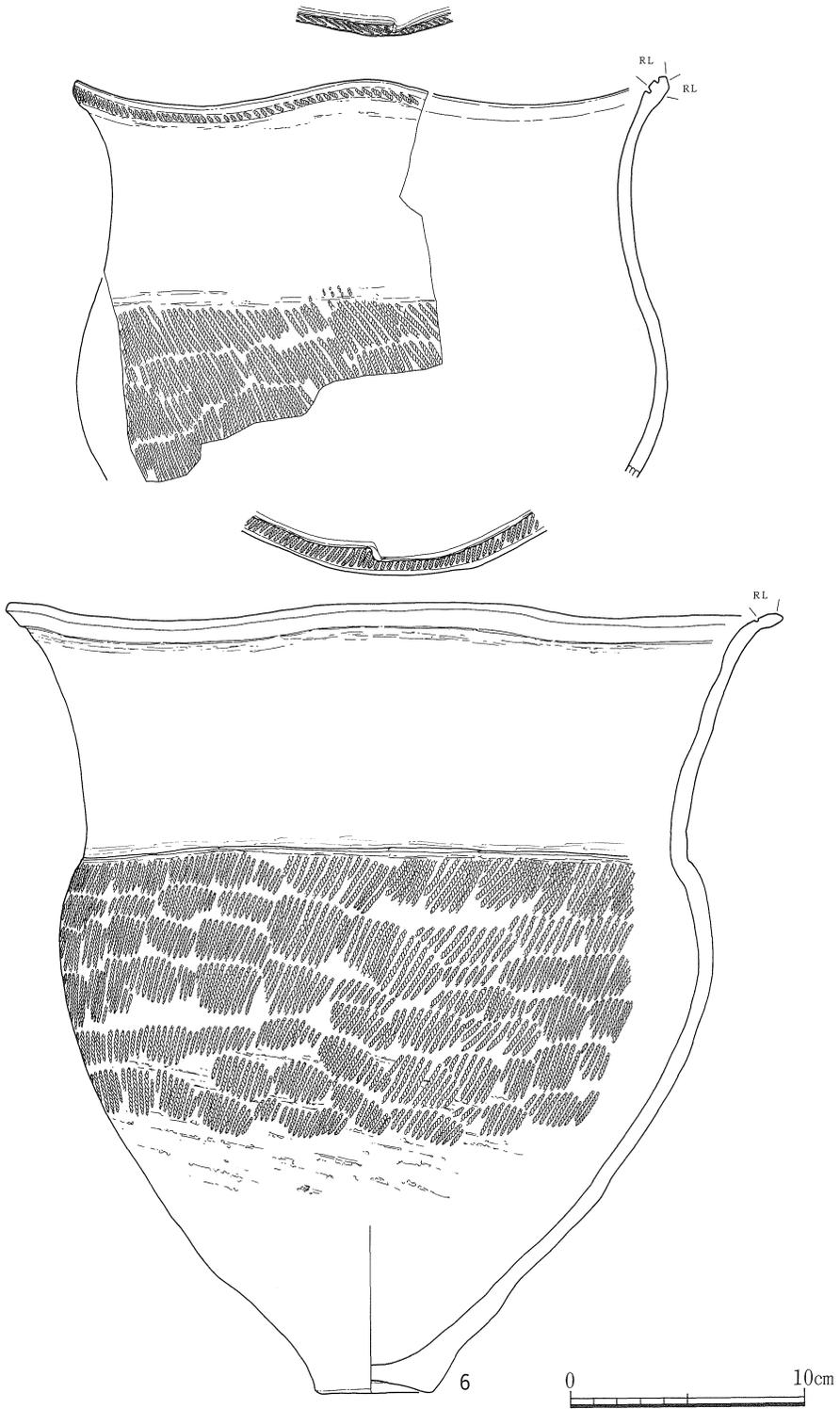


図12 貯蔵穴 SP 1 出土遺物(2) (縮尺1/3)

石器（図11） 石鏃（図11-1）と剥片がそれぞれ1点ずつ出土している。石鏃は凹基で、脚の挟りが深い。両面に素材面を残しており、薄い剥片を素材としていることが分かる。（富樫）貯蔵穴 SP 2（図13，写真5）

遺構の構造 北側微高地の斜面に位置する。SP 1貯蔵穴の北西部である。やはり、調査区東端のトレンチで東部分が破壊されている。検出面は微高地側で標高1.5m、谷側で同1.25mで、〈25 b〉層上面にあたる。平面形は残存部分で120×110cmの楕円形を呈するが、復元すると130×115cm程度の規模が推定される。深さは50～60cmである。底面は径65cmの円形で、標高0.8mに位置し、砂層に達し、深いところでは10cm程度掘り込む。断面形は逆台形を示し、壁面には基盤に含まれる流木が一部突き出ている。

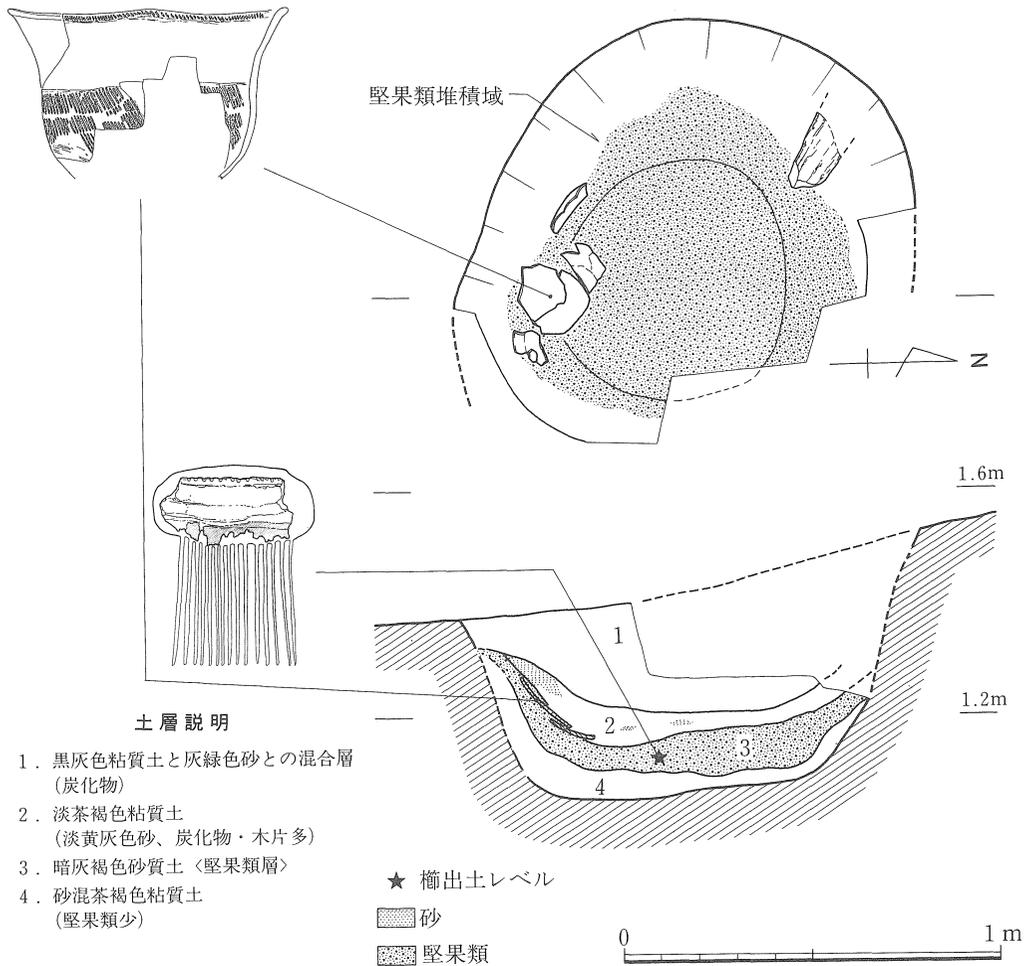
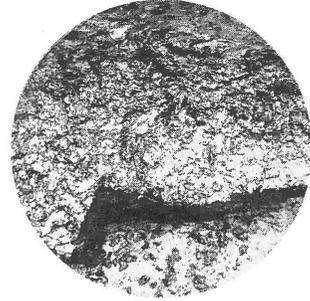


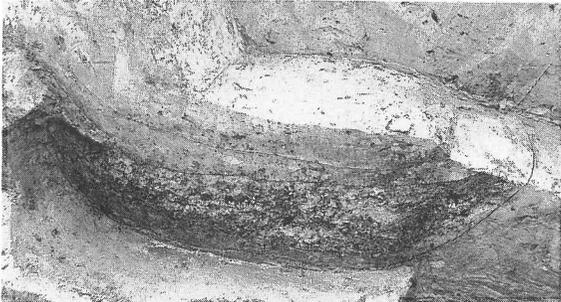
図13 貯蔵穴 SP 2 実測図（縮尺1/20）



▲ 植物遺体のサンプリング状況



堅果類検出状態



▲ 貯蔵穴内における堅果類の堆積状態（東から）

◀ 堅果類の堆積は厚く、遺存も良好であったが粘質土層がこれを覆う。堅果類を密封状態で貯蔵するためのものであったのかもしれない。

写真5 貯蔵穴 SP 2 調査状況

埋土は四分される。1層は上面を覆う包含層に類似しており、放棄後の流入土と考えられる。2層は淡褐色粘質土であるが、砂をブロック状に含むほか、木片を多く含んでおり、他の貯蔵穴との比較から、この層は堅果類を覆うために入れた層と判断される。3層は堅果類の堆積層で、その厚さは7～12cmを測る。すべての堅果類が押し潰された状態にあることから、本来の形状を考えるとその厚さは数倍にふくれあがることは明白であり、貯蔵当初は貯蔵穴容量の7割前後を占めていたことが予想される。また堅果類に混ざって櫛が出土している。4層は砂を多量に含む。僅かに含まれる堅果類以外に混入物は認められない。3層の広がりとは一致した範囲に形成されており、基盤層が砂層であることを考え合わせると、人為的な層というよりは、使用に伴って自然に生じた層の可能性も考えられる。本遺構は堅果類が貯蔵された状態で、あまり利用されないで放棄されたものと判断できる。時期は後期中葉である。 (山本)

出土遺物

土器 (図14) 92点の土器が出土したが、多くは細片で図示できるものは少ない。

1は深鉢の口縁部である。口唇部には細かな刻みが施され、外面には櫛歯状の工具による横位の条線が引かれる。加曾利B1式の影響を受けた異系統の土器であろう。2、3、5、6は

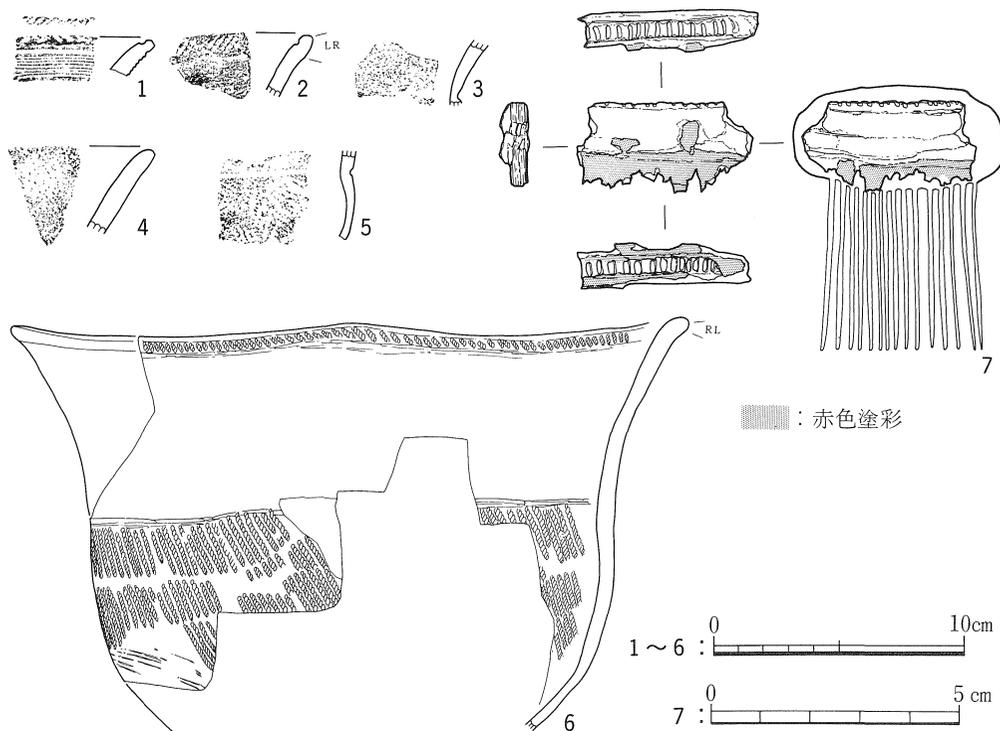


図14 貯蔵穴 SP 2 出土遺物(1) (縮尺1/3)

深鉢B類である。2の口縁部内面には沈線が引かれ縄文が施文されている。3は頸部、5は胴部に縄文が施文されている。

4は無文で直線的に外反する器形で浅鉢B類に含められよう。

6は覆土の3層上面より出土したもので、貯蔵穴の埋没過程で流れ込んだ状態を示す。また一部この個体は貯蔵穴の周辺より出土したものと接合関係が見られる。深鉢B類に分類されるが口縁部の内側には内文が描かれない。口縁部外面は若干肥厚し、その部分に縄文が施文されている。頸部と胴部の分帯は削りによっており、沈線による区画はみられない。

その他に貯蔵穴の堅果類の堆積層からは土器以外では漆塗りの櫛が出土している(図14-7)。頭部のみが残存し、残存部分で14本の歯が確認できる。歯はヒゴ状のもので、頭部の剥落部には横位のヒゴが歯に接した状態で残存する。歯は恐らくこうした横位のヒゴによって固定される結歯式の構造と思われる。頭部の表面には水銀朱が塗布されている。大半が剥落しているが漆に混ぜ込んで塗布したものと考えられる。頭部は黒色の木目の細かい木屑を主体に構成されるらしいが、石英、長石と思われる岩石鉱物の細粒子の混入が観察できる。(阿部)

石器(図15) 石錐(図15-1)、楔形石器削片、剥片、磨石(図15-2)が1点ずつ出土してい

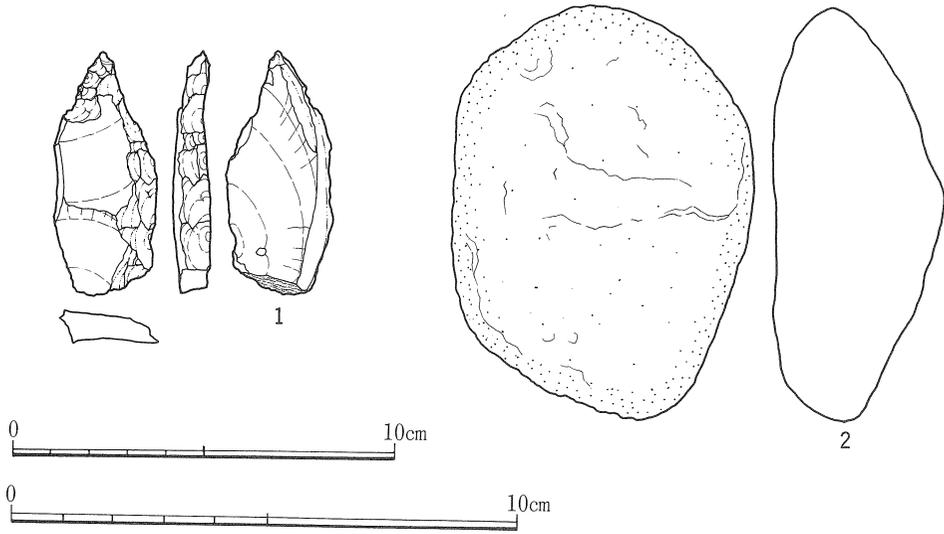


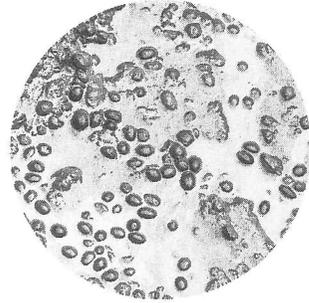
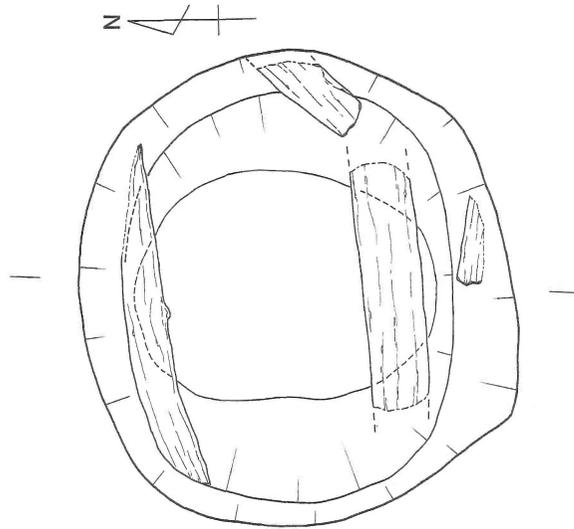
図15 貯蔵穴 SP 2 出土遺物(2) (縮尺：1は2/3、2は1/2、2は上スケールに対応)

る。石錐は剥片の両側縁を加工して先端部を作っている。右側縁の加工は急角度である。磨石は側縁部に機能部をもつ。 (富樫)

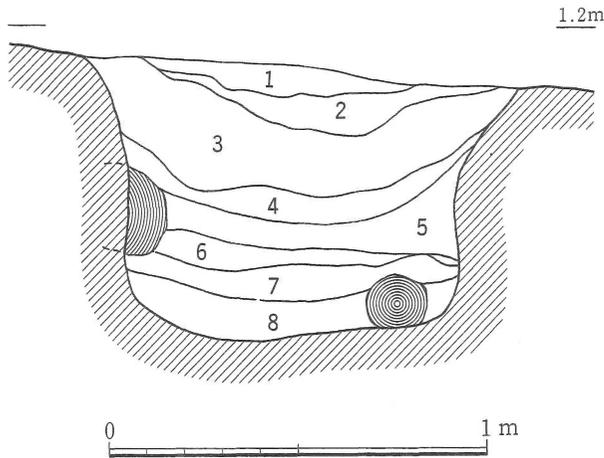
貯蔵穴 SP 3 (図16)

遺構の構造 北側微高地の斜面部のSP 2の南西側に位置する。検出面は標高1.0~1.1mで<25 b>層上面にあたる。平面形は径125~115cmを測る円形を呈し、深さは65~75cmである。底面は80×60cmの楕円形で、標高0.4~0.35mに位置し、砂礫層の上面に達する。断面形はU字形を呈す。壁面~底面には基盤層に含まれる大形の流木が姿を見せており、流木を残したままで掘削が行われたことが判る。

埋土は八分されるが、SP 2の堆積状況と基本的には共通し、その性格から1・2層、3~6層、7層、8層の4群に大別される。それぞれ流入土、堅果類の覆土、堅果類貯蔵層、堅果類の基盤へのもぐり込み層と考えられる。1層には土器が含まれているが、上部を覆う包含層の落ち込みに伴うものである。2層は植物遺体を含み、1層と3層が混合した状態で、流入土の一部ととらえられよう。3~6層は茶褐色粘質土と黄灰色砂の互層が、各層間あるいは一部の層内で認められる一群である。3層と5層はほとんど同一の土層と言える。薄い黄灰色砂が茶褐色粘質土と互層になって連続堆積し、植物遺体あるいは炭化物を多量に含む。また4・6層は粘性が比較的高く、砂あるいは植物遺体・炭化物等をほとんど含まない点で共通する。ただ、6層には堅果類が少量含まれる点で異なるが、堅果類貯蔵層の7層との関係を考えると、本来的なものとは言えず、両層の共通性を弱めるものではない。このように本層群は茶褐色粘質土



堅果類検出状態



土層説明

1. 黒色粘土と青緑灰色砂の混合層 (土器、炭化物)
2. 灰茶褐色粘質土 (植物遺体、炭化物)
3. 茶褐色混砂粘質土 (薄い砂層多、植物遺体・炭化物多)
4. 茶褐色粘土
5. 茶褐色混砂粘質土 (薄い砂層多、植物遺体多、堅果類少)
6. 茶褐色粘質土 (堅果類少)
7. 黄灰色粘土混少 (堅果類多)
8. 灰色粗砂 (堅果類少)



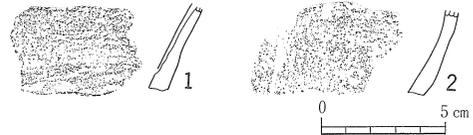
貯蔵穴 SP3 完掘状態 (東から)

図16 貯蔵穴 SP3 実測図 (縮尺1/20)

をベースに、植物遺体・炭化物を含み、砂が互層に堆積する層と、そうした包含物を含まない層がさらに互層になっている状態といえよう。層厚は全体で45cm程度になる。7層は砂を主体にしているが、大量の堅果類が出土した。ほかに包含物は認められない。層厚は約10cmである。8層は粗砂で堅果類が少量含まれる。特に下面に多い。堅果類はアラカシが中心である。完掘後豊富な水量が観察された。時期は後期中葉で貯蔵状態で放棄されたものである。 (山本)

出土遺物

土器(図17) 14点の土器が出土しているが図示できるのは2点のみである。2点とも無文で深鉢C類かB類の胴部下半の無文部であろう。



(阿部) 図17 貯蔵穴 SP 3 出土遺物(1) (縮尺1/3)

石器(図18) 石鏃(図18-1)、楔形石器(2)

楔形石器削片2点、台石(3)、剥片1点が出土している。台石としたものは、花崗岩の大型の礫で、表面が明らかに磨滅して平坦面となっていることから、石器の可能性のあるものとしてあげた。 (富樫)

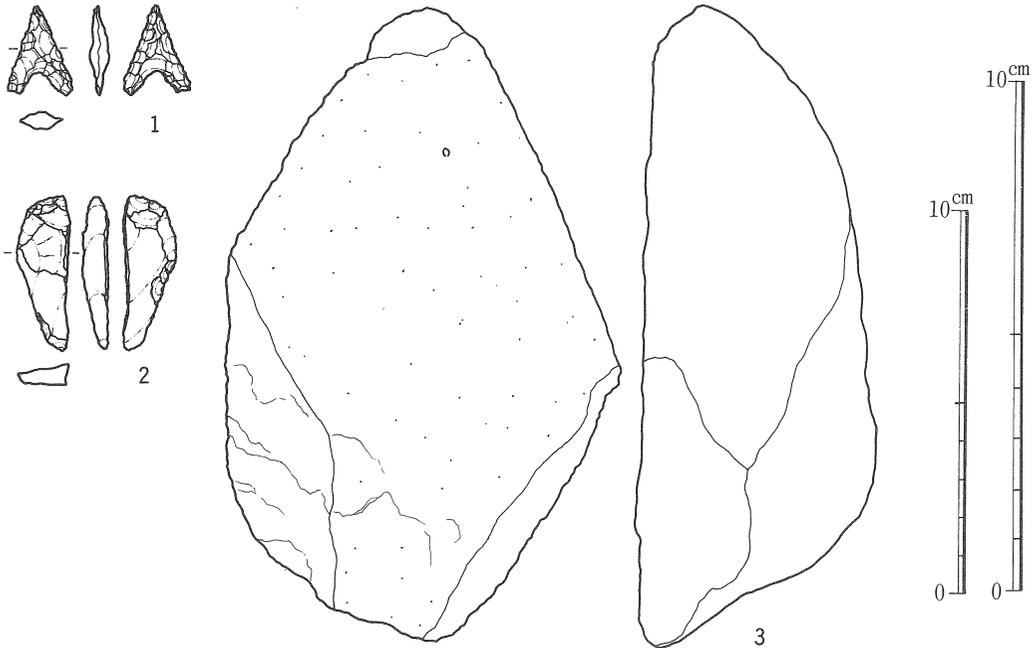


図18 貯蔵穴 SP 3 出土遺物(2) (縮尺：1・2は2/3、3は1/2、3は左スケールに対応)

貯蔵穴 SP 4 (図19, 写真6)

遺構の構造 SP 3の北側に並んで位置する。検出面は標高1.2~1.15mで、〈25b〉層上面にあたる。平面形は110×105cmの不整形を呈し、深さは60~75cmを測る。底面は径50cmの円形で、標高0.5mに位置し、砂層に達し、上面から10~20cm程度掘り込まれた状態を示す。掘り方は地形的に高い北側の一部がオーバーハングする。えぐりこまれるレベルは標高0.8mのあたりである。また、東部分に大形の流木が突き出しており、除去しないで掘られている。

埋土はほぼ SP 3貯蔵穴と同様である。1・2層が流入土、3~6層が堅果類の覆土(厚さは50cm前後)、7層が基盤層と混ざり合う部分としてとらえられる。ただし、6層には堅果類が含まれる点異なる。しかし、その出土状況は、7層との境付近に集中しており、SP 3での7層がこの部分に残存していたと考えることは可能であろう。最下層の7層はSP 3の8層と全く同じである。出土した堅果類は大半がアラカシである。量は多くないことから、貯蔵状態とは

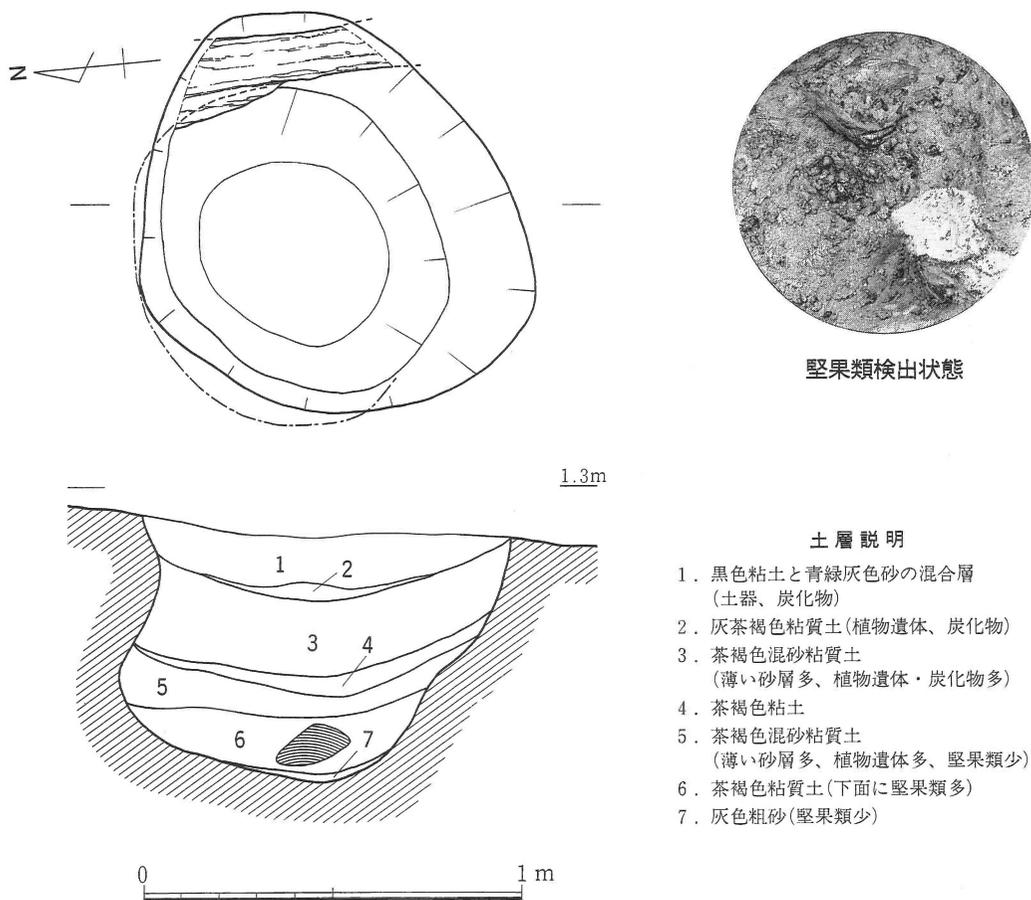


図19 貯蔵穴 SP 4 実測図 (縮尺1/20)

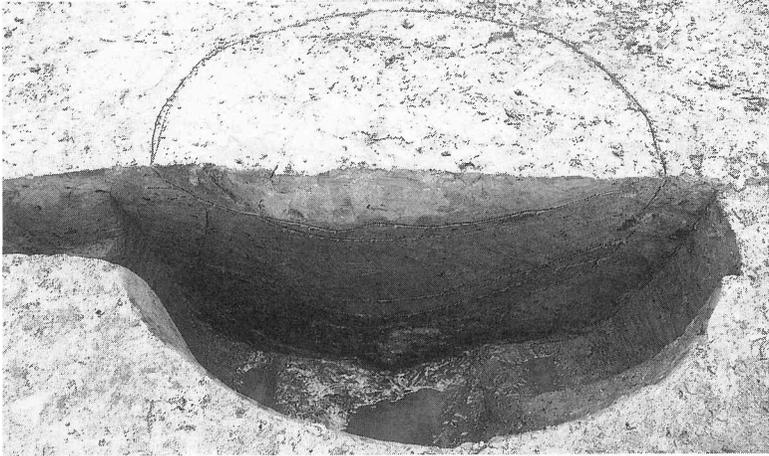


写真6 貯蔵穴 SP 4 半截状態 (西から)

いい難いが、貯蔵量の豊富なSP 3の土層堆積状況とほとんど一致していることから、まったくの廃棄状態というよりは使用の最終段階での放棄と考えられる。

この貯蔵穴においても、完掘後、底面から豊富な水量が観察された。時期は後期中葉である。
(山本)

出土遺物

土器(図20) 水洗選別も含めて24点の出土があったが細片が多く、図示できたものは5点のみである。これらはいずれも第IV群に分類される。

1は深鉢C類の口縁部で横位の成形痕のみが観察される。2、3は膨らみをもつ胴部破片で、ケズリ痕のみが器表に観察される。深鉢B類か、あるいはC類の胴部であろう。

4は深鉢の底部である。底面は上げ底となっており、よくナデが施されている。底径は推定で6.5cmを測る。5は深鉢B類である。口縁部は若干肥厚し、この部分には縄文が施文されている。頸部と胴部の分帯は太い沈線によっており、胴部には縄文が施文されている。またこの個体は深鉢B類の多くがもつ内文が存在しない。本例と同じように内文のない個体は貯蔵穴 SP 2より出土したものにもある。遺構内から出土した土器は、いずれも後期第IV群に比定される特徴をもつ点から、本遺構の時期は当該型式のおこなわれた後期中葉と考えられる。(阿部)

石器(図21) 花崗岩の分厚い偏平な円礫の表面、端部、側面の3ヶ所に敲打痕が残っている。半分以上を欠損しており、元の形態は不明であるが、ほぼ楕円形の円礫になるものと思われる。
(富樫)

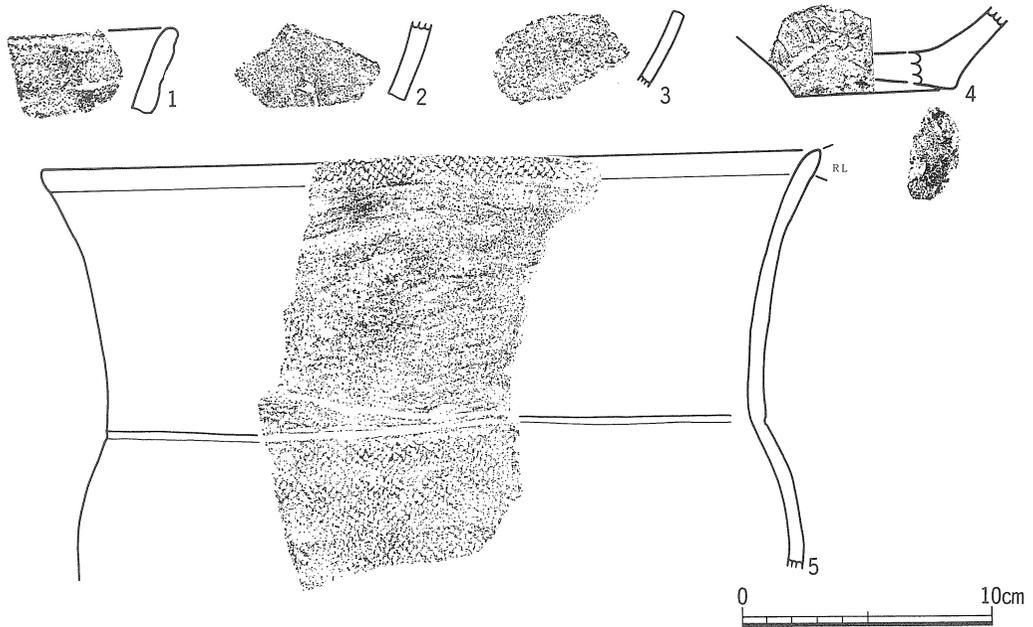


図20 貯蔵穴 SP 4 出土遺物(1) (縮尺1/3)

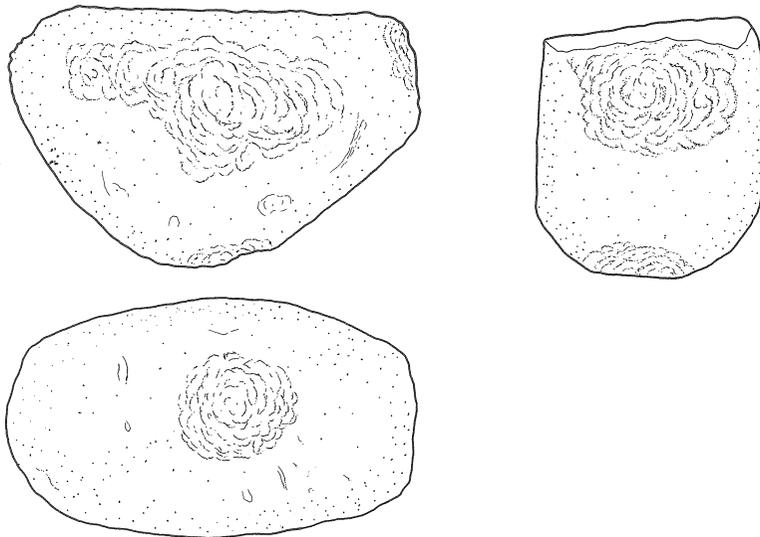


図21 貯蔵穴 SP 4 出土遺物(2) (縮尺2/3)

貯蔵穴 SP 5 (図22~24, 写真7)

遺構の構造 北側の微高地斜面、SP 2の西約3m付近に位置する。検出面は標高1.3~1.4mで、〈25b〉層上面である。平面形は173×160cmの不整楕円形を呈し、深さは90cmを測る。底面は径90cmの円形で、標高0.4mに位置し、粗砂層に達する。掘り方は、地形的に下がっていく南辺部がオーバーハングし、北側に向かっては60°前後の角度で立ち上がる。底面付近では基盤層に



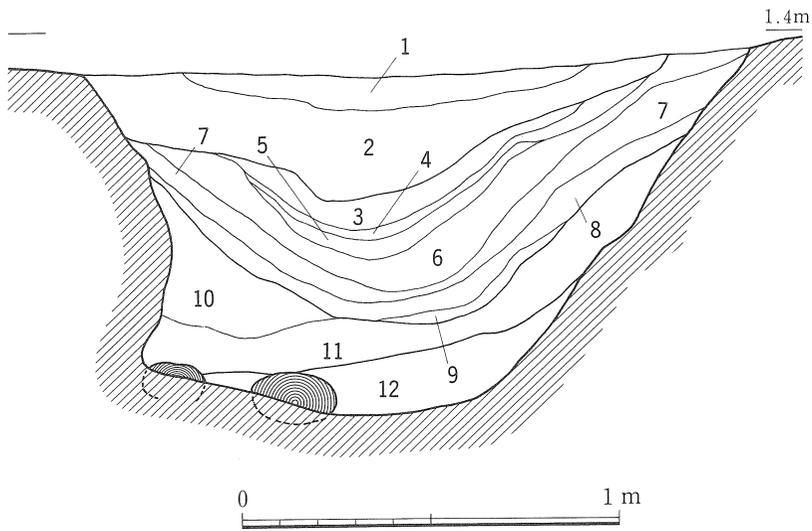
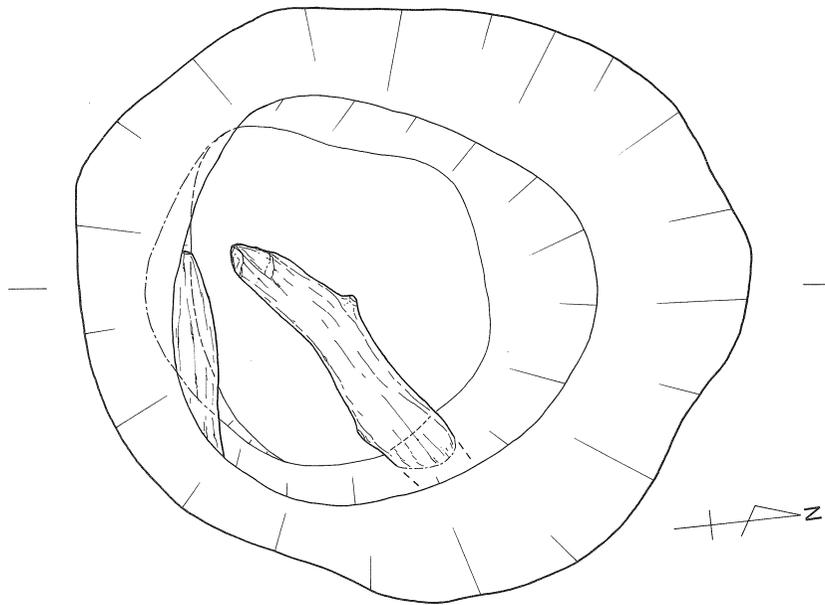
写真7 貯蔵穴 SP 5 完掘状態（北から）

含まれる流木が姿を見せる。

埋土は大きくは三分される。1・2層は基本的には黒色粘土と緑灰色砂の混合層で、その含率の差で分層が成される。いずれも本遺構の上部を覆う遺物包含層に共通しており、流入土としての性格をもつと判断される。3～11層は灰褐色～茶褐色の砂が無数の互層堆積を示す一群である。その中には木枝・葉などの植物遺体も多量に含まれており、黒色に炭化した植物遺体層もいくつか認められる。基本的には堅果類は含まない層であるが、11層だけは12層の影響で堅果類が少量出土する。全体の層厚は45～60cmを測る。貯蔵堅果類を覆う層群と考えられる。12層は黄灰色の砂層で堅果類を多く含む。特に底面に顕著である。アラカシ・コナラ等が確認されている。本来、堅果類を貯蔵していた層であろう。以上のように、堆積状況から、使用途上での放棄が考えられる。時期は後期中葉である。（山本）

出土遺物

土器（図23） 水洗選別をふくめて127点の土器が回収された。1、2は浅鉢A類である。数条の横位の沈線が巡りその上に縄文が施文される。2は器面に横位の成形痕が残る。3、4は1、2と同様の形態で縄文のみを施文した粗製の浅鉢である。5、6は無文の浅鉢である。7、8は丸頭状の口縁部断面形態を成す深鉢C類の口縁部である。9～12、14、27、28は深鉢B類の口縁部である。9は口縁部の外面に一条の沈線が周回しており、この部分に縄文が施文されている。10、12、14、27、28は内面に一条の沈線を巡らし、この部分と肥厚する外面部分に縄文が施文される。11は外面の肥厚が見られるが、内文が存在しない。13～19は深鉢B類の胴部である。13、15、19、28は頸部の無文部と胴部が沈線により明瞭に分帯されている。17は胴部の下半である。19は胴部の全体に縄文の施文がみられるが、一部に単節の原体の撚りが戻り、その原体を回転させたため、無節縄文となる部分が見られる。26の底面には網代痕が認められる。（阿部）



土層説明

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 1. 緑灰色砂混黑色粘土 | 3~11. 灰褐色~茶褐色砂層の互層
(植物遺体多) |
| 2. 黑色粘土混綠色砂
(炭化物・土器多、植物遺体少) | 7・9. 灰白色粘質土(植物遺体少) |
| | 10. 砂(植物遺体一部のみ) |
| | 11. 堅果類少 |
| | 12. 黄灰色砂(堅果類多) |

図22 貯蔵穴 SP 5 実測図 (縮尺1/20)

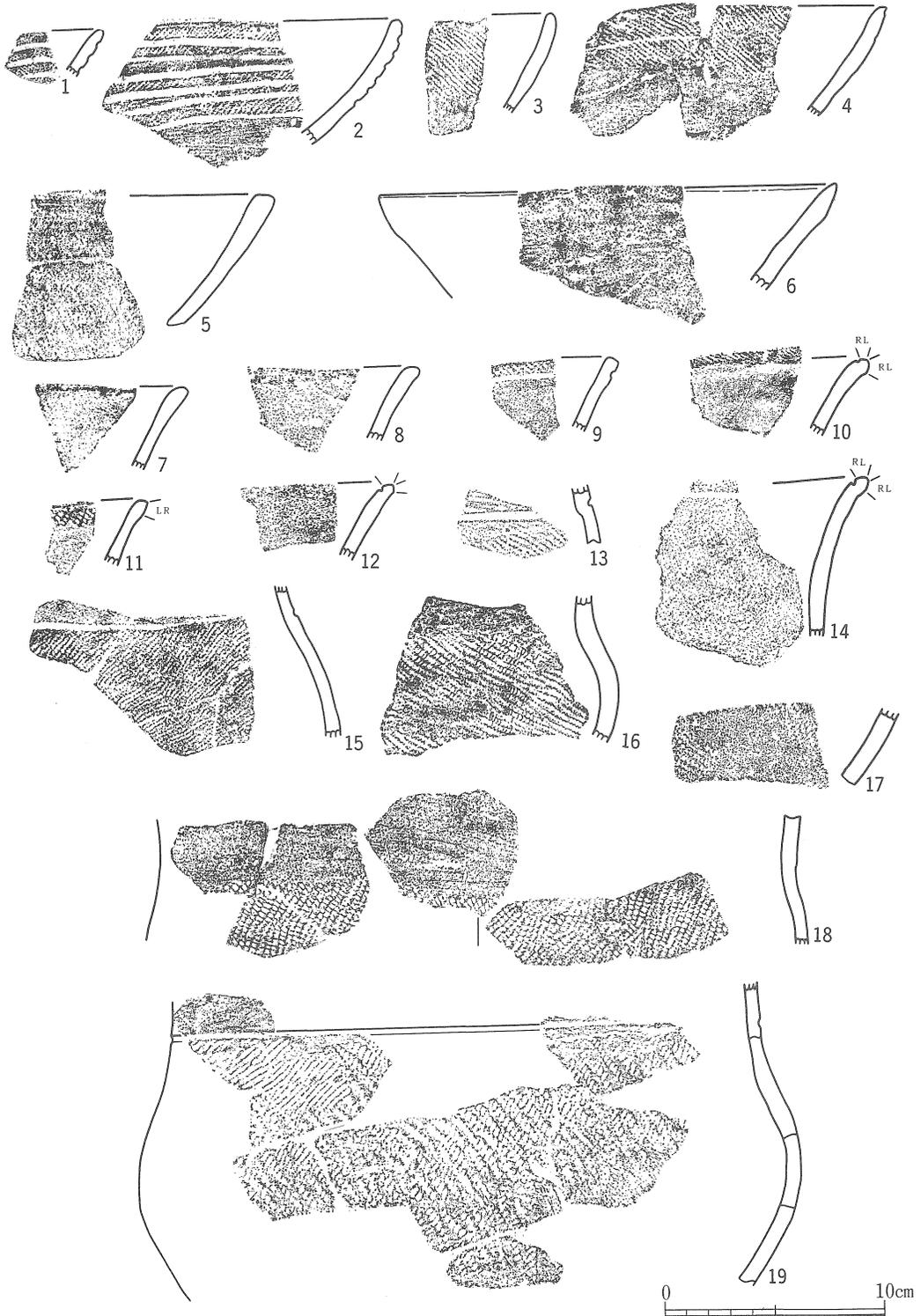


図23 貯蔵穴 SP 5 出土遺物(1) (縮尺1/3)

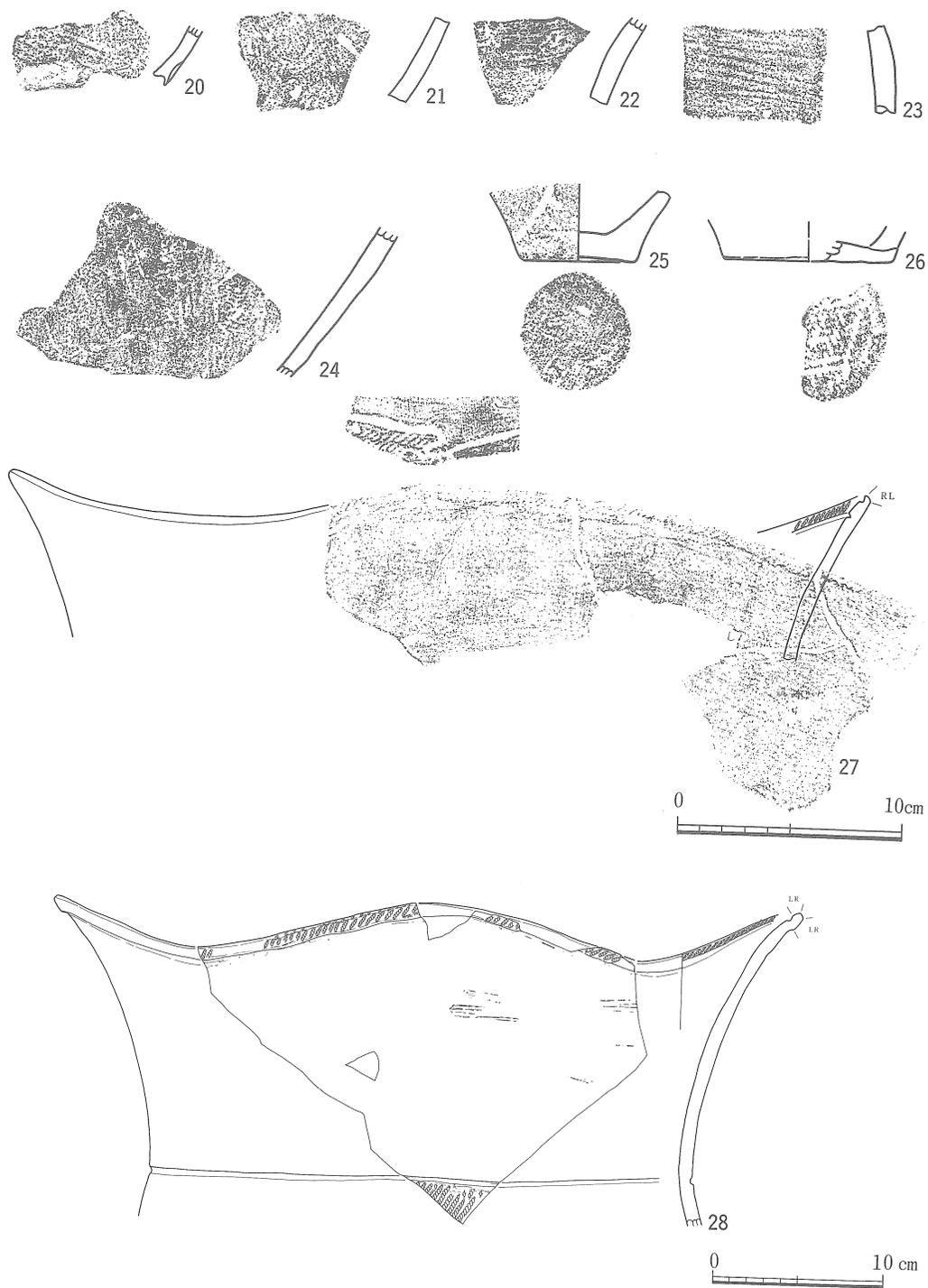


図24 貯蔵穴 SP5 出土遺物(2) (縮尺1/3、9のみ1/4)

貯蔵穴 SP 6 (図25, 写真8)

遺構の構造 SP 5の南東約1m付近に位置する。検出面は標高1.05m前後で、〈25b〉層上面である。平面形は120×104cmの楕円形を呈し、深さは90cmを測る。底面は90×80cmの楕円形で、標高0.1mに位置し、粗砂層に達し、上面から10~20cm程度掘り込んだ状態を示す。掘り方は全体の4/5周くらいがオーバーハングしており、フラスコ状を呈する。くびれ部は標高0.6m前後に位置する。埋土は三群にまとめられ、SP 5と類似する。1・2層は灰色系の粘土で流入土と判断される。3~7層は茶灰色粘質土をベースとするが、その中に灰色砂質層・木枝や葉等を主体とした木質層・堅果類層などが薄く連続的に互層を成して堆積する。層厚は全体で約60

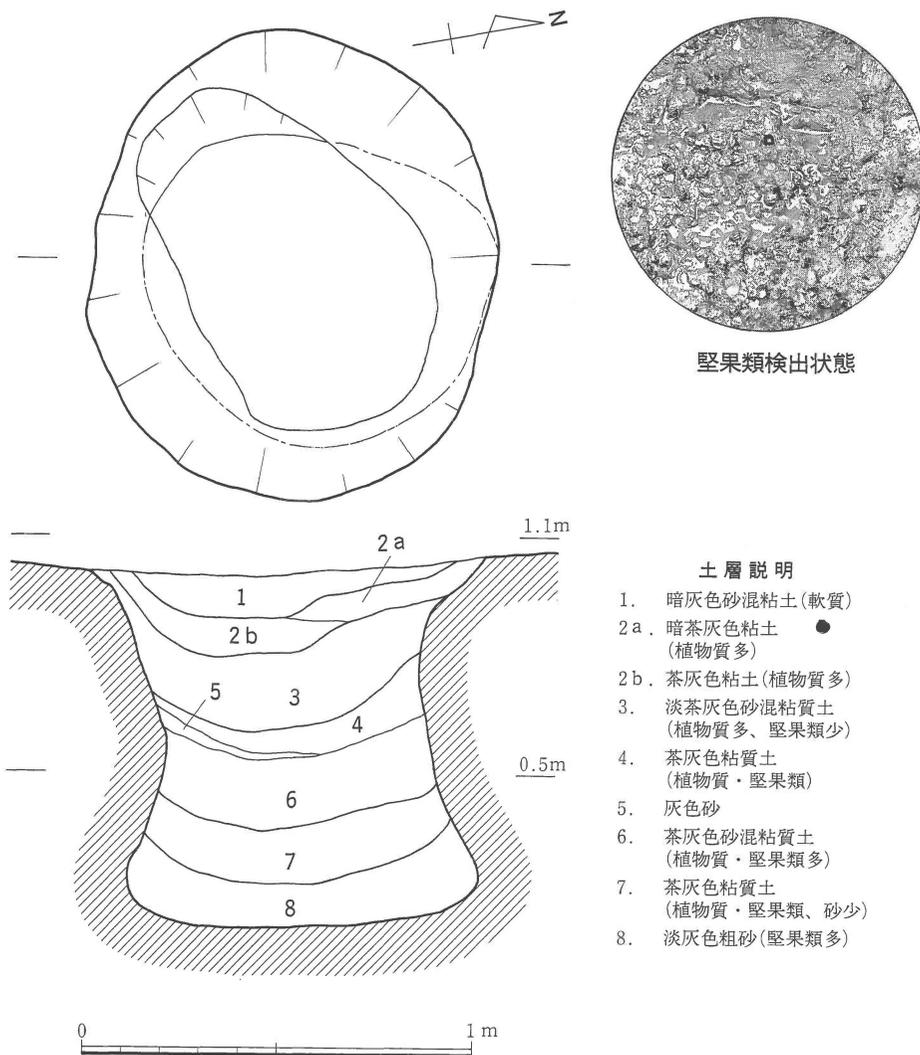


図25 貯蔵穴 SP 6 実測図 (縮尺1/20)



写真8 貯蔵穴 SP 6 半截状態 (東から)

cmに達する。8層は淡灰色の粗砂層で堅果類を多量に含む。特に壁際に集中する傾向が認められる。7層から8層への変化はやや漸移的である。また、8層と基盤層との境は不明瞭で、基盤の砂に堅果類が潜り込むような状態が観察された。堅果類はアラカシが圧倒的に多く、コナラ・シラカシ・トチ等も僅かに含まれる。使用途上での放棄と判断される。また調査段階から豊富な水量が観察された。時期は後期中葉である。(山本)

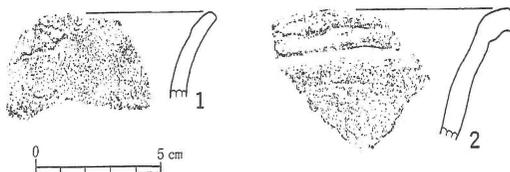


図26 貯蔵穴 SP 6 出土遺物 (縮尺1/3)

出土遺物 (図26)

土器 27点の土器が出土したが図示できるものは2点がある。ともに深鉢C類の口縁部で、2は外面が肥厚する。(阿部)

貯蔵穴 SP 7 (図27, 写真9)

遺構の構造 北側の微高地斜面に位置するが、他の同一斜面に存在する貯蔵穴群 (SP 1 ~ 6) とは、やや離れた状態にあり、最も西寄りの貯蔵穴SP 5 と7 mの距離を有す。検出面も<25 b>層上面ではあるが、標高1.25~1.55mを測り、他よりやや高い位置になる。平面形は190×140 cmの楕円形を呈し、深さは60cmである。底面は85×80cmの楕円形で、標高0.85mに位置し、砂層上面に達する。掘り方は逆台形といえるが、地形的に高い北側部分の傾斜は急峻で、垂直に

近い状態も確認される。

埋土は1・2層、3・4層、5層の三群に大別される。1層は上部を覆う土器包含層に共通しており、2層も含めて、流入土と判断される。3層と4層は灰褐色砂が主体の層で、包含物の差で分層される。3層には植物遺体が多量に含まれ、特に中央部付近では集中し、粘質化を強める。上面(標高約1.1m)には一辺30×15cm、高さ15cm程度の大きさの角礫の存在が確認された。貯蔵穴のおおいを成していた可能性が考えられる。4層には植物遺体はやや少なく、茶褐色粘土ブロックあるいは堅果類が少量含まれる。3・4層の層厚は25cm程度である。堅果類を覆う層と考えられる。5層は堅果類を多量に含む砂層で、下面には多量の木枝の存在が確認

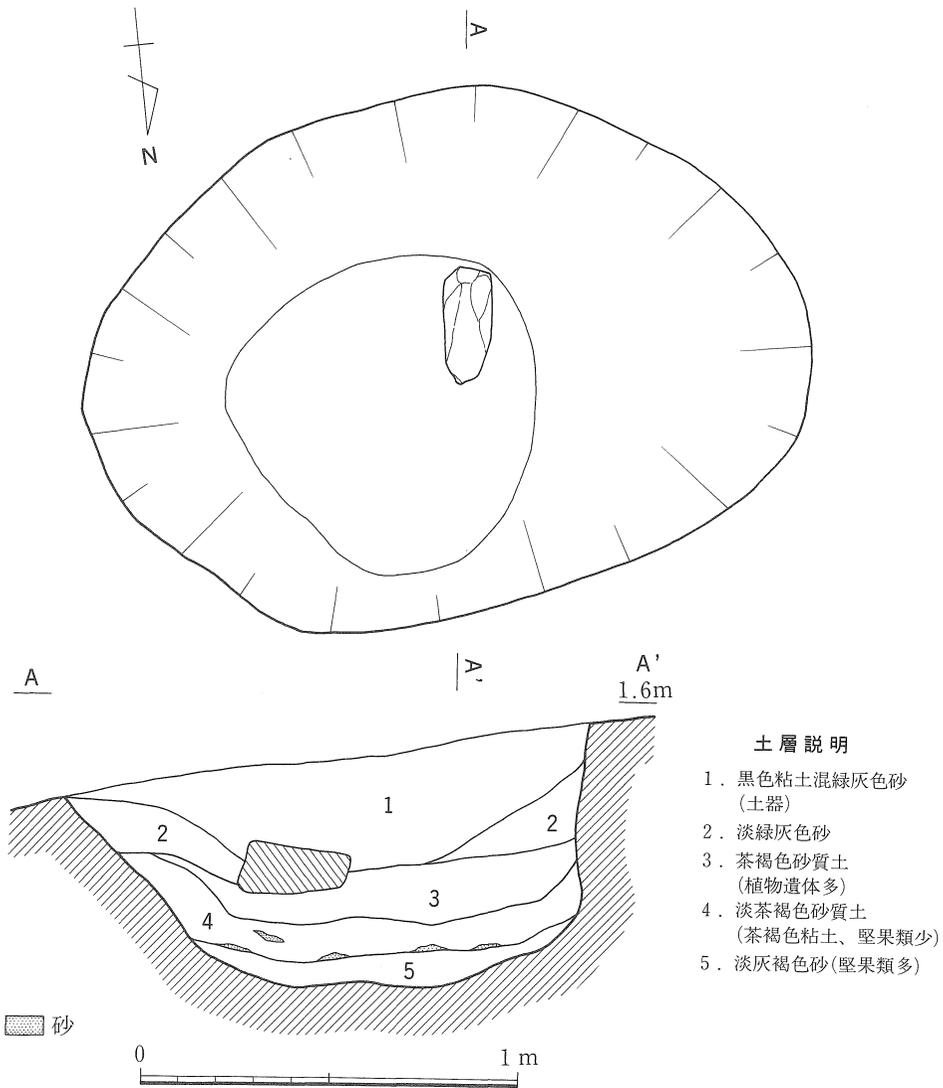


図27 貯蔵穴 SP 7 実測図 (縮尺1/20)



写真9 貯蔵穴 SP7完掘状態（北から）

された。人為的に敷かれた可能性も考えられるが、基盤に含まれる自然堆積のものと区別が困難であった。本遺構は、使用途上に放棄されたものと判断される。

時期は出土遺物から後期中葉と考えられる。 (山本)

土器(図28) 水洗選別を含めて41点と比較的多くの資料が回収された。図示できたものは9点である。1は浅鉢A類あるいは、鉢A類の口縁部文様帯の部分である。太い沈線が口縁部に平行に周回し、縄文が施文されている。2は無文で鉢C類に分類できる。3は深鉢B類の頸部で沈線により頸部が分帯されている。

4、5は深鉢B類の胴部である、6は小形の椀形土器で内外面に良くナデが施こされており、口縁が丸頭状に成形されている。

8は深鉢B類である。波状口縁で内面に一条の沈線が周回する。本遺跡の多くはこの沈線が波頂部内面で意匠をもつが、本例ではそれがない。また内面沈線の上端に区画された縄文の施文域が狭小化して、角頭状の口縁端部のみの極めて狭い部分に縄文が施文されるという特徴が指摘できる。深鉢B類における内文の簡略化・口縁部の肥厚の退化（平滑化）という現象は、この器種の変化を考えるとときに示唆的である。胴部と頸部の区分は沈線によっている。またこの個体に施文される縄文は他に比べて節が細かく、条が短いクセが指摘できる。

9も深鉢B類である。緩い波状口縁を成し、内面に一条の沈線が周回する。口縁部外面は緩く肥厚するが、明瞭ではない。本遺構から出土した土器はいくつかの器種を含み、それらにはいずれも第IV群土器を構成する特徴を指摘することができる。 (阿部)

石器(図28-7) SP7で出土した唯一の石器である。片理の発達した結晶片岩の円礫を利用している。欠損部分が大きいですが、端部に明瞭な敲打痕が残っている。 (富樫)

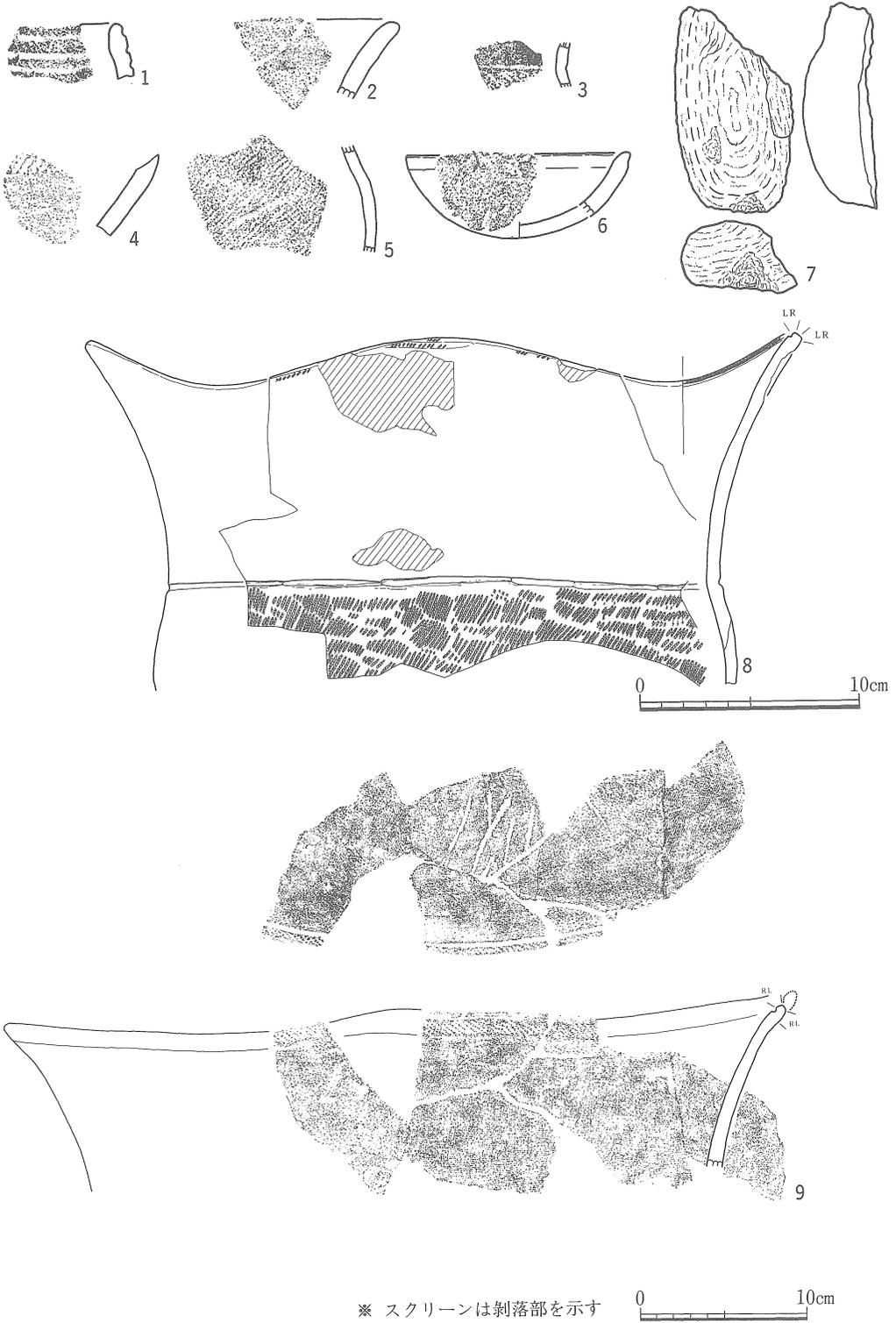


図28 貯蔵穴 SP 7 出土遺物 (縮尺1/3、9のみ1/4)

2. 晩期の貯蔵穴

ここで、南微高地側に検出された晩期の貯蔵穴に関して、図29によって説明しよう。図29で9層以下は後期の堆積層、2～8層が晩期の堆積層、1層は晩期～弥生前期の堆積層である。貯蔵穴の基盤層を形成するのは6層である。後期の微高地斜面（13, 17層）が急峻で下端がえぐられ気味になっているのに対して、この面での斜面はかなり緩やかになっている。また、斜

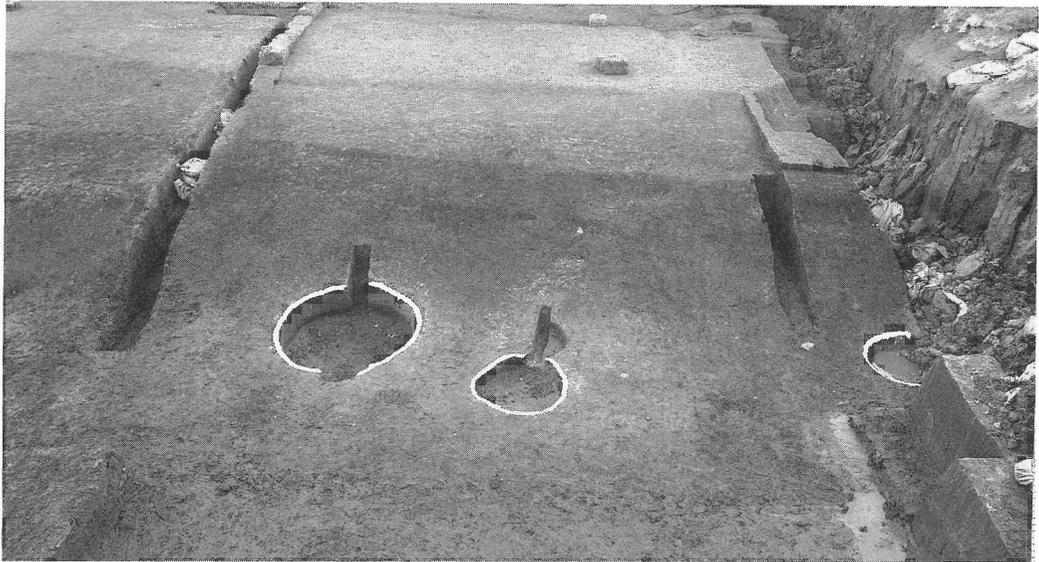
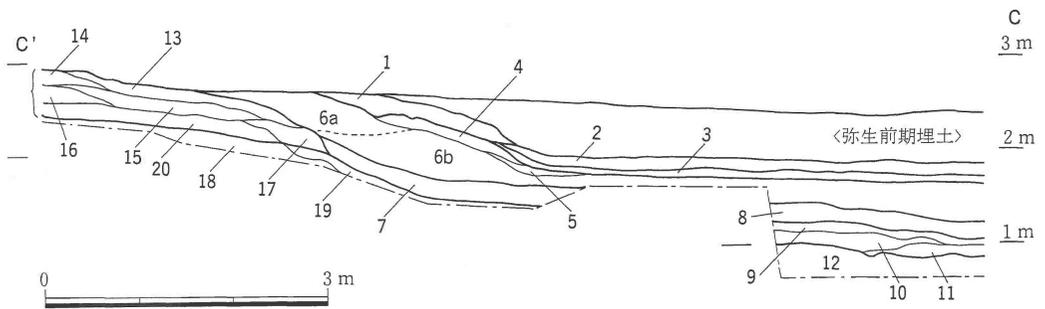


写真10 南側斜面における縄文晩期貯蔵穴群（北から）



- | | | | |
|--------------|-----------------------|--------------------|--------------------|
| 1. 暗茶褐色粘質土 | 6 a. 暗茶褐色粘質土
(砂僅少) | 10. 礫層(灰色粗砂・木質・炭少) | 15. 暗茶褐色細砂質土 |
| 2. 青灰色粘土 | 6 b. 黒灰色粘土(砂僅少) | 11. 暗灰色粗砂(木質・炭) | 16. 黄灰色細砂質土 |
| 3. 黒色粘土(炭多) | 7. 黒灰色粘土(軟質) | 12. 暗茶褐色土(礫・木質・炭少) | 17. 青灰色粗砂(礫) |
| 4. 黒灰色粘土(砂僅) | 8. 暗青灰色粘土 | 13. 暗茶褐色細砂質土 | 18. 灰褐色粗砂 |
| 5. 黒灰色粘質土(砂) | 9. 灰色粗砂(木質・炭) | 14. 黄灰色細砂質土 | 19. 礫層(2cm前後、青灰色砂) |
| | | | 20. 礫層(2～5cm) |

〈全体の層序〉との対応関係

- 1…〈18〉、2…〈19〉、3…〈20〉、4～6…〈21〉、7…〈23〉
 8…〈24〉、9～11…〈27 a〉、12…〈28〉、13～18…〈33〉、19・20…〈34〉

図29 南側微高地斜面土層断面図（縮尺1/80）

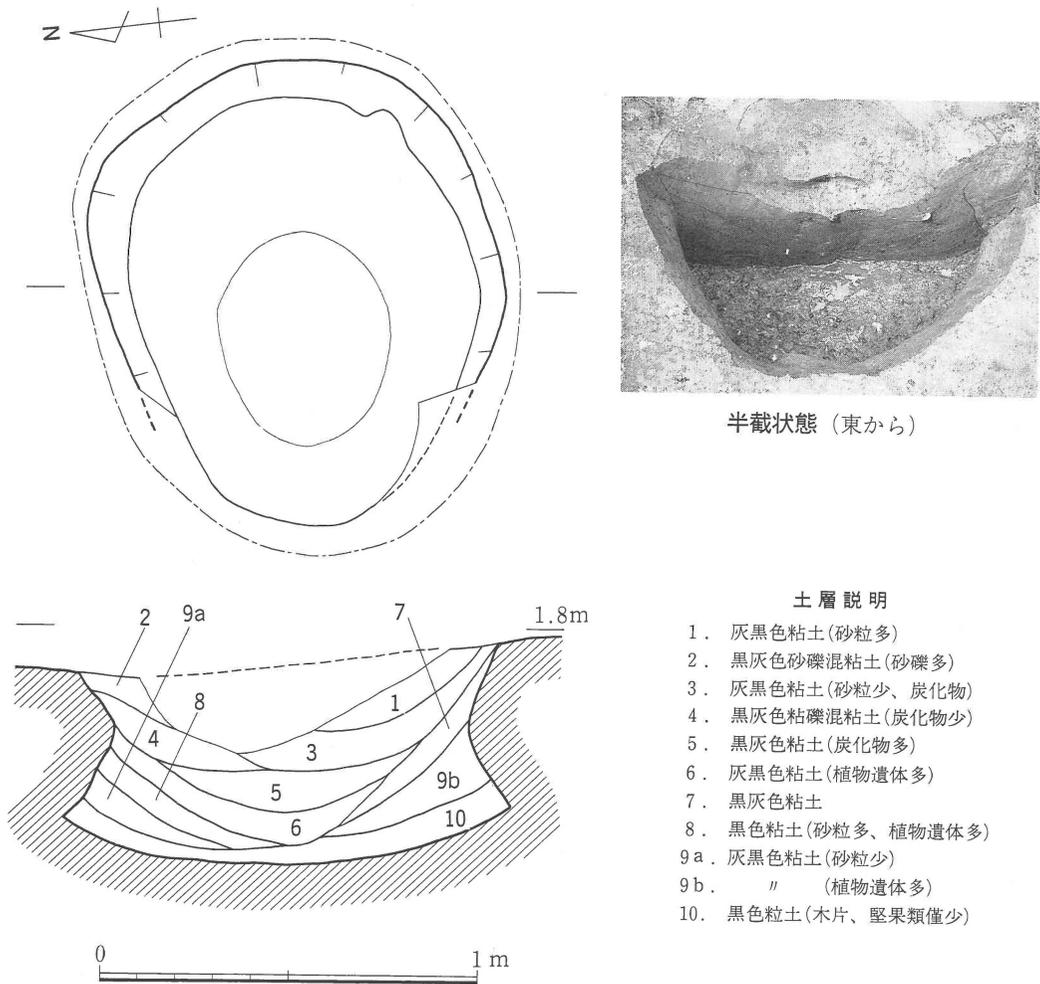


図30 貯蔵穴 SP 8 実測図 (縮尺1/20)

面から河道部にかけて約4m程度の幅で比較的平坦な面が広がり、そこから河道部へ下降する。しかし、その比高差は僅かであり、北側微高地に見られた後期の在り方とは異なる。やはり、河道部に豊富な水流を有したと推定される後期と、低湿地的様相を示す晩期の差を反映しているものと考えられる。貯蔵穴はその斜面下端部、平坦部との境に位置する。 (山本)

貯蔵穴 SP 8 (図30)

遺構の構造 南側の微高地斜面下端に位置する。調査区の西端付近である。検出面は1.7~1.75mで、〈21c〉層上面にあたる。西端部分は側溝で上部を破壊される。平面形は残存部で125×105cmの楕円形を呈す。復元推定では135×105cm程度まで想定することができる。底面は115×140cmの楕円形を示し、標高1.17mに位置する。深さは55cmで下面は礫層に達し、さらに10cm程度下がっている。掘り方はフラスコ状を呈すが、底面は緩やかにカーブする。くびれ部分は標

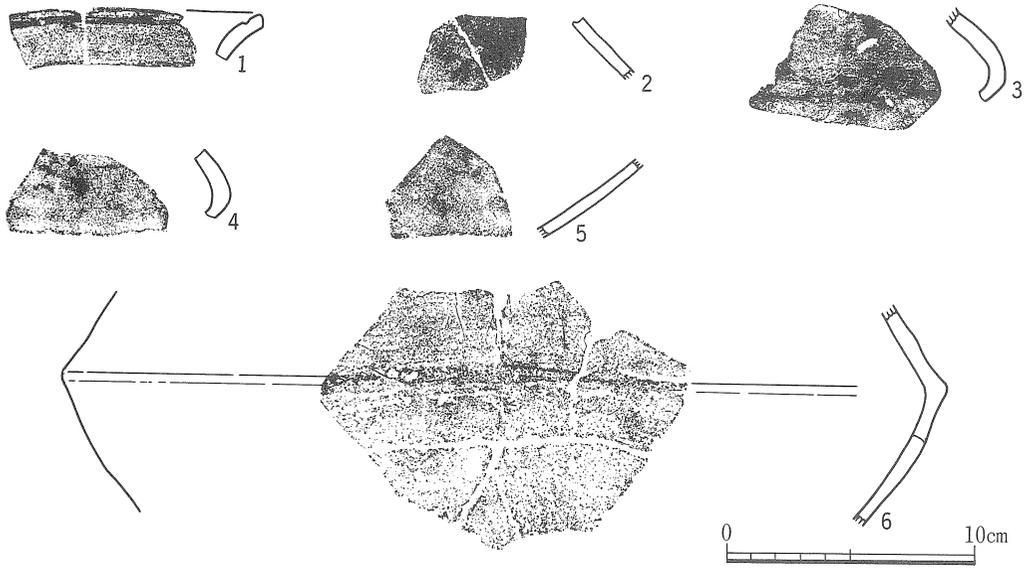


図31 貯蔵穴 SP 8 出土遺物 (縮尺1/3)

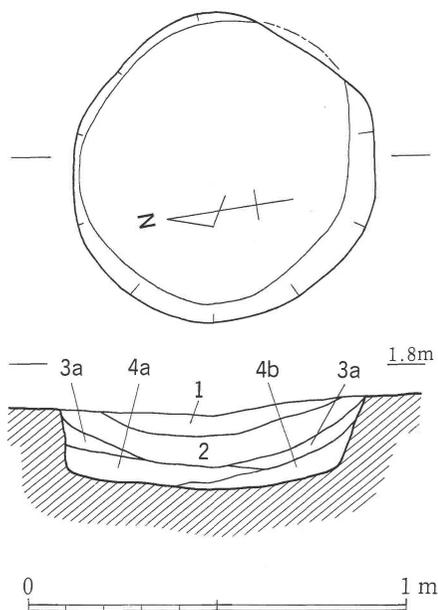
高1.55m付近に位置する。

埋土は1～10層までが黒～黒灰色系の粘土層で覆われ、大きな差は認め難いが、包含物に注目すると1～4層、5～9層、10層の三分が可能である。1～4層は砂粒を多く含むほかは炭化物が少量認められる程度で、最終的な流入土であることが予想される。その中では1層と3層、2層と4層との共通性が高く、互層構造が認められることから、段階を追って埋没したことが考えられる。5～9層は植物遺体と炭化物を多量に含む層が特徴的な一群である。しかし、それ以外は上層の一群と大きな差は認められない。基本的には流入土的な性格をもつ土層と考えられるが、上層とはやや異なる面も有することから、貯蔵穴廃棄後に早い時期に埋積した土層ととらえたい。10層は堅果類(アラカシ)を僅かに含む粘土層である。上面には植物遺体の広がり確認された。堅果類は底面に僅かに認められたのみである。時期は突帯文土器の時期が想定される。(山本)

出土遺物

土器(図31) 貯蔵穴内からは、土壌の水洗選別を含めて93点の土器が回収された。しかしその大半が破片であり、資料化できたものは6点のみである。多くの破片は後期第Ⅲ、Ⅳ群と思われ、磨滅が顕著である点からしても、周辺からの混入と考えられる。遺構の時期を決定できるものは、遺存状態の良い数点の土器でこれらは晩期後半に比定できるものであった。

1～6は胴部が屈曲して頸部の外反する鉢である。1は外反する鉢の口縁部である。内面に浅い一条の沈線が周回し、良く研磨されている。2～4は肩部の破片で、3、4は屈曲部の下半に接合痕跡が残る。6は胴部であるが、他に比べると器面調整が粗い。また胴部の屈曲部はつまみ出した様に突出している。これらは器面がよく研磨されており黒色を呈するものが多い。



完掘状態（西から）

土層説明

1. 灰黒色粘土(砂粒)
2. 黒色粘土(砂粒少)
3. 黒灰色粘土(緑灰色砂少)
 - a. 砂粒少 b. 砂粒多
4. 黒色粘土
 - a. 円礫、炭化物 b. 砂粒、炭化物

図32 貯蔵穴 SP 9 実測図 (縮尺1/20)

広く「黒色研磨土器」と呼称されているものである。

(阿部)

貯蔵穴 SP 9 (図32)

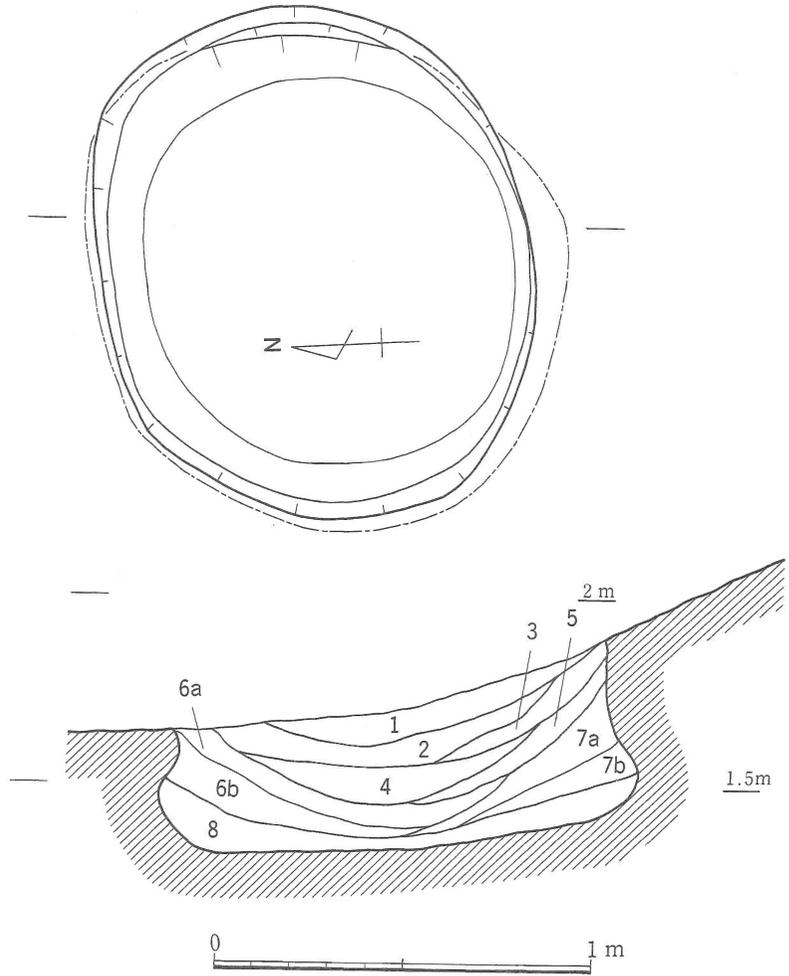
遺構の構造 南微高地斜面下端において、SP 8の東3mの位置に検出された。検出面は標高1.7mであったが、本来は<21c>層上面まで上がると考えられる。平面形は径80cmの円形を呈し、深さは20cmが確認された。本来の掘削面を考慮すると、10cm程度は深さが増すことが推定される。底面は径70~75cmを測る円形で、標高1.45mに位置し、砂礫層上面から5~8cm下がる。掘り方は箱形に近く、一部でオーバーハングが認められた。埋土は四分されているが、いずれも黒灰色~黒色粘土をベースにした土層で、包含物も砂粒あるいは砂礫の量の違いがある程度で、各層間の差は極小さいといえる。堅果類は全く確認できなかった。完全に使用済みで放棄されたものと思われる。時期は突帯文土器の時期と考えられる。

(山本)

貯蔵穴 SP 10 (図33)

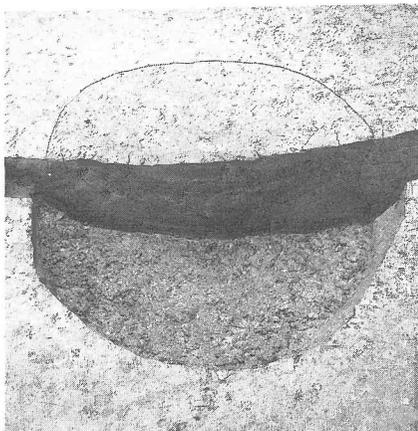
遺構の構造 南微高地斜面下端において、SP 9の東約2mの位置に検出された。検出面は1.9~1.65mで<21c>層上面である。平面形は径138×115cmの楕円形を呈し深さは35~45cmを測る。底面は径100cmの円形で、標高1.33mに位置し、砂礫層上面から5~10cm前後下がる。掘り方は下半部が若干オーバーハングしフラスコ状を示す。埋土は全体的に共通性の高い土層である。1~4層は灰黒色粘土と黒色粘土が互層に堆積している。SP 8の堆積状態に類似しており、貯蔵穴廃棄後の流入土的性格が考えられる。堅果類はシラカシの殻が1点出土した以外は認められなかった。図示できる遺物は無いが、土層関係から突帯文土器の時期と考えられる。

(山本)



土層説明

1. 灰黒色粘土
(砂粒多、緑灰色砂少)
2. 黒色粘土(炭化物多)
3. 灰黒色粘土(砂粒多)
4. 黒色粘土
5. 黒色粘土(砂粒多)
6. 灰黒色粘土
a. 砂粒
b. 砂粒少
7. 灰黒色粘土
a. 砂粒多
b. 砂粒少
8. 黒色粘土(炭化物多)



◀ 半截状態 (西から)

図33 貯蔵穴 SP10実測図 (縮尺1/20)

表1 貯蔵穴一覽表

番号	地点	時期	形状・規模 (cm)		堅果類 (種類と量)			備考			
			平面形状	長さ	アラクシ	コナラ	トチ		アベマキクヌギ	シラカシ	その他
1	北斜面	後期	楕円 (100 × 90) 58	(43)	◎	○	△	v		完形の深鉢 上部破壊	
2	"	"	楕円 (120 × 110) <130 × 115> 65	50 ~ 60	◎	○	△	v	ナラガシワ v	多量の堅果類の堆積層 一部破壊 楠出土	
3	"	"	楕円 125 × 115 80 × 60	65 ~ 75	◎	△			アベマキクヌギ v		
4	"	"	不整円 110 × 105 50	60 ~ 65	◎	△	v				
5	"	"	不整楕円 178 × 160 90	90	△	△			オニグルミ v		
6	"	"	楕円 120 × 104 楕円 90 × 80	90	◎	v	v		アベマキクヌギ v	ナラガシワ v	
7	"	"	楕円 190 × 140 不整円 85 × 80	60	◎	v					
8	南斜面	晩期	楕円 (125) × 105 <135> 楕円 115 × 140	55	△						一部破壊
9	"	"	円 80 円 70 ~ 75	(20)							
10	"	"	楕円 138 × 115 円 100	35 ~ 45					v 斗 殻		

() : 残存値、< > : 復元推定値 ◎ : 多量、○ : 普通、△ : 少量、v : 僅少
A : 逆台形 ~ ボール状、B : U字形、C 1 : 一部オーバーハンング、C 2 : 大半がオーバーハンング

4. 縄文時代の包含層出土遺物

1. 遺物の出土状態

縄文時代の包含層と旧河道に構築された貯蔵穴群の調査に際しては、まず河道を横断する南北方向のトレンチを設け、河道部分を中心とした堆積構造を明らかにする必要があった。そのために河道を横断するかたちでサブトレンチを設定して調査をおこなった結果、河道内における土層の堆積構造を明らかにすることができた。そしてまた、27b層上面において大量の遺物を包含するピークを確認し、さらにこの下に無遺物層をはさんで堆積する遺物の包含層を確認した。

これらの遺物群は、基本的には時間差を反映したものと考えられるが、27b層以下については調査範囲が狭いために得られた遺物は多くはない。ただしこれらの遺物の出土は、この周辺が後期初頭以降、幾つかの無遺物層を挟みながらも、断続的に生活の舞台とされた事実を物語るのであろうし、後期中葉の河道と微高地部分の形成といった、この地点の複雑な地形の変遷を復元するための重要な手掛かりのひとつとすることができよう。

後期の遺物を出土した層では25a層がもっとも新しい時期にあたり、この層は河道北側の斜面に構築された貯蔵穴群が機能していた時期から、それらが廃絶されて埋没する過程で行われた遺物の廃棄行為にともない形成された層である。遺物の集中は、とくに調査区の東側に偏る傾向が読み取れる。

旧河道内に堆積した27b層は、層位的には25a層よりも古く、北側斜面の利用が開始される以前の段階に多くの遺物の廃棄が行われている。大半の遺物はこの層の上面に集中したという所見が残されている点からしても、比較的短期のあいだに集中的な投棄が行われた事実を暗示するであろう。25a層と27b層の堆積順序と両層から出土した豊富な土器群の型式学的特徴は整合的であり、27b層から25a層の土器群へと、後期第Ⅳ群として大別された土器群の内部における時間的な変化をたどることができる。

27b層の下には一枚の無遺物層を挟んで、少量の遺物が出土した層(29層)がある。ここからは、後期第Ⅰ群から第Ⅲ群と分類した後期初頭より前葉にかけての土器群や石器類が出土した。

また33a層は河道南側の斜面の肩部を形成する層であり、量は少ないが、後期第Ⅰ、Ⅱ群土器が出土している。旧河道の両側に形成された微高地部の形成時期をこれらの遺物の在り方から推測すると、南側の微高地の形成が年代的には古く、北側が微高地化して縄文人の活動の舞台となったのは後期第Ⅲ群土器のおこなわれた時期、すなわち後期中葉ということになる。

(阿部)

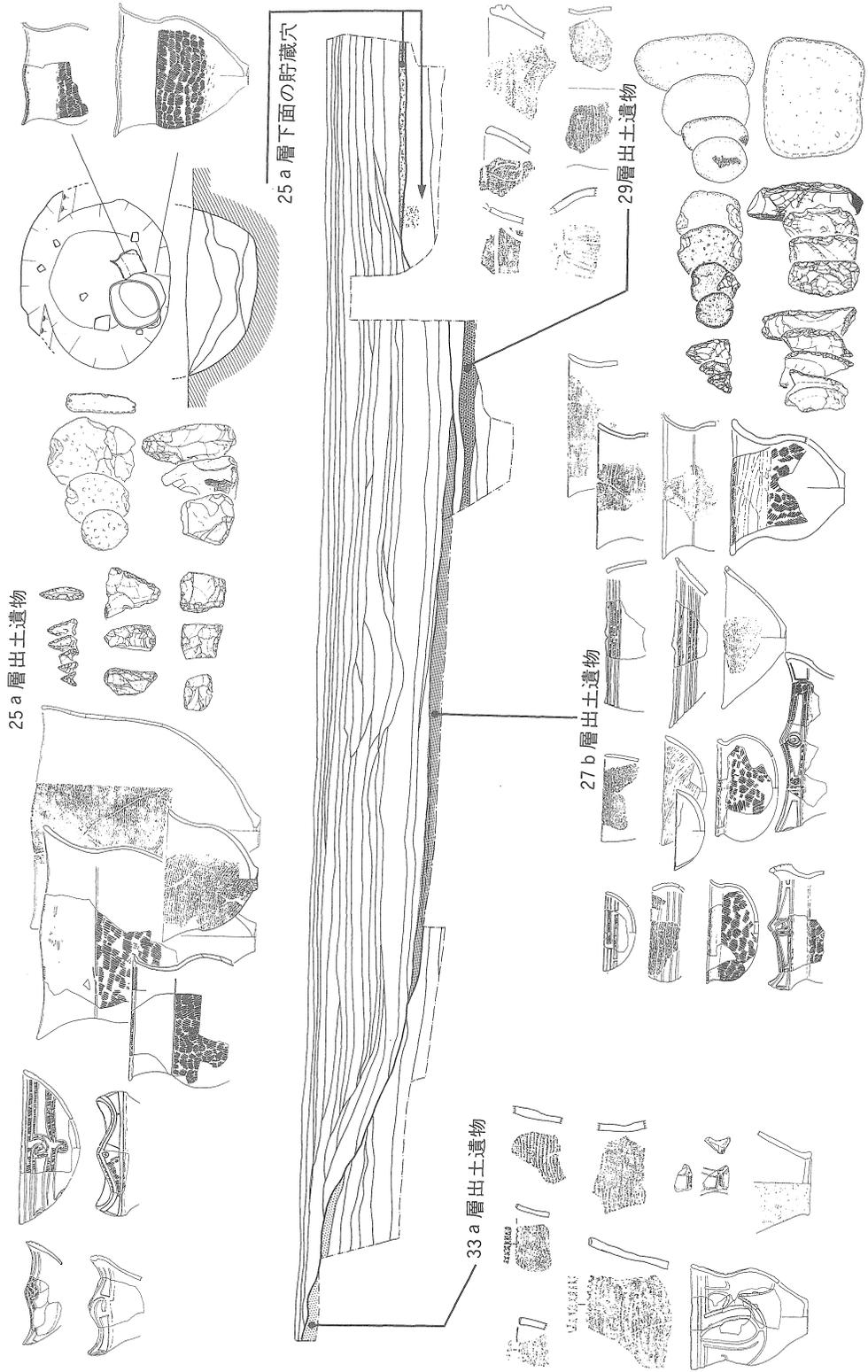


図34 縄文時代後期の遺物包含層の堆積状態と出土遺物の概要

2. 29層出土の遺物 (図35)

本層から出土した遺物は32片の土器と剥片が1点ある。そのなかで文様や整形痕を良く残す資料を図示した。1、2は後期第I・II群に帰属する。1は太い沈線によりモチーフを描き、区画の内部に節の細かい縄文を充填する。器体が薄手である点や、縄文原体のクセなどから、中津式あるいは福田K2式に比定できる。2は深鉢の口縁部である。沈線で区画された内部に縄文を充填する。口縁部下に上向きに付く渦文は多くはないが福田K2式に近似するものがある。

3、4は口縁部に太い沈線が巡り、4はこの部分が肥厚し縄文が施文されるといった特徴がある。5～7は沈線によるモチーフを描き、5は方形の重圏文を描く胴部破片である。8～16は巻貝による条痕調整をおこなう深鉢である。これらは後期第I、II群の粗製深鉢であろう。

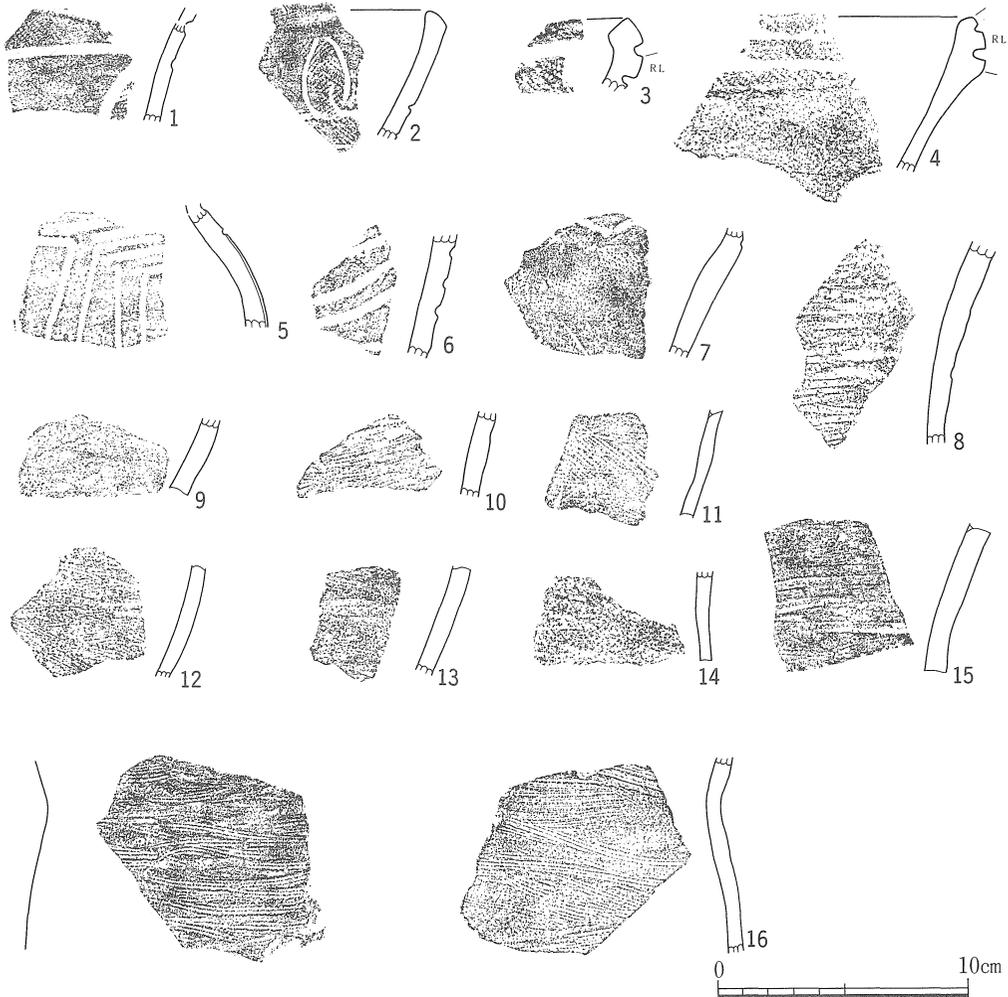


図35 29層出土遺物 (縮尺1/3)

3. 33a層出土の遺物

本層からは47点の土器と1点の石器が出土した。この層は河道の南側の斜面を形成する層であり、出土した土器群はすべて後期第I、II群に比定できるものであった。

土器(図36) 文様が描かれるものは、5、6、11、13のみで、他は横位主体の貝殻条痕を器面の内外に施文する鉢または深鉢である。1は器形から判断して鉢であろうか。2～4は口唇部に丸棒状の工具による連続した刻みを施すもので、中津式から福田K2式の粗製深鉢の特徴と一致している。

12は深鉢の胴部下半部である。底面は欠損しているが、幾分上げ底で、底形が約10cmほどの本遺跡の縄文土器のなかでは大形の部類に入る。胴部には縦位の貝殻条痕が施されている。

5、6、11は太い沈線により文様を描くもので、5は縄文を施文する。

11は唯一器形の復元できたもので、胴部が緩く膨らみ口縁部が外反する深鉢である。指頭による押圧により、器面は薄手に成形されているが、凹凸が多く、大粒の岩石鉱物粒子が器表面に露出する。太い沈線により曲線的な文様を描くが、薄手の器体であるために、内面に沈線が浮き出る部分がある。破損部分が多いが文様は下端部が波状に区画され、胴部上半に大柄な渦巻き文を配した構成が想像できる。沈線は太く、文様を描く際にはみ出した粘土が沈線の端に付着する部分があり、総じて後期初頭の中津式に近似する特徴を備えるが、描線が交差したり、縄文の使用が見られない点などから、中津式のなかでも新しい部分に比定できるかもしれない。13は橋状の把手部分の破片であり、壺あるいは鉢の胴部に付くものであろう。外面には沈線による縁取りが施され、縄文が充填される。こうした把手をもつ壺は福田K2式に類例が多い。



写真11 北側斜面における調査状況 (25a層)

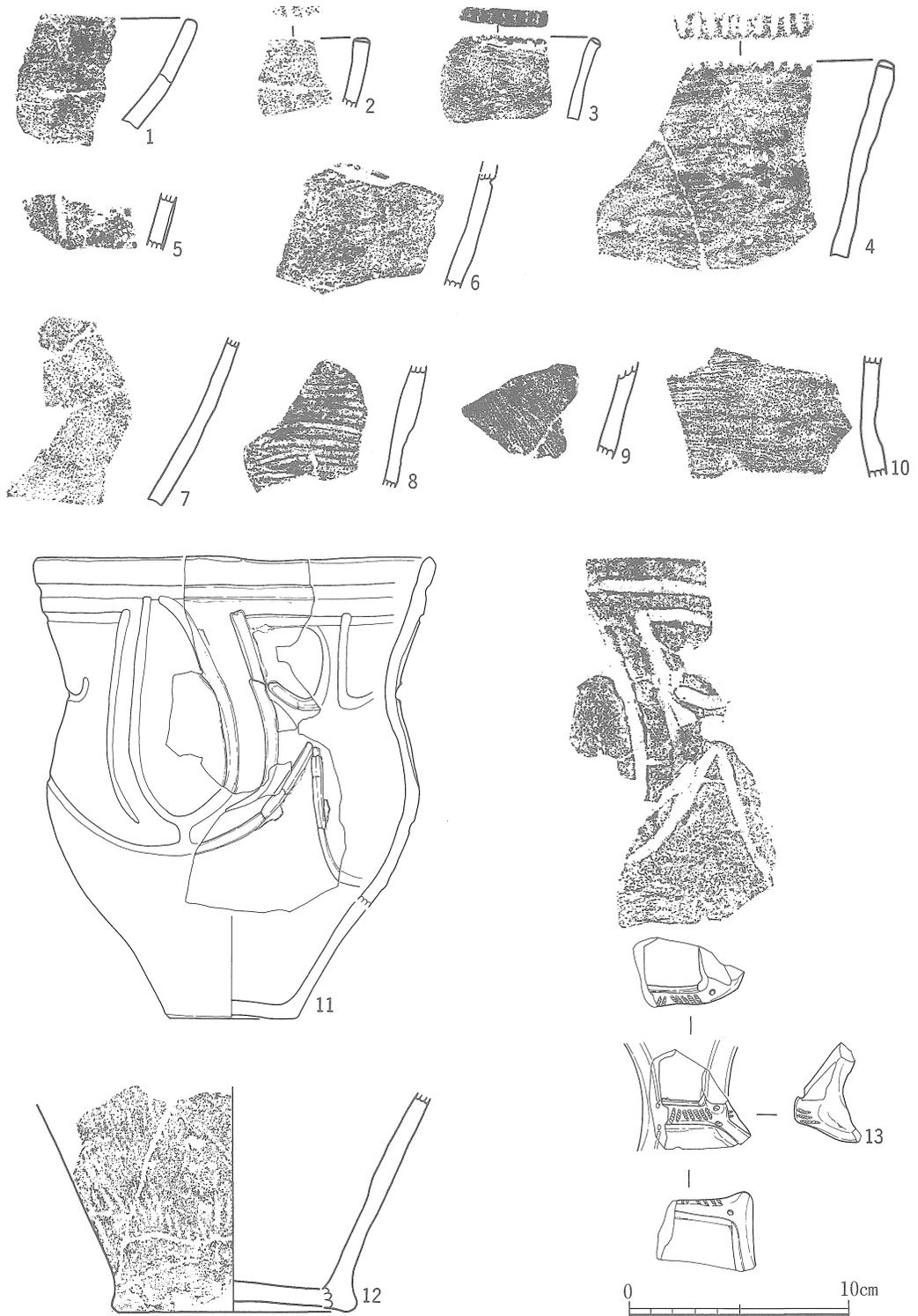


図36 33 a 層出土遺物

4. 25 a 層出土の遺物

1. 遺物の出土状態

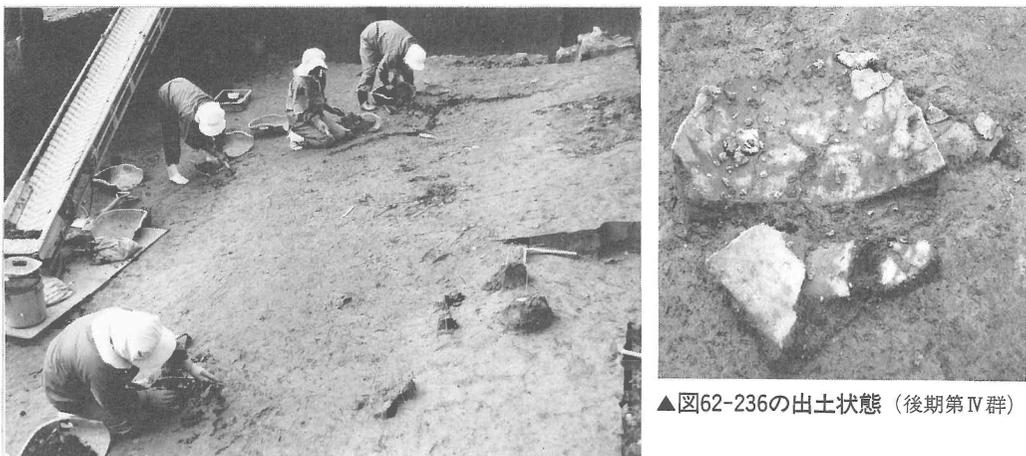
調査の進行にともない、調査区の北側に縄文後期の貯蔵穴群が検出され、その内部と周囲からは大量の遺物が出土した。25 a 層出土の遺物としてここで報告するのは、この貯蔵穴群の周辺から集中的に出土した遺物である。

縄文時代後期の遺物は、河道の浸食等による包含層の部分的な攪乱による以外、本層にいたるまで殆ど出土が認められなかった。25 a 層の調査の時点で大量に遺物が出土しはじめたため、主要な遺物の出土位置を記録した。いまその記録をもとにして復元できる遺物の出土状態の特徴は、河道にいたる斜面の上方部分にひとまとまりの遺物集中区を形成している点である（図37）。

そして、それらの大量の遺物の出土レベルを縄文後期の河道にいたるラインの土層堆積に投影してみるならば、貯蔵穴の構築面にあたる25 a 層を中心とした斜面に堆積した土層に集中することが明らかである（図37）。こうした事実は、出土した大量の遺物の廃棄ブロックが、貯蔵穴の機能していた時点から廃絶されるまでの過程の、比較的短い時間のなかで形成されたことを暗示しているものといえる。

遺物の集中区は貯蔵穴群の位置よりも若干斜面の上方に位置する傾向があるが、貯蔵穴の覆土中からも、おおくの土器や石器などの遺物が出土しており、なかには本層から出土したものと接合するものもあるので、遺物の投棄は未だ貯蔵穴が埋没する以前にそのピークをもっていたものと推測される。

遺物群の多くは土器であるが、これに石器やその剥片がともなった点は、この廃棄ブロック



▲図62-236の出土状態（後期第IV群）

写真12 25 a 層における後期第IV群土器の出土状態

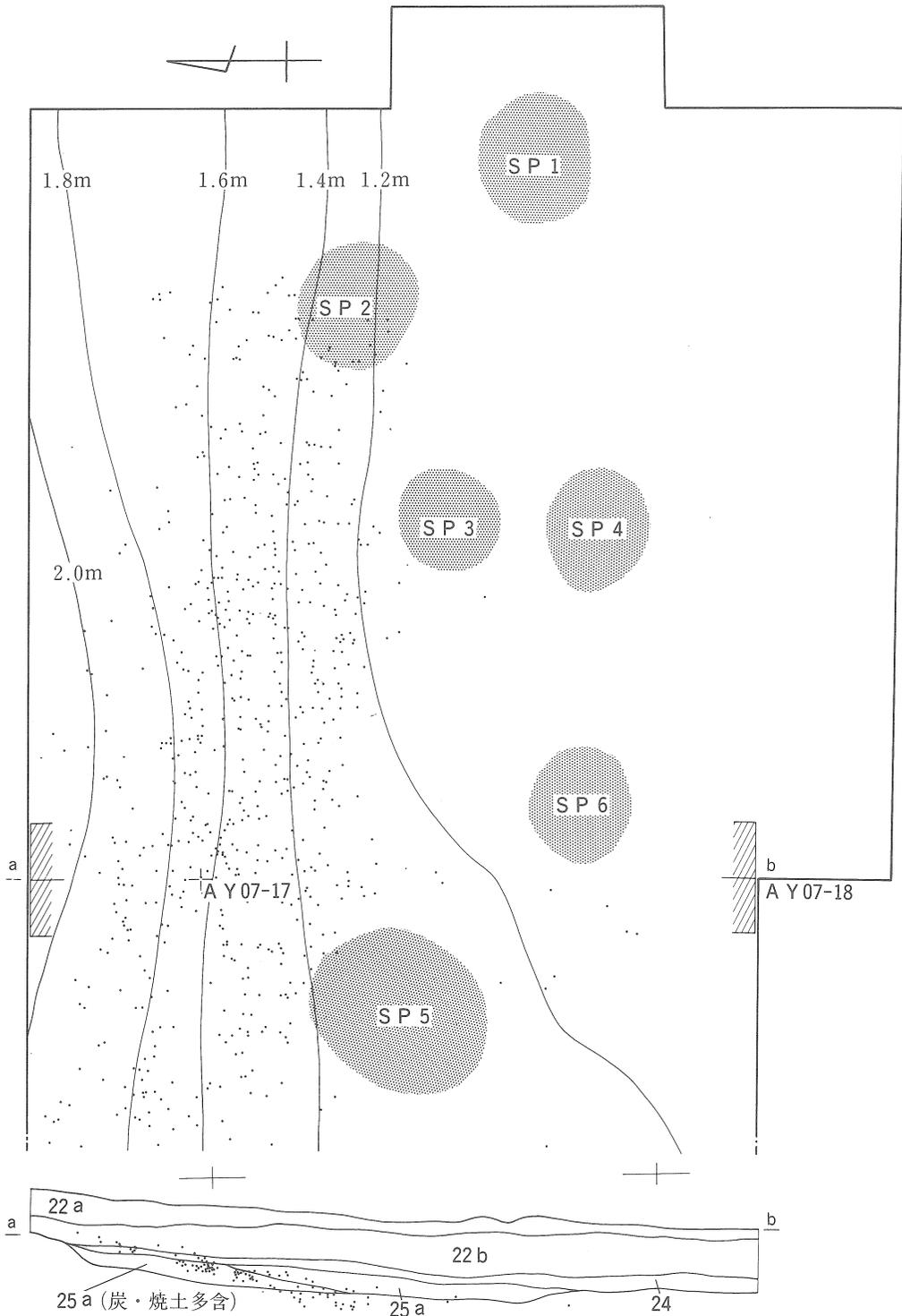


図37 25 a層における遺物分布状態 (縮尺1/60)

の形成の背景にあった活動の構成を暗示するものとして興味深い。石器は石鏃や石錘、石鋏といった生産用具や楔形石器、搔器などの加工具類から構成されている。これらの器種の構成は当該期の石器群の特徴を良く示しており、石鏃や石錘、石鋏といった生産用具の組成は周辺に環境に適応した多角的な生産活動が計画されたことを示唆するであろう。また、石器の製作に関わる剥片類の出土は、石器の製作と消費といった一連の工程を担った活動が、至近の位置で行われていたことを暗示する。出土した遺物の量とその種類や、貯蔵穴の構築といった事実から類推すると、それは生産活動の拠点的な性格をもつものであった可能性が大きい。

2. 25 a 層出土土器 (図38~65)

25 a 層から出土した遺物は、土器や土製品と石器や剥片類がある。これらは調査区のなかで、とくにその東側に分布の中心をもって出土した(図37)。以下では土器、土製品、石器の順で説明を加える。

図38—1~8は後期第II群である。本層より出土したもののなかで、型式学的にもっとも古いものである。1、2は波状口縁で器面を飾る磨消縄文が波頂部にかぶるように取りついたのである。口縁部は肥厚し丸頭状を成す。1は波頂下に渦巻きのモチーフが配置される。2の波頂下端の三角形のモチーフが非対象なのは、1と同様にここに右巻の渦巻が描かれるからであろう。これらは福田K 2式に比定される。5、6は同類の胴部である。3は口縁部に太い二条の沈線が周回し、それにより作られた二条の隆帯が巡る。胴部は縄文を施文している。4は無文の口縁部で、丸頭状の断面形態を成す。

7、8は器面に横位のケズリやナデ痕を残し、7は上部に隆帯が巡る。これらの土器は図示したものが全てであり、全体の出土量も少ない。加えて遺存状態が他の土器に比べて悪く、包含状態が異なっていた可能性がある。

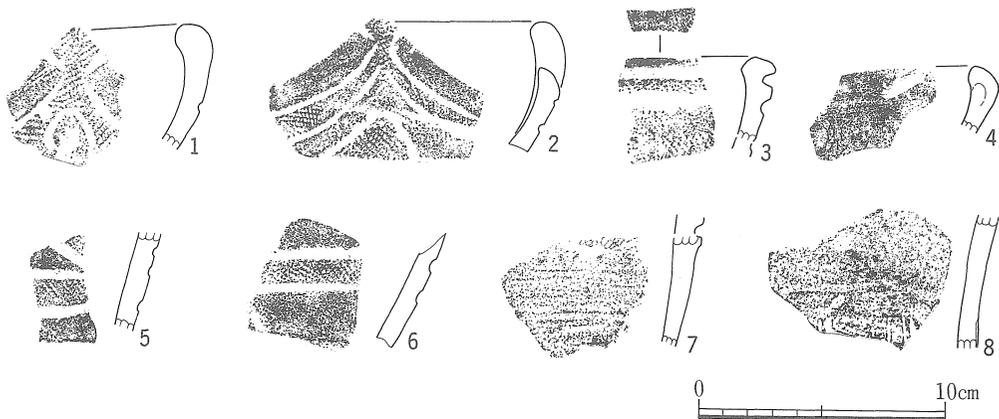


図38 25 a 層出土遺物(1) (縮尺1/3)

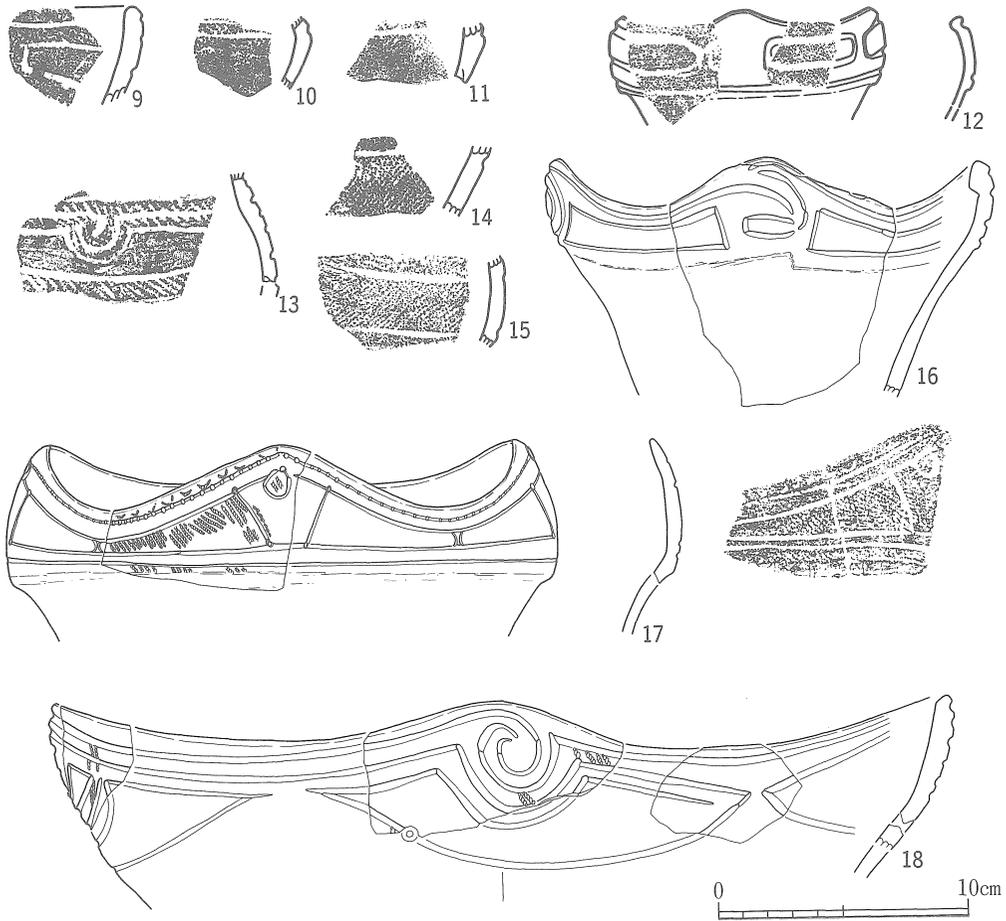


図39 25a層出土遺物(2) (縮尺1/3)

深鉢A類(9~18) 12、16~18にみるように、これらは波状口縁となる。頸部は無文で13~15は胴部上半に文様帯が配置されており、文様帯は頸部の無文帯をはさんで、口縁部と胴上半に分帯するものである。口縁部の文様帯は波状部に渦巻文が描かれ、その間を杵状の区画文で連結するものが多い。18は渦の周囲下端を囲むモチーフが描かれる。16は上から垂れ下がる渦巻が2本の沈線により描かれ、18も2本沈線による同様のモチーフが描かれる。口縁部の文様帯は12は幾分肥厚しているが、16の様にわずかな段をもったり、17のように屈曲をもつものがある。文様帯の下端は17に代表されるように水平に分帯されるものと18のように口縁部に文様がぶら下がるような構成の二つの系列がある。

16を除いていずれも縄文が充填されているが、17は口縁部上端に巡る沈線内に円形の刺突を連続させ、上端に結節縄文が施文される(巻末写真図版二四-17)。17の波頂部下の円文は他例を参考にすれば、渦巻の退化したものと考えられる。

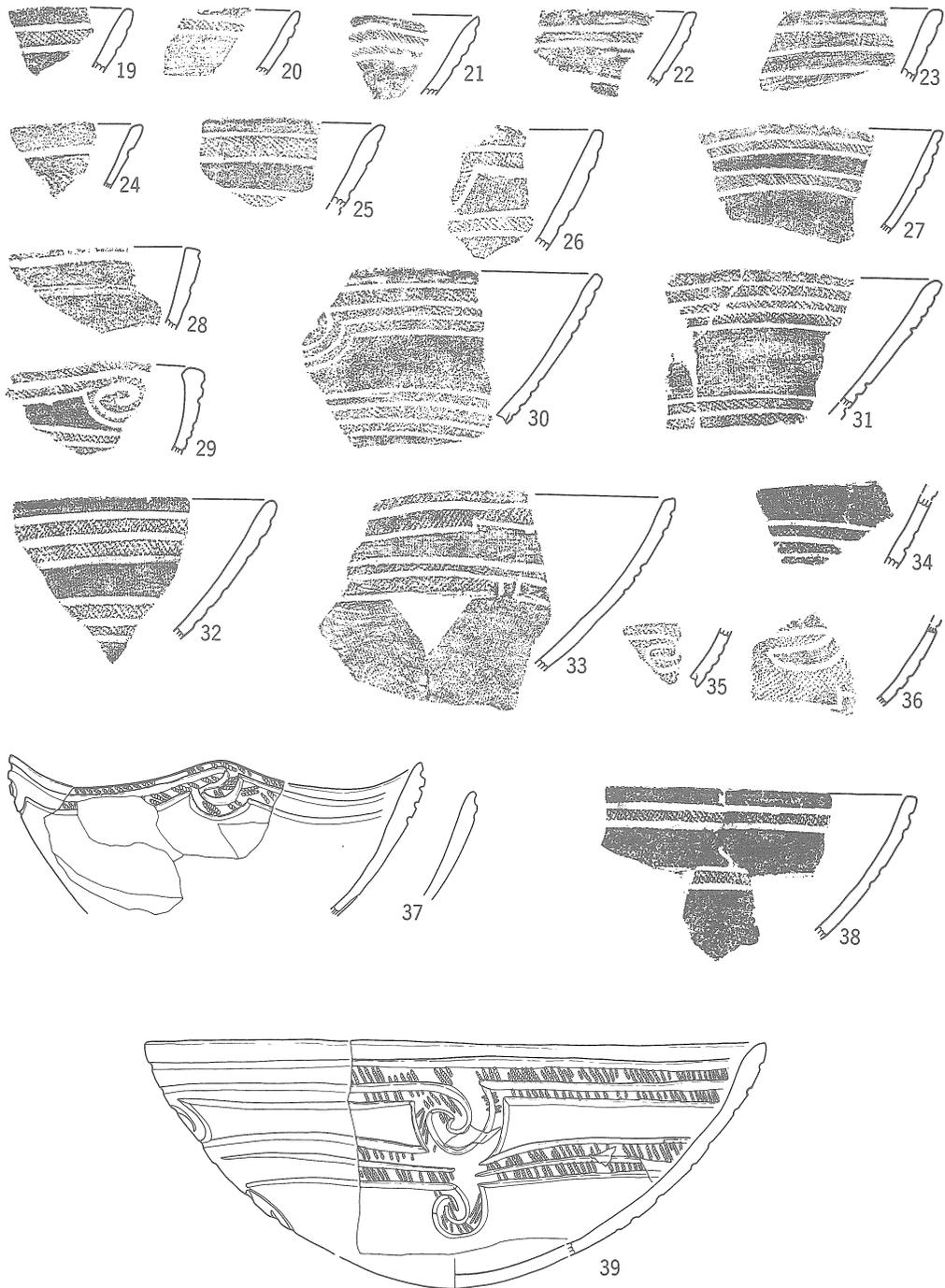


図40 25a層出土遺物(3) (縮尺1/3)

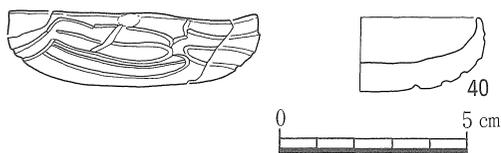


図41 25 a 層出土遺物(4) (縮尺1/2)

浅鉢A類 (19~39) 口縁部以下に二ないし三本の沈線による帯縄文を巡らせるもので、これらは要所に渦巻き文を配置する。基本的に平縁のものが主体となるが、21、29、37のような小波状のものもある。これらは小形のものに限られるようである。

文様の中心になる渦巻きのモチーフは、29、30、37のように一段のものと39を典型とする二段構成のものがある。二段構成のものは下の渦巻がぶら下がるように描かれる。36も下段の渦巻き部分であろう。39例によれば渦巻をはさむ縄文帯は渦巻の部分で間隔を広げるクセがある。そうしてみると、22、23、27、32、33といった帯縄文部分のみの破片も、無文部が間隔を異にするクセが指摘できる。本群の文様構成は基本的に要所に渦巻き文をはさみこんだ帯状の構成であったと考えられる。42は本類の下半部である。

40は浅鉢のミニチュアである。手づくねで外面に横位に連結する曲線的な文様を描き、このモチーフは構成上、浅鉢A類に近似している。

41は小形の椀に近いもので2条の帯縄文が巡る。

42は本類の胴下半部である。上部に帯縄文部が残存する。また胴下半部に被熱による赤化部分が認められる。

鉢A類 (43~46) 口縁部付近に文様帯を配置するもので、44、45は口縁部に小突起が付く。43、44は幾何学的な文様を描き、縄文を充填する。45の突起上端には端末を刺突する沈線が引かれている。46は浅鉢A類か鉢A類と思われ、口縁部に渦巻き状の文様が描かれる。47は胴部が膨らむ鉢または注口で、器面が良く研磨されている。上半には沈線による文様が描かれるようで、資料の上端に細く深い沈線の一部が残存する。

鉢D類 (48~58) 無文で小形の丸底の鉢である。口径は10cm前後と小形であり、器面は比較的丁寧に成形されているものが多いが、57、58のみは巻貝条痕を残す。53は完形でとくに小形であり、厚手で手づくねにより成形されたものらしい。口縁部の資料のみからは浅鉢B類と区分することが難しいが、ここでは口径と外反角度と口縁部形態から両者を区分した。

鉢C類 (74) 浅鉢B類とは異なり、平底から急角度に立ち上がる形態で、器面は無文で良く研磨されている。小破片になると浅鉢B類との区分が難しくなるが、判定できる資料による限り本層からの出土は少ない。74の胴部には二個の補修孔があいている。

浅鉢B類 (59~72) 特に文様のない浅鉢をまとめた。点数は多くはないが、口縁部の形態に幾つかのバラエティが認められる。68、72は口縁内面が滑らかな曲面をもち、肥厚するものである。口縁部内面の形態は横位のナデと磨きにより成形されている。

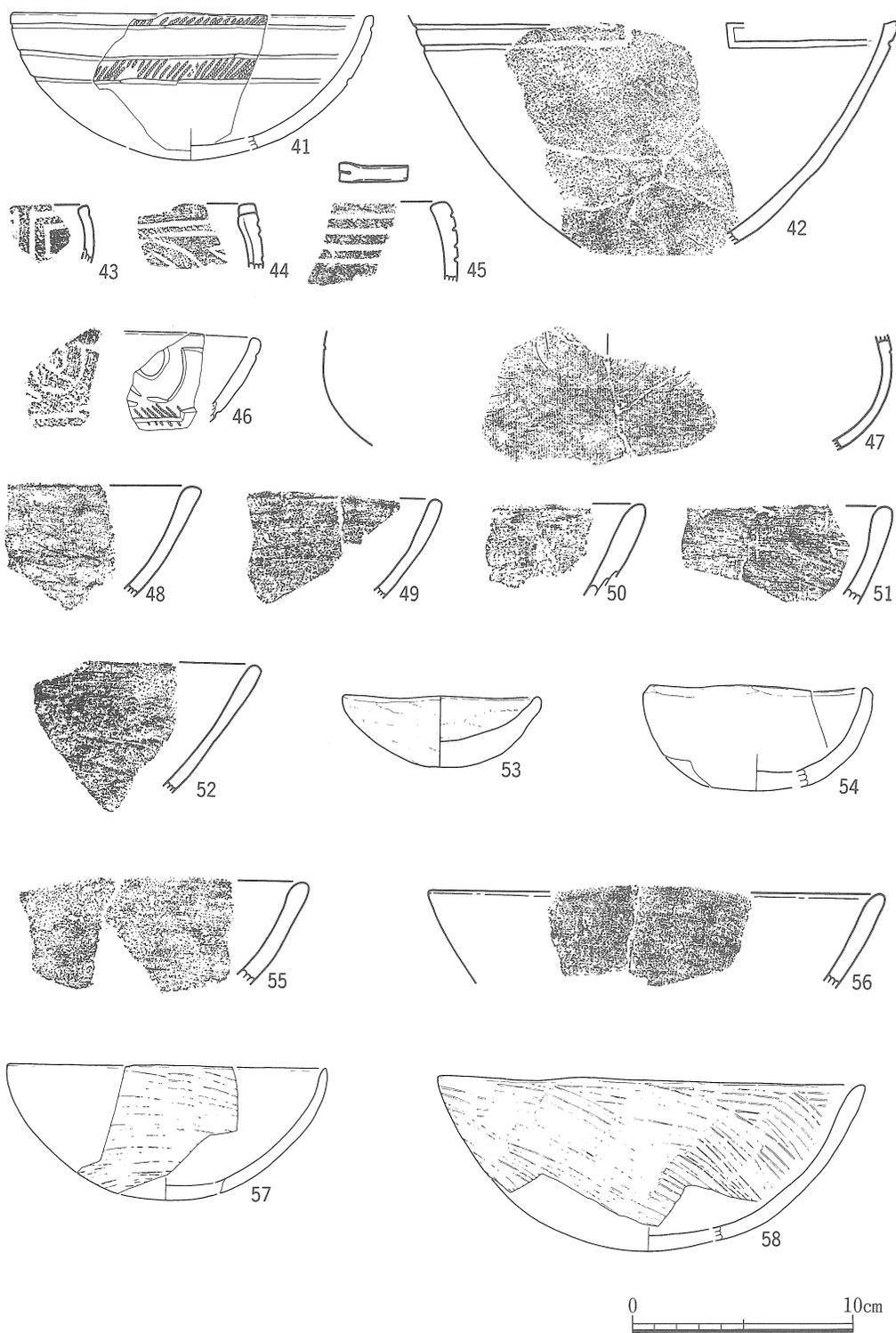


図42 25 a層出土遺物(5) (縮尺1/3)

72は波状口縁となり、器面はよく研磨されている。明確な波状口縁となるものは本例のみである。浅鉢A類にも波状口縁が少数存在する点から、浅鉢B類はA類と形態上相同の関係になるのであろうか。

60～66は薄手で口縁断面形態が丸頭状を成すもので、本層から出土した資料の大半がこの類に含まれる。底部は70は上げ底であり、75は平底というように、底部の形態に差異のあるものを含む。68は口縁部が小波状になり、内面に円形の刺突が施される。精製土器との関連を示唆するであろう。76は口縁部の内面に一条の沈線を引き、その上端に縄文を施文するもので、1個体のみ出土である。口縁部内面の装飾は、深鉢B類の内文と関係するかもしれない。

鉢B類(77～101) 口縁部と胴部に縄文を施文し、外反する頸部を無文帯とするもので、深鉢B類と施文域の構成が似ている。口縁部の形態には明瞭な段をもって肥厚するもの(a種)、丸頭状に肥厚するもの(b種)、肥厚しないもの(c種)に分類できる。A類に分類できるのは92、93であり、肥厚部の下端に段を作りだす成形痕が残る。

77はb種である。c種は口唇部に縄文を施文するものが多く、施文域が狭いものが多い。頸部の無文帯と胴部の分帯は沈線による明確な区画をもつもの(86～89、94)と、とくに区画しないものがある(82～84、91～93)。胴部の縄文は斜行縄文が一般的であるが、91は擬似羽状縄文を施文している。

95～101は基本的に同様の形態をもつが、とくに胴部下半にケズリを施し、屈曲をもつものを分類した。101がその好例で、胴部下半の屈曲部以下は無文となっている。101の口縁部はC種、頸部と胴部は沈線による区画が行われている。

本類の口縁部形態は、先述したように3種類の異なる特徴をもつが、これらはおそらく併存する属性の差異というよりも、基本的には時間差を示し、それらは型式学的な連続を表すと思われる。彦崎K2式など、当該地域の土器群の口縁部にみられる平滑な外面と、縮小した内文の特徴を視野にいれるならば、口縁部における肥厚の退化という変化の方向性を指摘しうであろう。そうしてみた場合、101は新相の要素をしめす口縁部形態をもつ点から、胴部下半に屈曲をもつグループが、鉢B類の変遷のなかでも総じて新しい部類に入る可能性を示唆するであろう。

深鉢B類(102～176) 本層出土の縄文土器の組成の主体を占める器種のひとつである。これらは口縁部の形態や縄文の施文域、内文の有無といった観点から、さらに細かな区分ができる。ここでは便宜上、内文をもつものをa種、ないものをb種に大別し、さらに内文の構成と縄文の施文域からa種を2つに区分した。

a-1種 基本的には1本の沈線で描く内文をもつもので、要所に意匠文様を配する。102～106、108～113、131、133は口縁部が肥厚するものである。口縁部の肥厚は頸部の削り出しによって

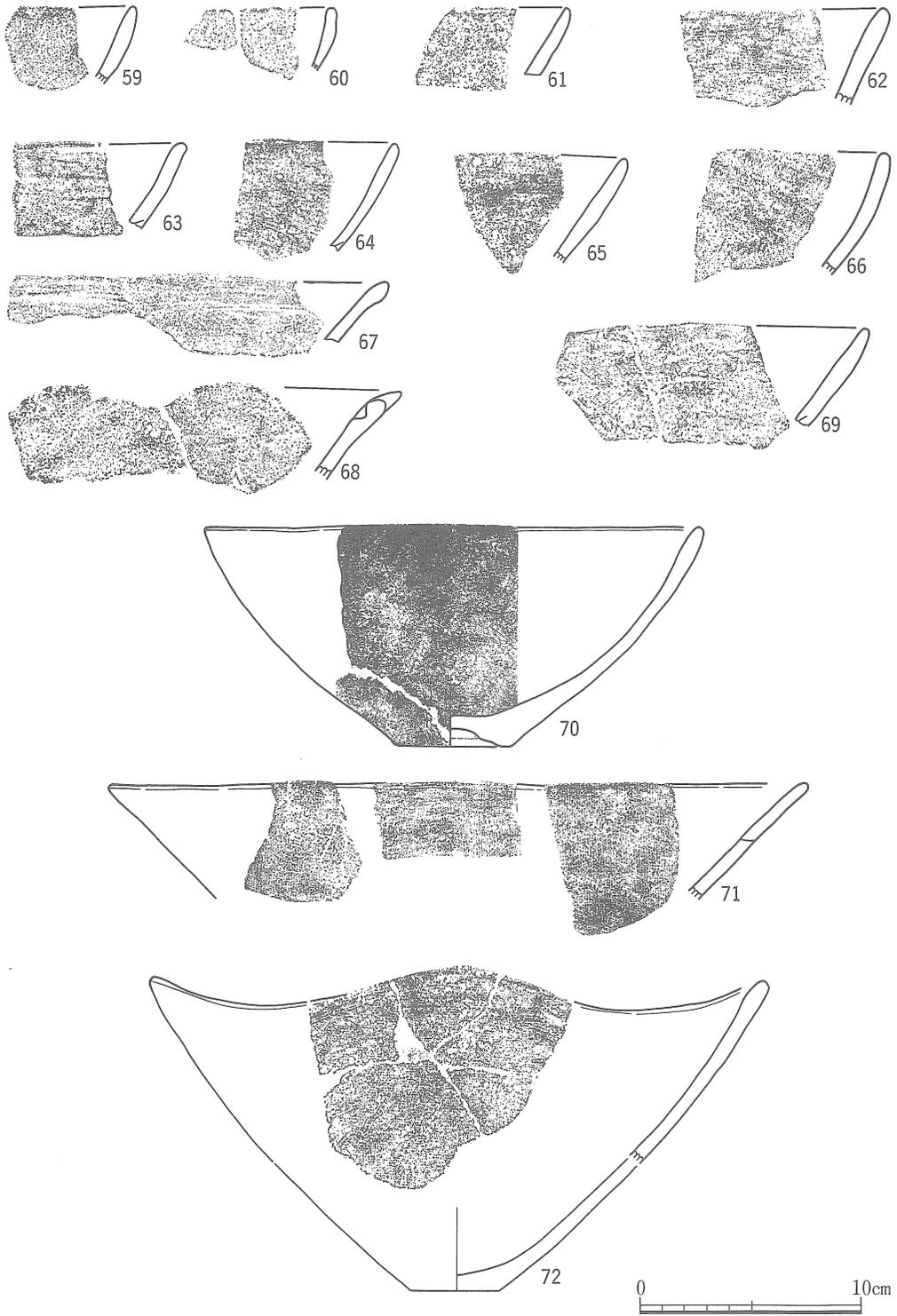


図43 25 a 層出土遺物(6) (縮尺1/3)

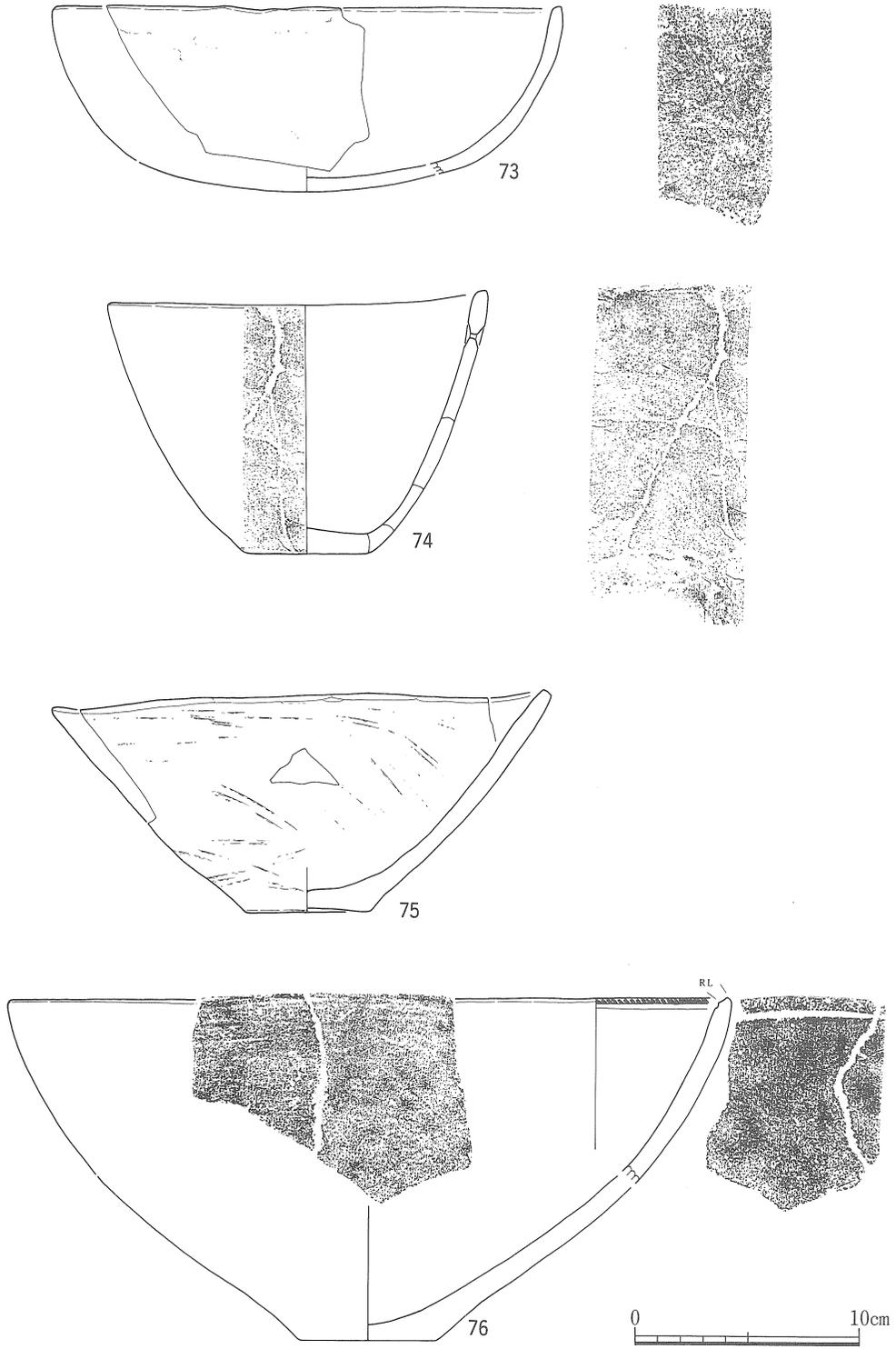


図44 25 a層出土遺物(7) (縮尺1/3)

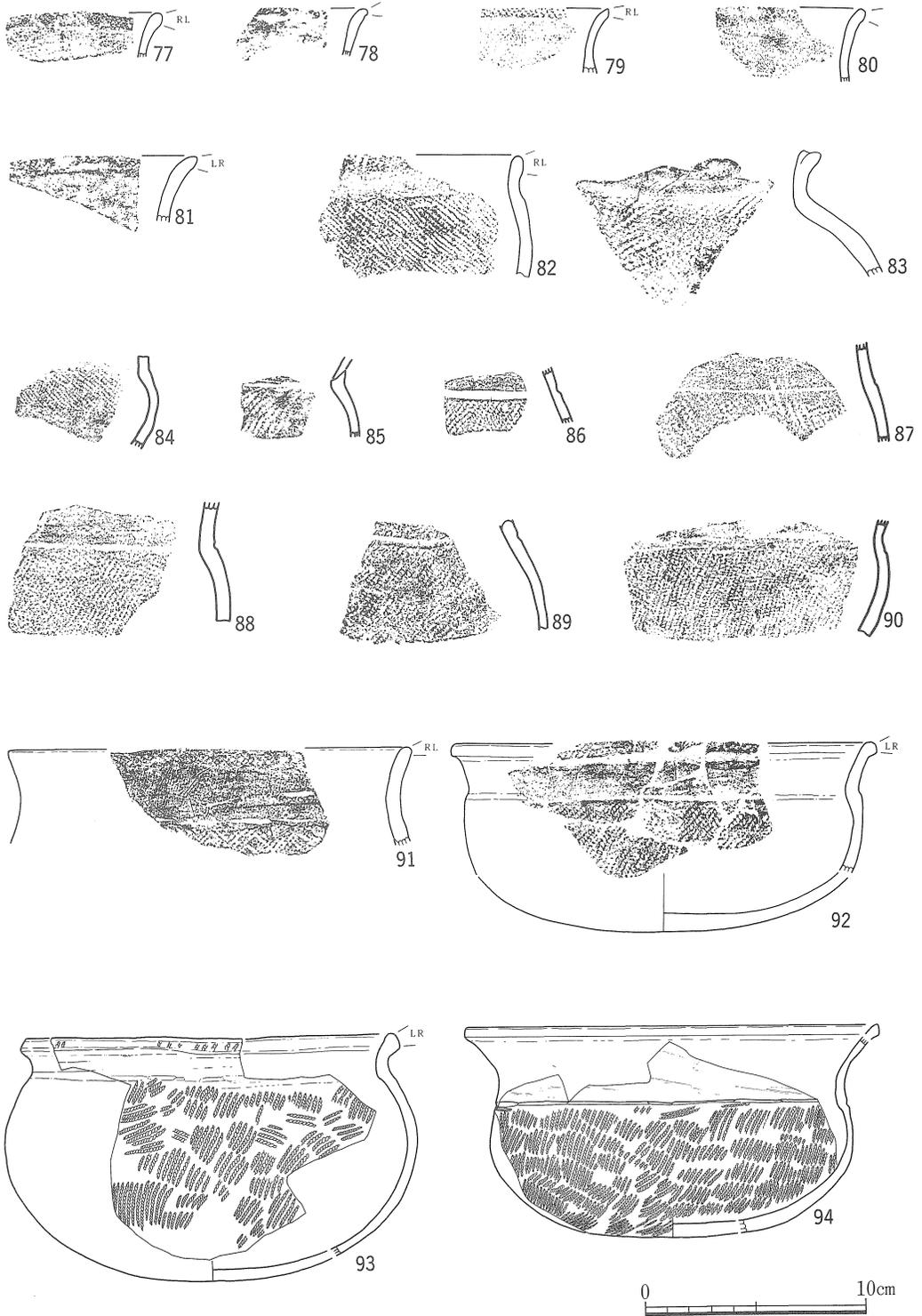


図45 25 a 層出土遺物(8) (縮尺1/3)

いるものが多い。また少数ではあるが、肥厚部下端に沈線を巡らせるものがある（112）。107、114～120、124は肥厚しないものである。このなかには114、115など、断面形が尖頭状のものがあり、口唇部上端の面取りが行われぬ。これらは内文と外面の縄文施文域が一見、一体化した様に見えるものもある。

本類の内文は基本的には小波状口縁の内側に意匠文様を描き、相互を沈線で連結するという構成で、沈線で区画された上部を施文域として縄文を施文するのが一般である。したがって本類は基本的には波状口縁と考えてよいであろう。

内文のモチーフはクランク文を描くもの（103、105、110、131）が多い。107、134は波状部に沈線がとりついたように描かれる。また133のように一条の沈線が周回するのみで、波頂部の内面にもとくに意匠文を描かないものも存在する。クランク文を描くグループのなかでも、110、131の様にクランクの屈曲の小さいものもあり、意匠の単純化が認められるとするならば、本群はそうした中でも新相の特徴を多くもつといえる。

a-2種 135～137、139～142は内文の系列が異なるもので、2、3本の沈線を周回させ、縄文帯と無文帯を交互に配置するものである。136は内文が一本描きであるが、沈線の上下にわたり幅広く縄文が施文される点で本類に含めた。

139、142は沈線がクランク状に屈曲する。これが文様の中心であるならば、本群は平縁となるであろう。外面に縄文を施文するのは136、142のみである。142は口唇端部に近い部分に施文する。一見すると外面が肥厚する断面形態に見えるが、これは内文の施文による変形をうけた

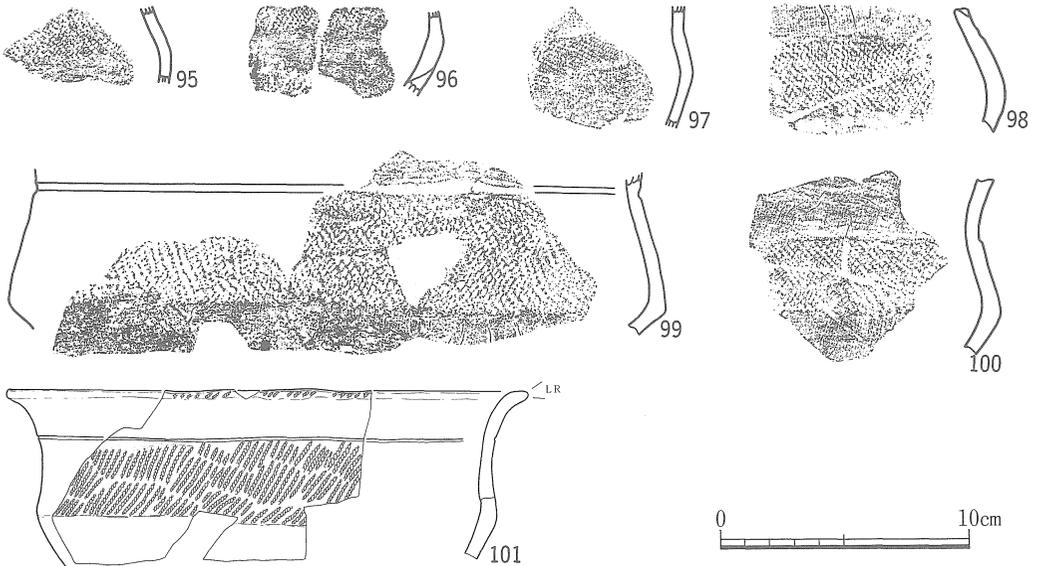


図46 25a層出土遺物(9) (縮尺1/3)

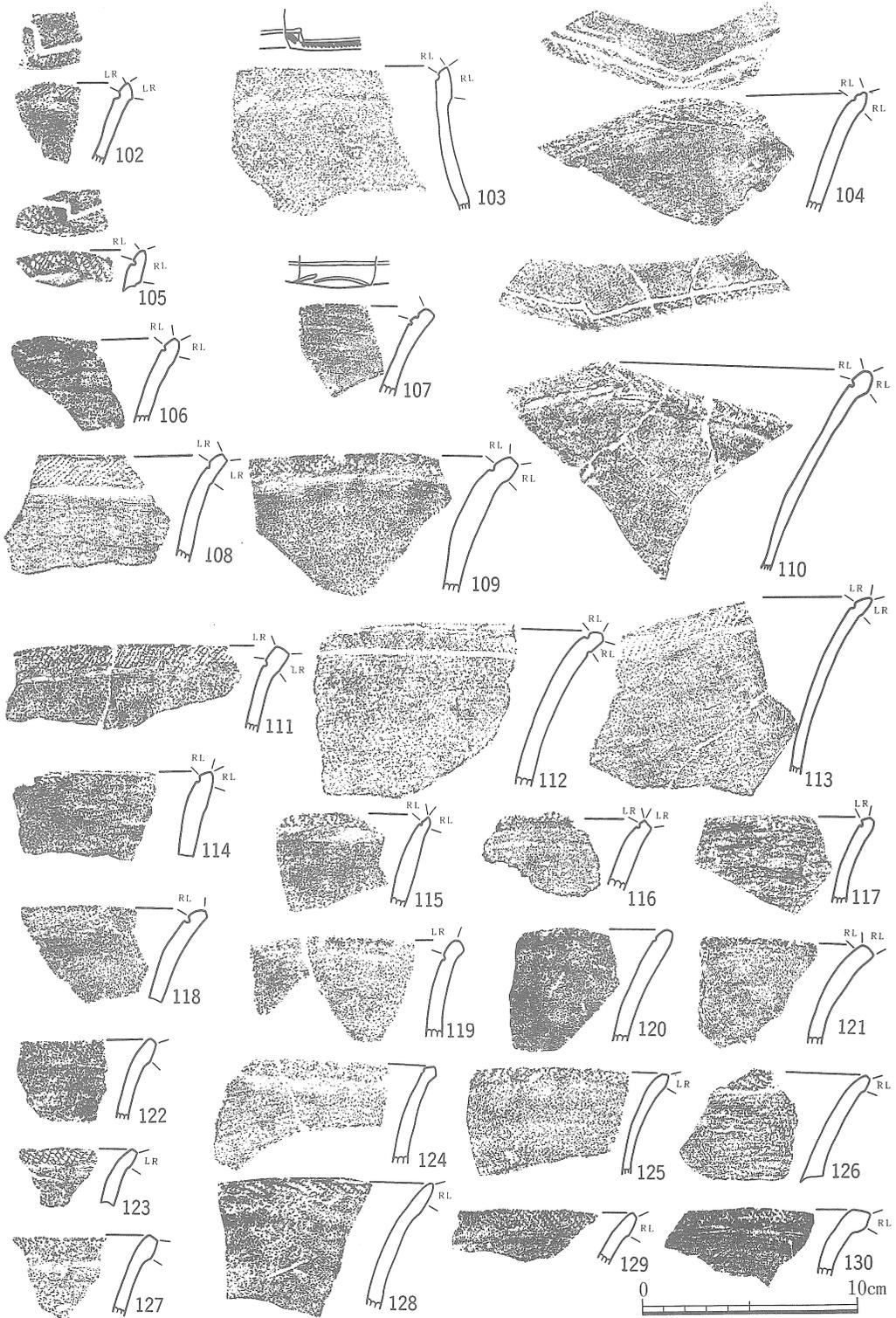


図47 25a層出土遺物(10)

為であろう。いずれにせよ肥厚は明確ではない。

内文の施文域は139、140、142のように肥厚するものと、135、136、141のように肥厚のないものがある。また142の胴部の縄文は擬似羽状縄文を施文し、頸部の無文帯とは沈線で分帯されている。本類は全体のプロポーシオンと縄文の施文域の構成から、大きくは深鉢B類としてまとめたが、平縁であることや、内文の文様構成などから、あきらかに独立した文様系列と認めることができる。

b種 121～130、155～158、161、162は内文をもたないものである。121は内文をもたないが、口縁部の内面に縄文を施文するもので、本例のみで例外的なものである。基本的には外面の肥厚が認められるが、幅狭で肥厚の度合いが小さいものが多い。断面形態は内削ぎ状を呈するものが主体となり、それらの中でも口縁部の先端が尖り気味のものが多い。

また外面の肥厚のないものには159、160などがある。これらは口縁端部に狭い幅で縄文が施文される。159は平縁であるほか、頸部の幅が狭く胴部のふくらみも大きい様で形態が他と異なる。頸部には二個の補修孔が穿たれている。

163～176は深鉢B類の頸部から胴部である。頸部と胴部の分帯は沈線によるもの(163～171)と、とくに区画のないもの(173、175、176)がある。頸部の屈曲部位の上下に接合痕の残るものが比較的多く、また、173は頸部付近の曲面の変換点が内外で異なる特徴がある。176は胴部の縄文の施文域が狭く下半部が無文となるが、これは鉢B類の一部にも認められることはすでに指摘した。

深鉢B類の内部における細別はa-1種とa-2種が内文の系列の差異にもとづく以外、口縁部の形態や内文の文様の細部といった属性の多くは、本群のもつ時間的な変化に基づく、型式変化の方向性をしめすものと考えられる。鉢B類と深鉢B類という器種のあいだでは、基本的には口縁部の縄文の施文域にあたる部位の肥厚の退化という点で、ある程度の連動性をもつものといえる。また本群とは、外反する頸部と膨らみをもつ胴部という形態上の特徴も類似していることが指摘できる。160の復元個体や貯蔵穴内から出土した完形個体から、これらには小形の底部が付くものと思われる。また多くの資料には、頸部上半における煤や炭化物の付着、胴部下半の赤化面の形成という煮沸機能を想定させる、各部位に対応した使用痕を認めることが出来た点も土器の機能を考察するうえで重要であろう。

異系統の土器(177、178、179) 第IV群土器とともに25a層より出土したもので、あきらかに型式の異なる搬入品または模倣品をまとめた。

177は双口の異形土器である。筒形の胴部の左右に立ち上がるふたつの口縁部をもつものである。器体は粘土板をほぼ中央で接合して管状に成形したもので、現存部には中央に直線的な接合痕が観察できる(巻末写真七-177a)。

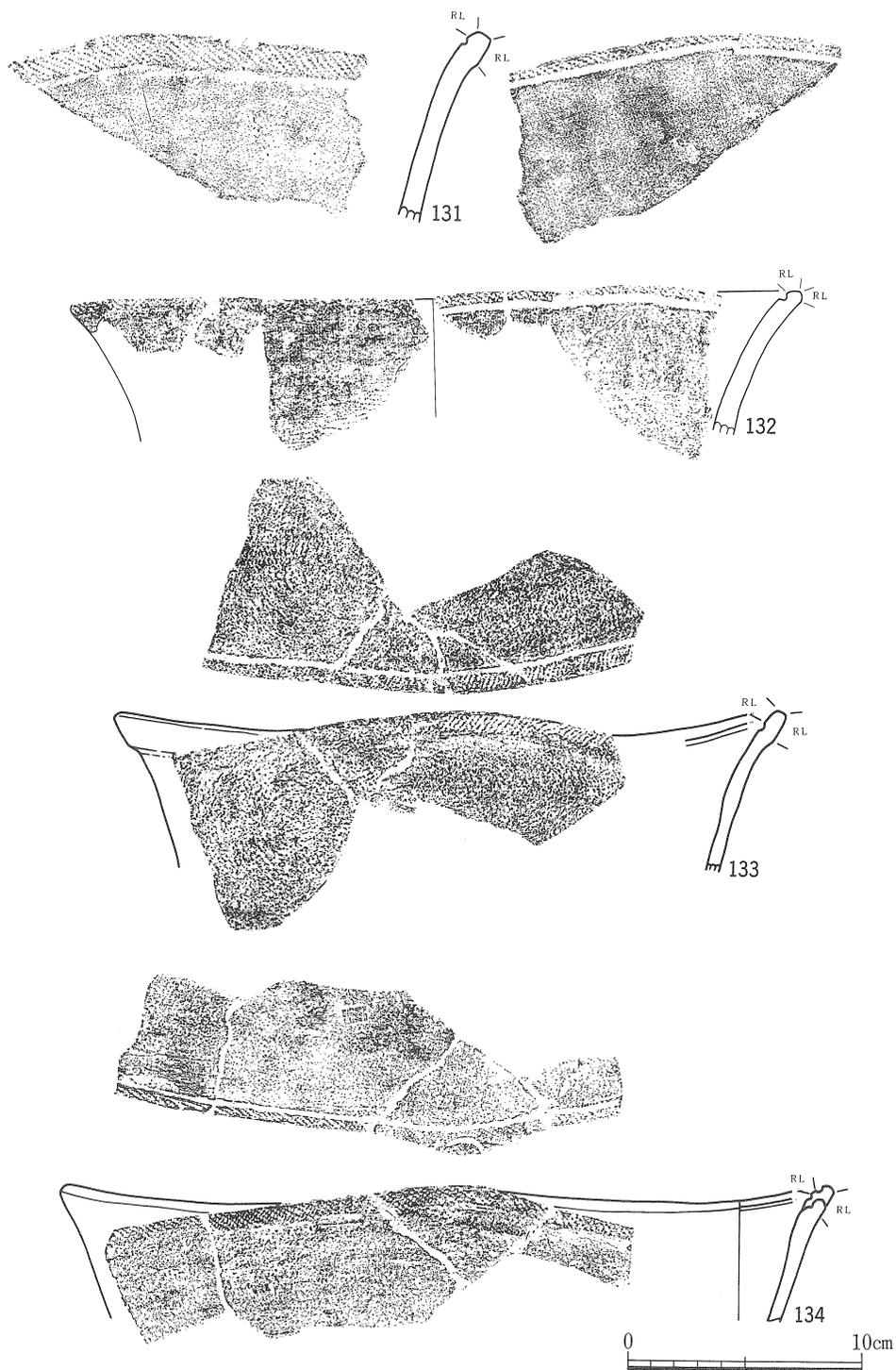


図48 25 a 層出土遺物(11)

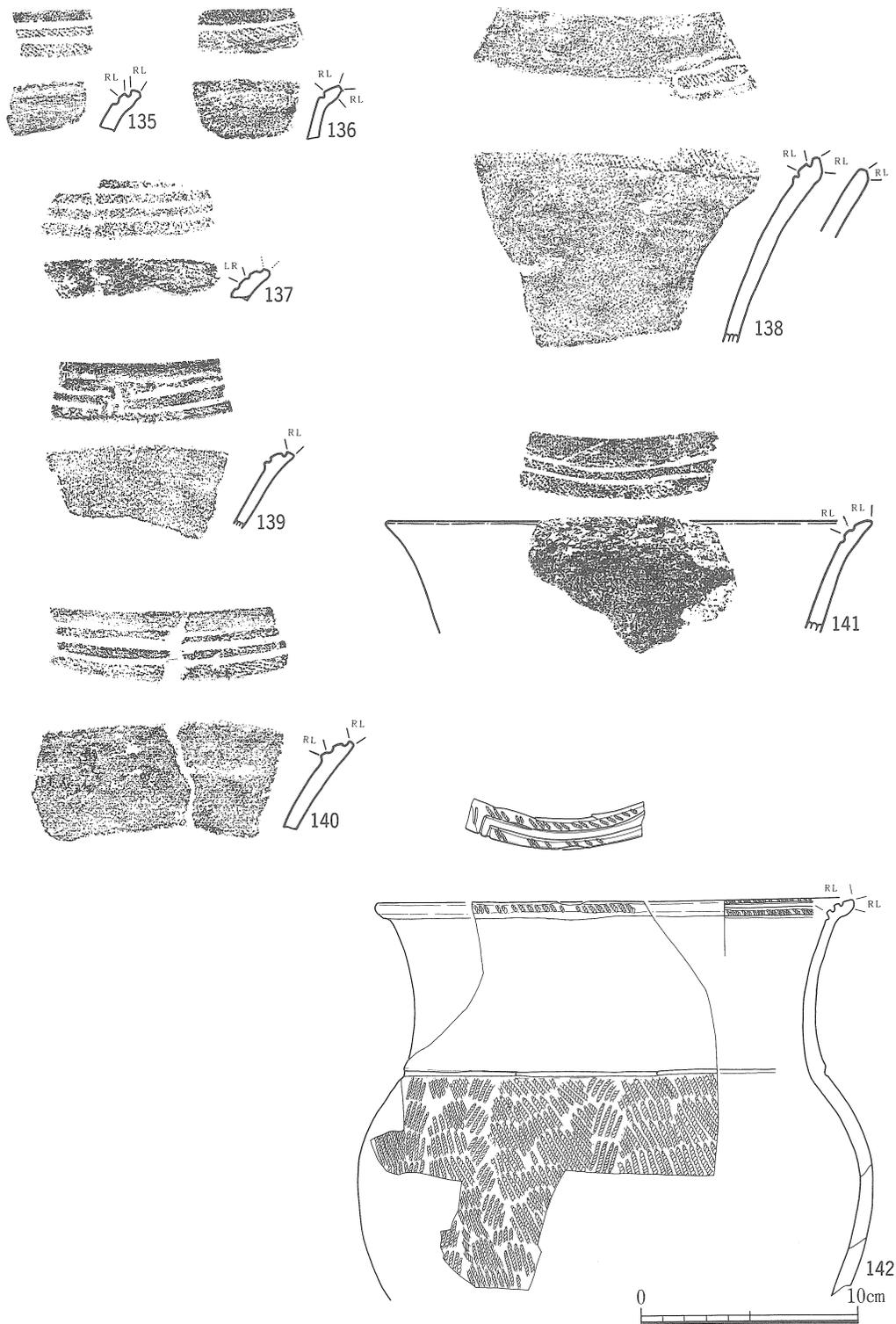


図49 25 a層出土遺物(12) (縮尺1/3)

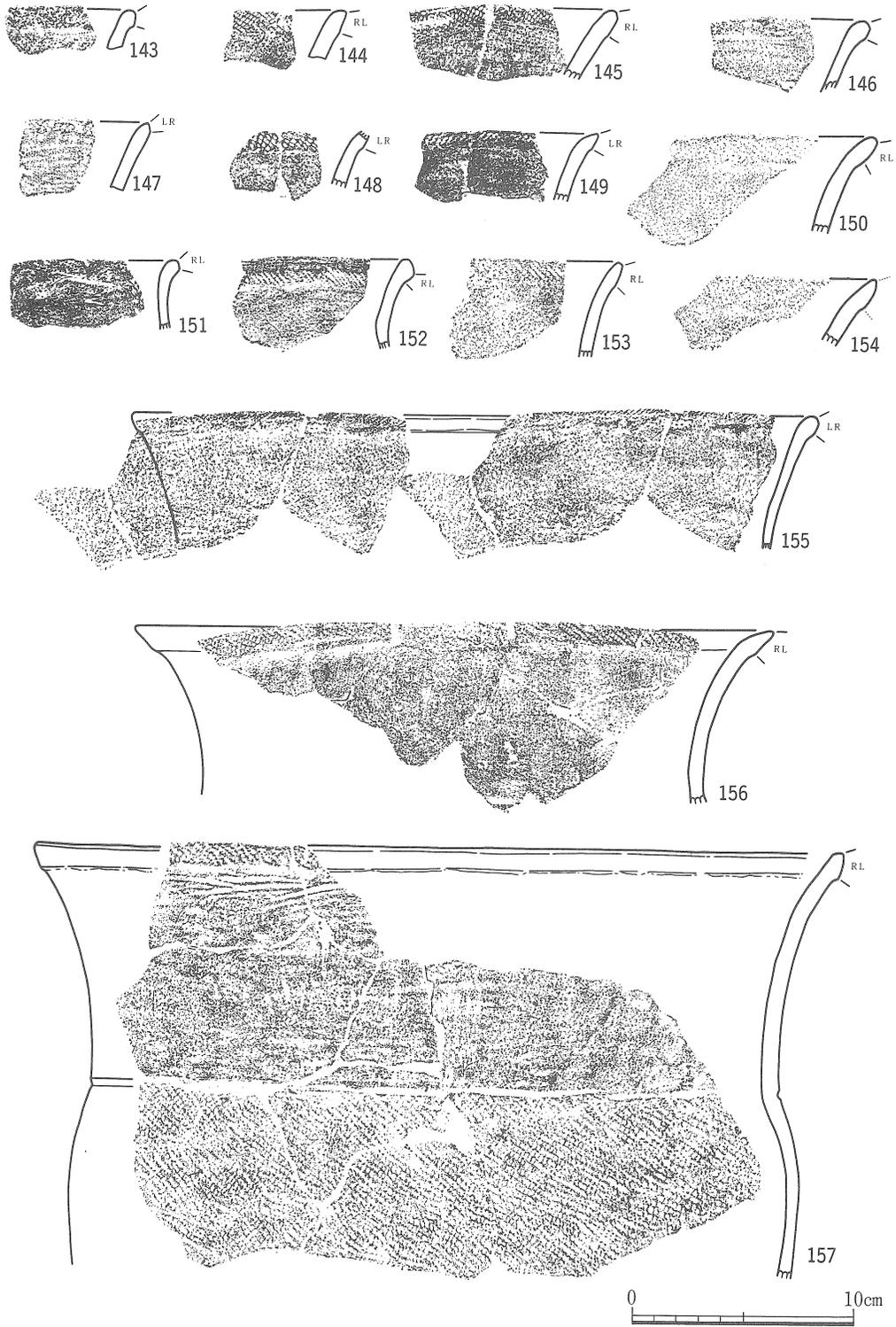


図50 25 a層出土遺物(13) (縮尺1/3)

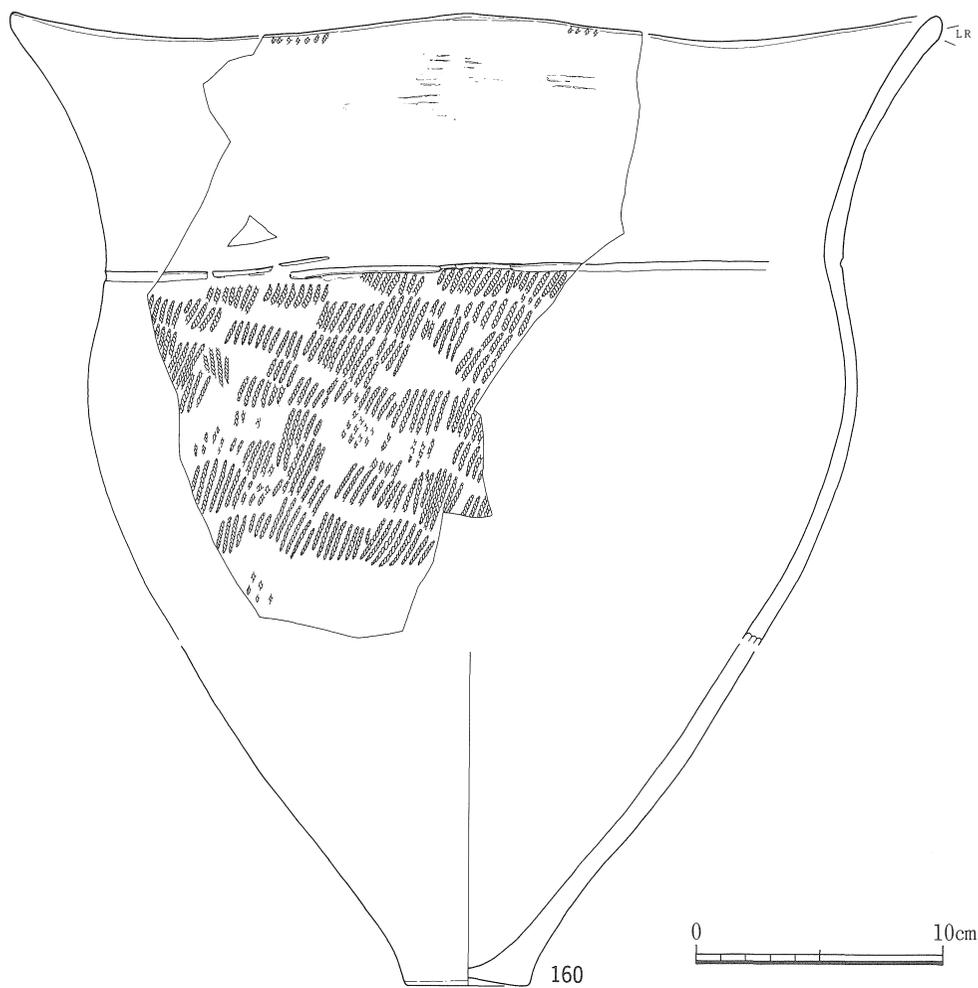
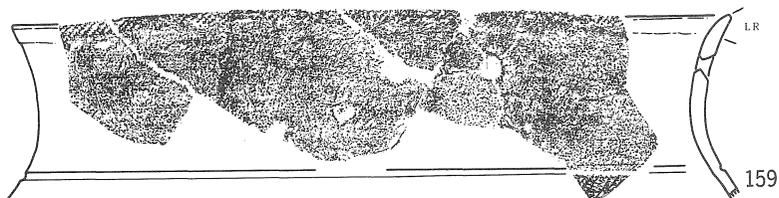


図51 25 a層出土遺物(14) (縮尺1/3)

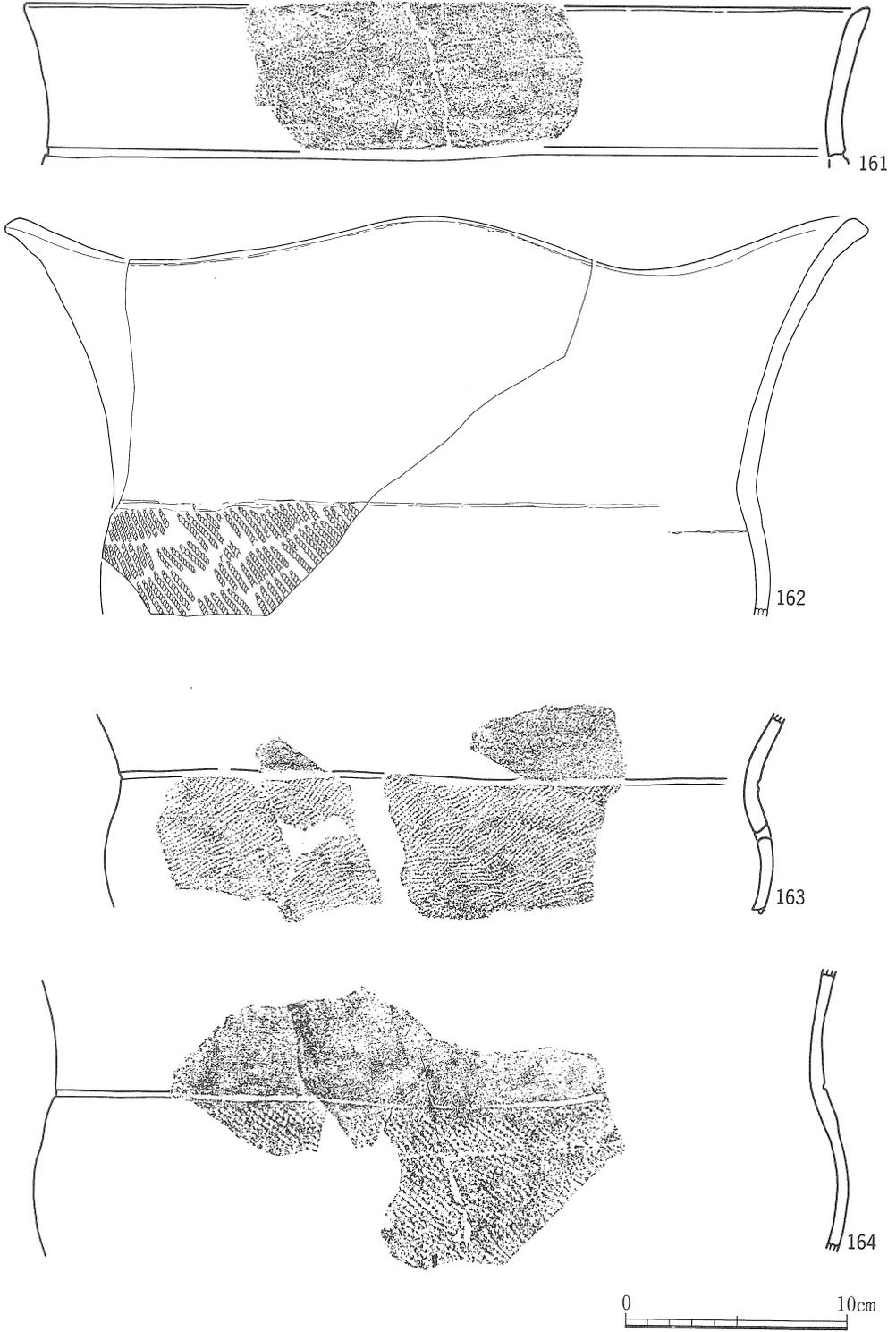


図52 25 a層出土遺物(15) (縮尺1/3)

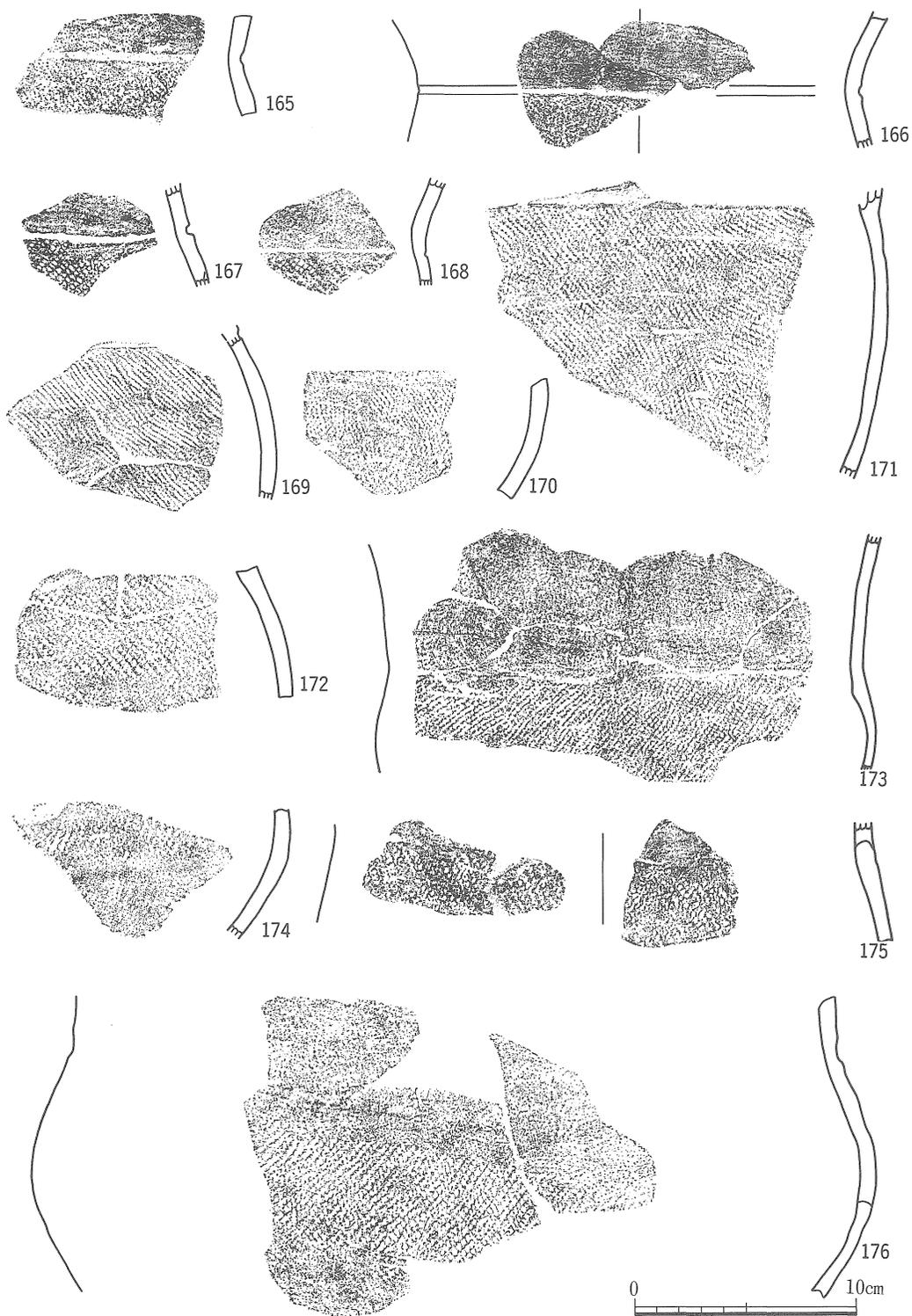


图53 25 a層出土遺物(16) (縮尺1/3)

器表面には3本単位の櫛歯状工具により9本前後の集合沈線により流水文風のモチーフが描かれており、胴部の下半と口縁部には3～6本単位で波状または鋸歯状の文様が描かれる。同様の文様は加曾利B1式の注口土器に類例が多い(写真13-2)。また沈線の間には赤色塗彩痕が残る部分がある。また、この顔料は、蛍光X線分析の結果、酸化第二鉄であることがわかっている。本例と同様の形態をもつものは、茨城県陸平貝塚や神奈川県金子台遺跡例(写真13-1)がある。櫛歯状工具による文様を描くものとして、もっとも近いものは後者であろう。しかし金子台遺跡例は集合沈線の両端をなぞる縁取り沈線が施され、また口縁部下に描かれる鎖状に絡まる文様も流麗で完成されたものである。これが本遺跡の資料とのあいだの時間差を示すのか地域差を示すのか判然としないが、京都府桑飼下遺跡などでは櫛歯状沈線を多用する地域があるので、櫛歯状の沈線文の出自自体も問題となるところであろう。金子台遺跡例は二つの口縁部の高さが異なる特徴があるが、本遺跡例は欠損しているので、図上では等しく復元してある。

178は三単位の波状口縁の深鉢で、胴部は朝顔形に直線的に開く形態である。波頂部の上には2個の大きな刺突を巻き込むように粘土紐が貼付され、上面観が「S」字状に見える(巻末写真七-下段)。胴部文様は上半のみに限定して描かれ、波頂部と波底部の下に描かれる縦に連続した渦巻き文を中心にして、それらを3本単位の沈線で相互に連結する。文様帯の下半部の分帯はほぼ水平であるが、上端部は波状縁の高低に沿って描かれる。

この個体はまた安定のよい大形の底部をもつ点でも他と異なる。本遺跡から出土した底部は底径約5cm前後の小形のものが大半で、浅鉢や鉢の類を除いては、いずれも上げ底となる。こ



写真13 加曾利B1式の双口土器と注口土器

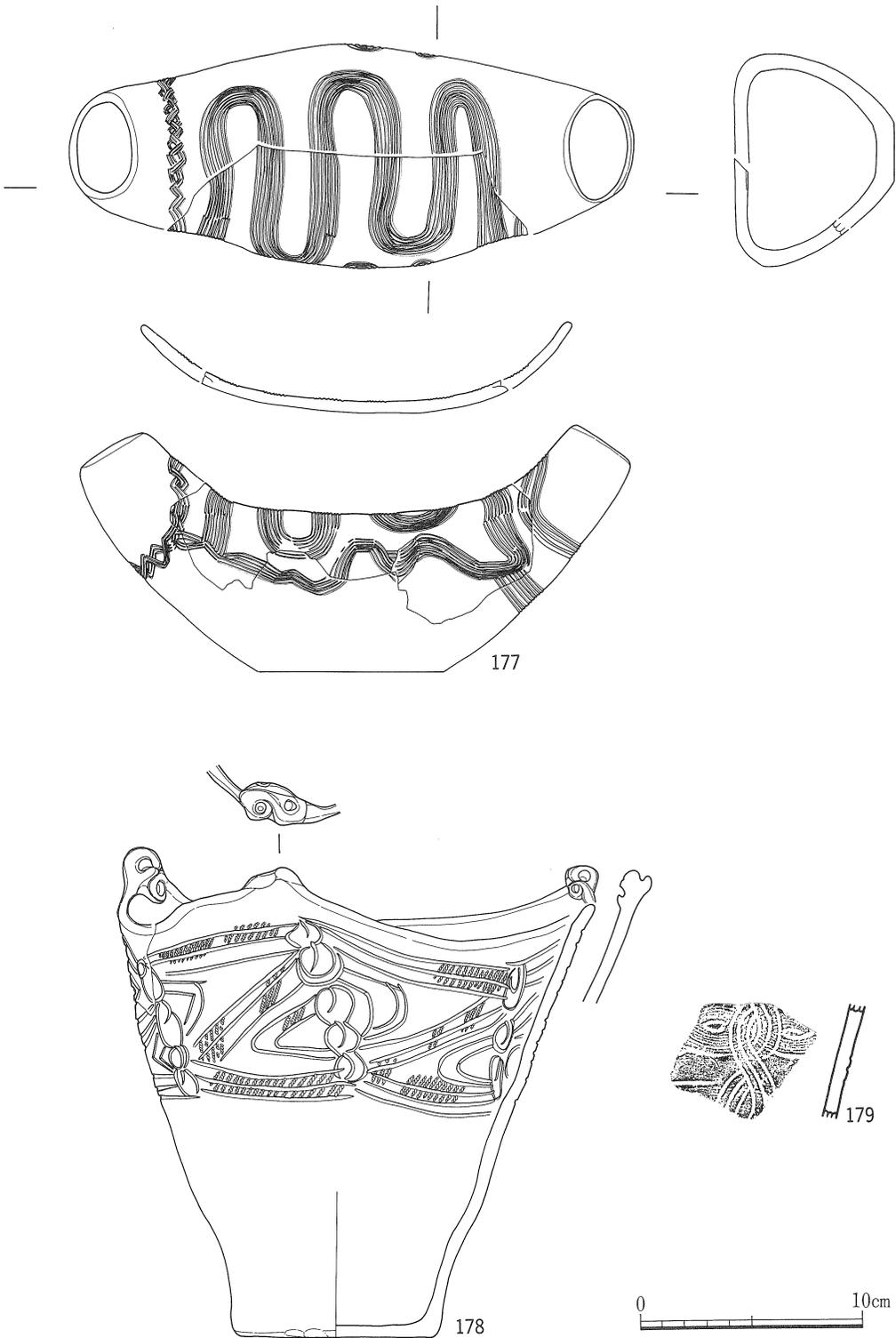
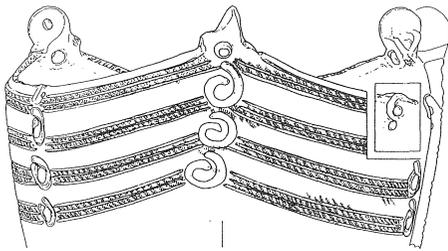
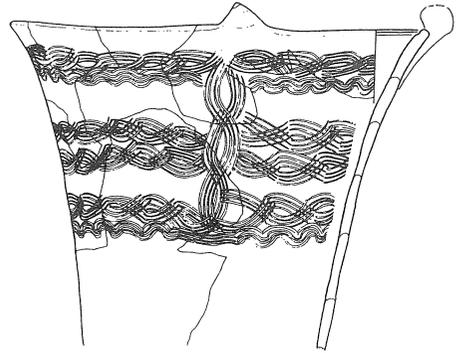


図54 25 a層出土遺物(17) (縮尺1/3)



1 福井：馬替



2 福井：鳴鹿手島

図の出典：1. 金沢市教育委員会「金沢市馬替遺跡」『金沢市文化財紀要』107 1992
2. 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『鳴鹿手島遺跡』1988

図55 北陸地方における加曽利B 1式平行土器群

うした土器製作の基本的な伝統のあり方からみても、本例は中部瀬戸内以外の地域で製作された可能性が高いであろう。

3単位の突起の形態は加曽利B 1式に近似するが、胴部文様の構成は加曽利B 1式の標識資料(山内1964)にはないし、その主体的な分布圏である関東地方においても類例はない。今のところは、加曽利B 1式の影響を強く受け、そのなかで胴部文様を独自に変化させてゆく特徴が見いだせる東海あるいは北陸地方にその型式学的な故地を推定しておきたい(図55)。

179は178と同様の形態の深鉢の胴部である。櫛歯状工具による集合沈線により、縦横の二方向に鎖状の文様を描く。条線の周囲を縁取る沈線が描かれるもので、177のそれよりも後出的なものであろうか。この文様を描く深鉢もその出自は瀬戸内以東に限定されるであろうが、今のところ故地は特定できない。

深鉢C類(180~244) 文様をもたない無文の深鉢をまとめた。これらの器面には貝殻条痕やケズリ、ナデなどの調整痕が残されている。当初はこれらの調整痕を分類の指標としたが、有意な傾向を読み取ることができなかった。そこでここでは27b層の資料との対比をも意図して、口縁部の形態的特徴から分類をこころみた。口縁部は99点の出土があり、磨滅した小片を除いた77点の資料を対象に分類をおこなった。本類の器形は203、236にみるように、口縁部が緩く外反して、胴部に膨らみをもち、小形の底部が付く。203は小形、236は大形というように、本類の中でもサイズにいくつかのグループがあるが、全体のプロポーションは良く一致している。

a種(180~183、231) 肥厚した口縁部で、肥厚部下端に段をもつものをまとめた。その中でも180~183は口唇部上面を平滑に成形するもの(a種-ア)、184~186の様に先端部が丸頭状ま

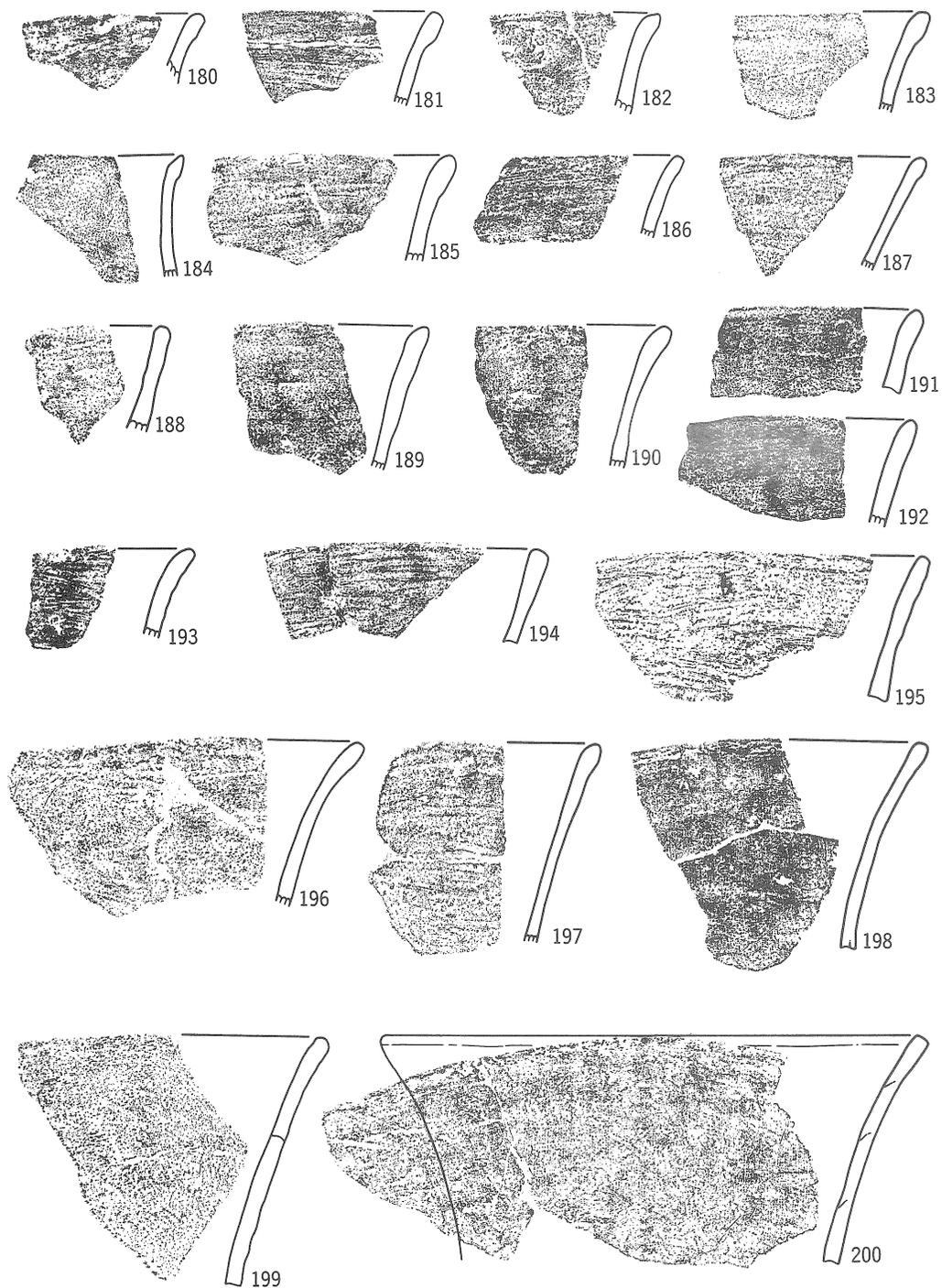


図56 25 a層出土遺物(18) (縮尺1/3)

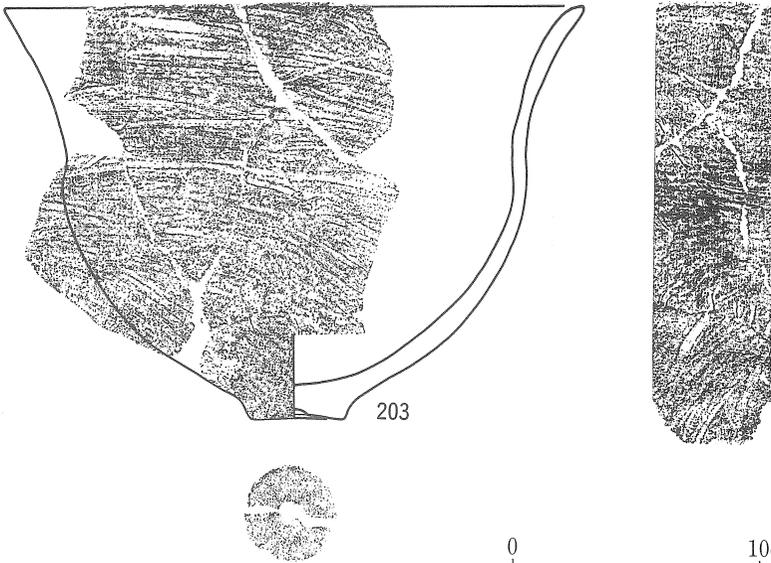
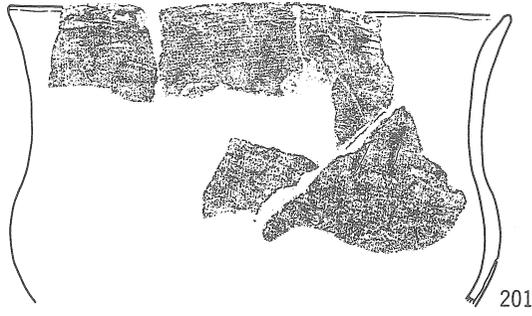


図57 25 a 層出土遺物(19) (縮尺1/3)

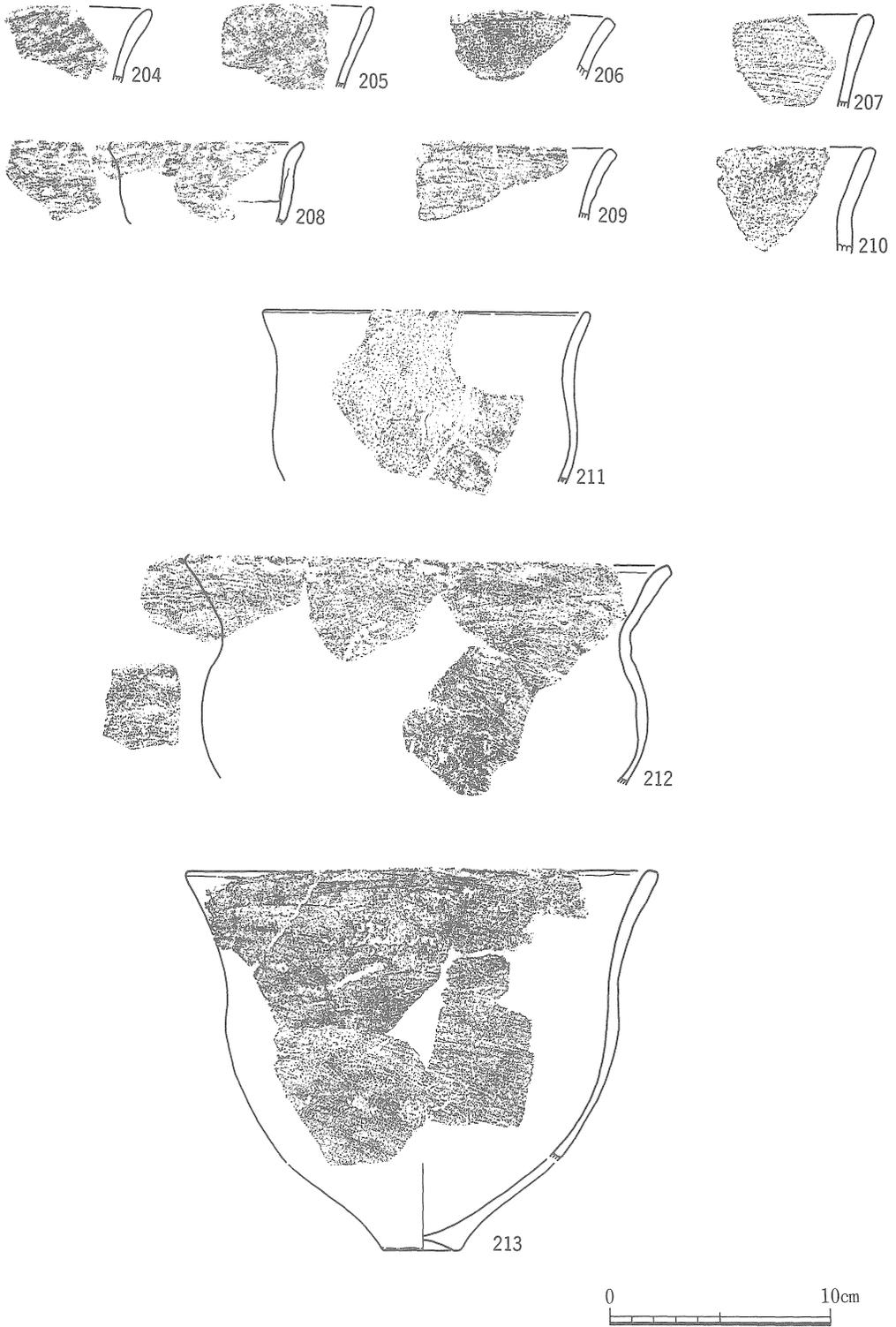


図58 25 a層出土遺物(20) (縮尺1/3)

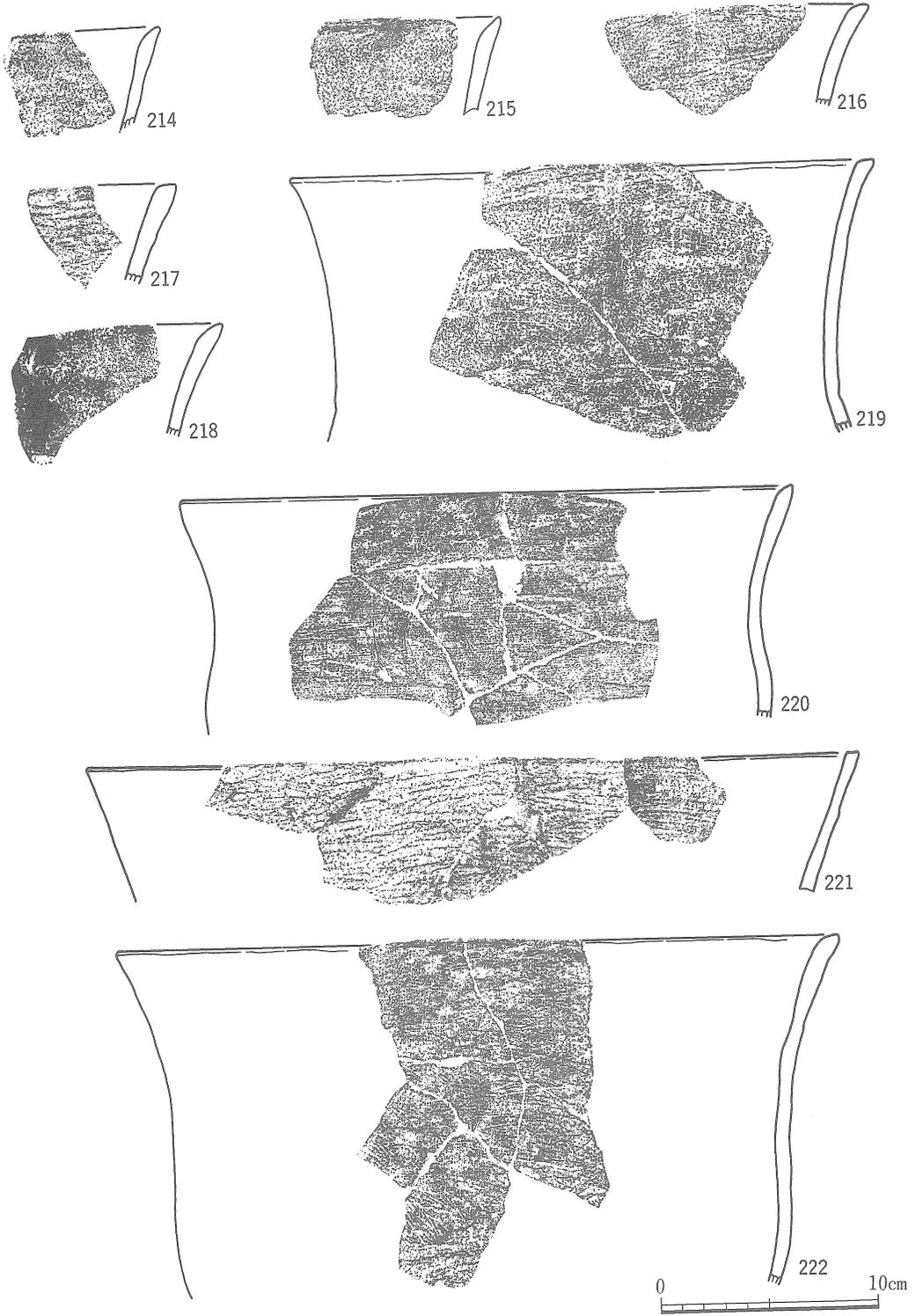


図59 25 a層出土遺物(21) (縮尺1/3)

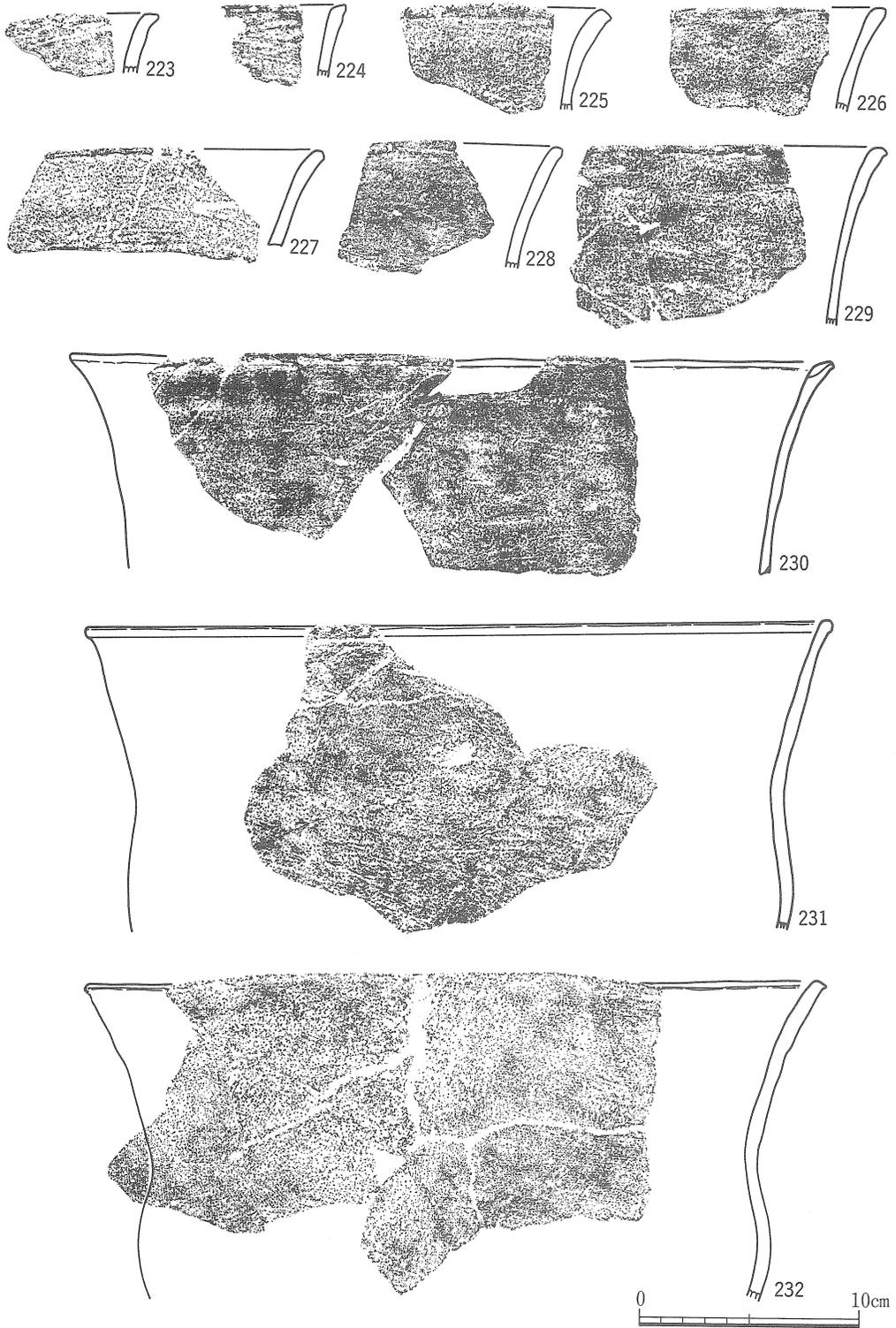


図60 25 a 層出土遺物(2) (縮尺1/3)

たは尖頭状を呈するもの（a種-イ）に細分できる。これらは口縁部端面の成形法と係わる差異である。

b種（189～191、196～198、230） 口縁部が緩く肥厚するもので、肥厚部に段は見られない。口唇部は丸頭状または尖頭状を呈するものである。口唇部内面の成形は丁寧なナデによるものが多く、口縁部以下は薄手に削られている点から、肥厚部は器面の削り残しによるものと思われる。

c種（187、192～195、199～230、232～234、236） 口縁部がとくに肥厚しないものをまとめた。その中でも口縁部断面が角頭状を呈するもの（c種-ア）と尖頭状を呈するもの（c種-イ）に細分することができる。両者の差異は口縁部付近の成形手法やその度合いの差を示すものと思われる。またc種-イは口縁部上面および内面を内削ぎ状に成形したもので口縁部が肥厚気味のものが多く、これは器体のケズリにより胴部が薄手に仕上げられた結果であり、口縁部を意図的に肥厚させたa種とは根本的に異なるであろう。

また233、234、236は口縁部が緩い波状を呈している。236例による限り、波状は4単位であると思われ、深鉢B類のそれに似る。

201～203、212、213は小形のものであるが、形態や調整痕、煤の付着や赤化の部位など、大形の個体と差異はない。また208、211は特に小さいサイズのものである。208は胴部下半の内面に内傾の接合痕が残る。

229、230、232は口縁部端面の成形によりはみ出した粘土が口縁部外面に付着したものである。薄手の器体にたいして幾分厚手となる口縁部には、いくつかの形態の差異が認められるが、こうした差異の意味については、時間的に前後する他の資料との比較が必要となる。

本器種の成形痕は条痕調整やケズリなどいくつかのバラエティが認められるが、これらの作業方向は横位を主体にしている。とくに底部または胴部下半まで遺存する201～203、213、236などは胴部の最大径部以下まで横位主体の調整痕が認められ、底部付近も螺旋状に斜位の調整痕が観察される。244のような縦位主体の調整痕は少なく、横位方向主体の器面調整作業が津島岡大の集団にもっとも一般的におこなわれた方法であったらしい。そうした作業は、この器種の胴部が球胴形を呈する事実とよく一致している。また203、236のように底部の遺存するものについて見るならば、底径が5cm前後という極めて小さい点が特徴となる。そしていまひとつの特徴は、そうした小形の底部は203と236を比較してもわかる様に、口縁径や器高といった土器の大きさにあまり関係なく、むしろ一定しているということであろう。大形の土器に大きな底部といった対応関係が必ずしも見られないという事実は、土器製作におけるひとつの伝統とみなせるであろうし、底部の小形化は球胴形の胴部をより一層張り出させる原因となったであろう。深鉢C類のなかには、接合部から破損したものや、内面に粘土紐の接合痕跡が確認できる

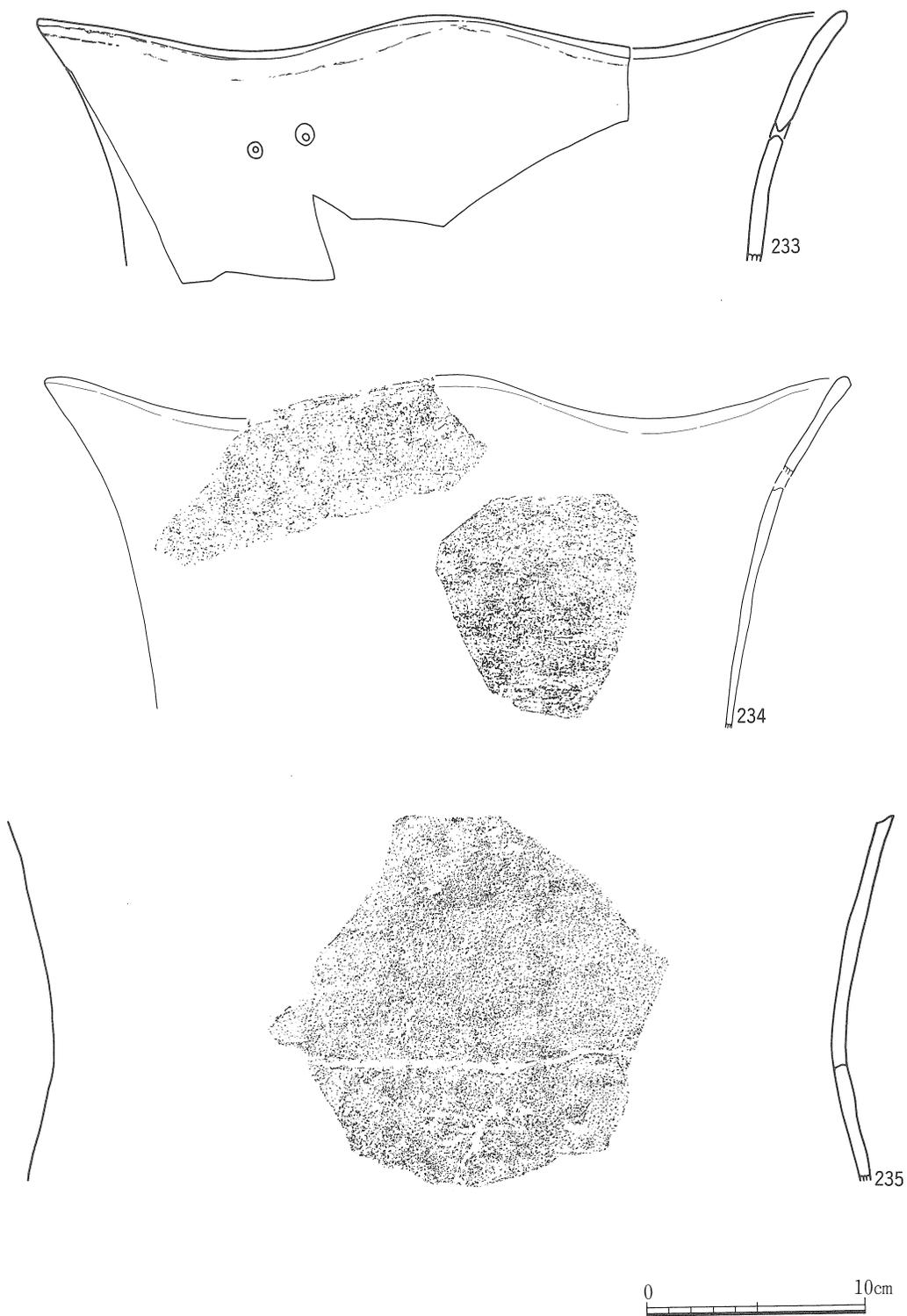


図61 25 a 層出土遺物(23) (縮尺1/3)

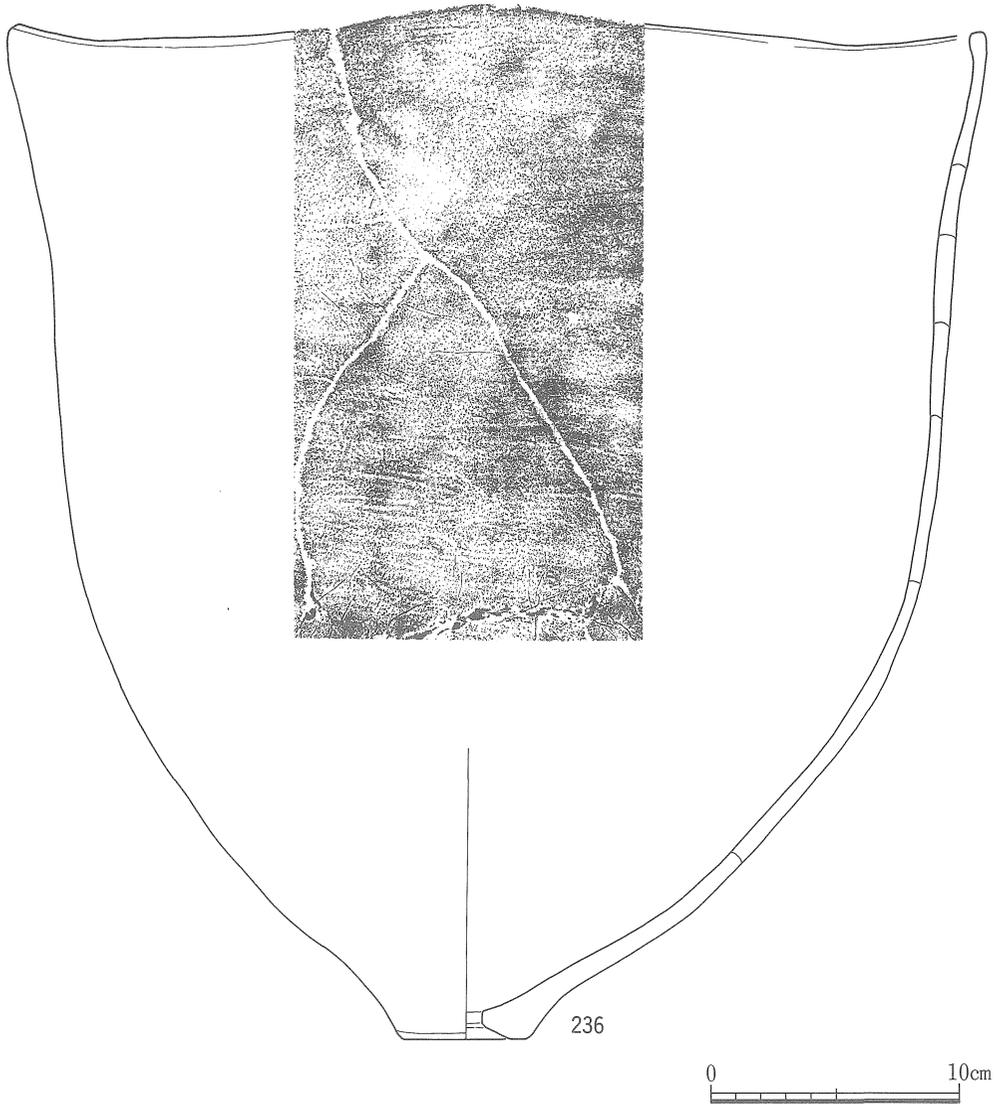


図62 25 a層出土遺物(24) (縮尺1/3)

ものがある。200は内面に接合痕が3箇所観察され、それらは3～4cmの幅をもち、内傾する。割れ口の明瞭なものは粘土紐に積み上げのクセを観察できるが、236の球胴部はほぼ水平となるものが主体である。242、243、244は胴部下半であるが、ここでも底部を水平に置くと、積み上げはほぼ水平になるようで、個体の内部においてもそれらは選択的であり、一貫したあり方をしないとみるべきであろう。また器面成形による変形も関係しており、粘土紐の積み上げは残された擬口縁の形状が示すほど単純ではあるまい。

底部 (245～274) 25a層からは65点の底部が出土している。これらは深鉢や浅鉢といった器種

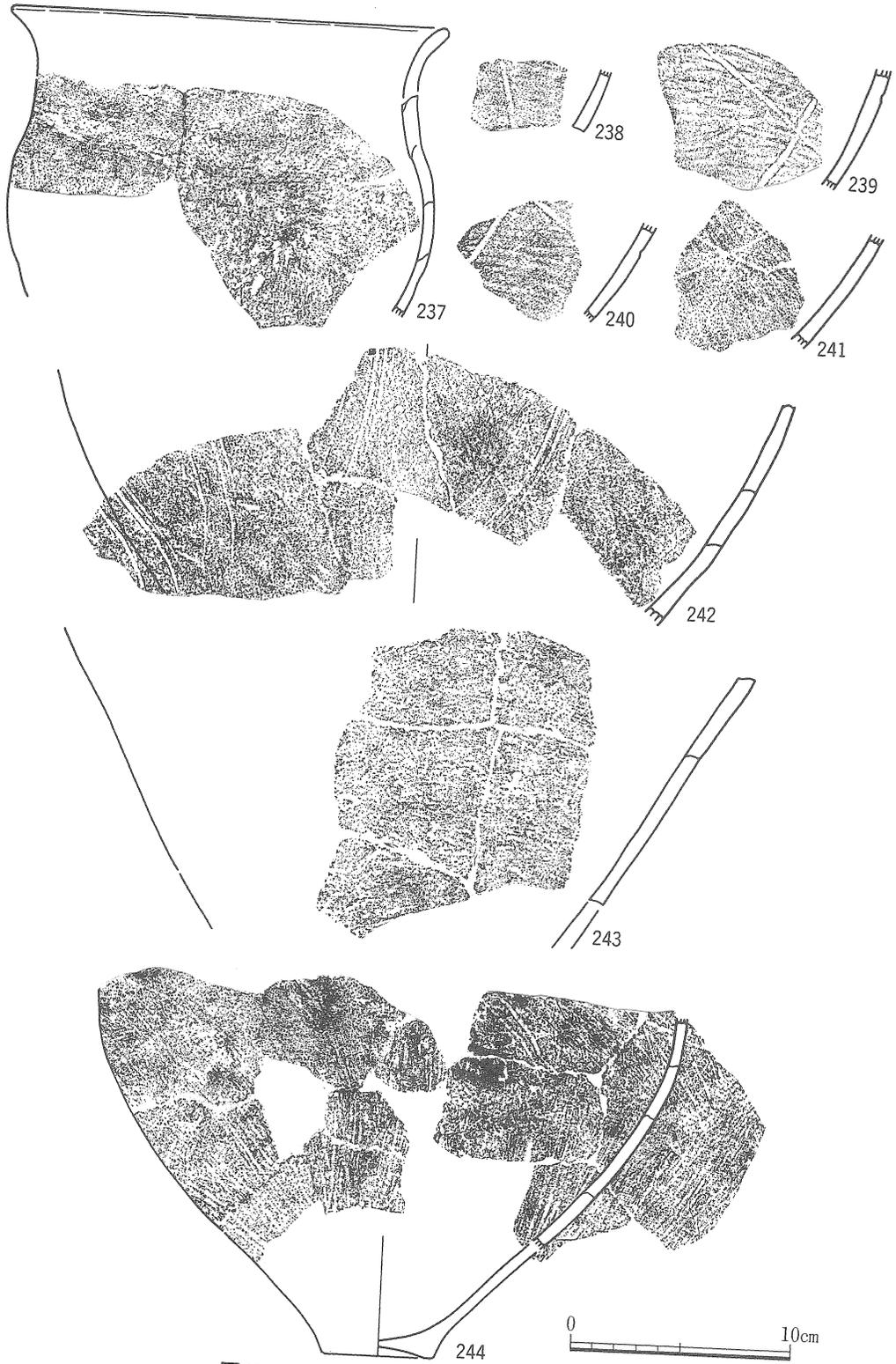


図63 25 a層出土遺物(25) (縮尺1/3)

に対応した形態の違いと底部自体のつくり方を分類の基準とした。

25a層から出土した底部の大半は、いわゆる上げ底の形態をとる。この点に関しては、小形の土器に対応するとおもわれるいくつかを除いて、製作技術上の共通した特性として指摘できる。しかしそうした形態の底部の細部を観察すると、さらにいくつかの差異から細分することが可能である。

245～258は上げ底の底面に同心円状の丁寧なナデが施される一群である。246は中心に刺突様の窪みがあるが、これが工具による成形後の刺突であるのか、製作の過程での痕跡であるかは不明である。246、247、255は底部の円板部分の接合痕がわかる資料で、これらを見る限り、基本的に上げ底は円板自体に窪みをもつといえる。ただし246のように底面端部に粘土の剥落痕がみられ、円板に二次的に粘土が付着するものがあるので、上げ底の成因自体には複雑な事情がありそうである。

255、258は器体の下半部が遺存するものである。小形の底部に大きく膨らむ胴部は深鉢B類、C類といった土器の特徴と一致する。255には斜位の、258には横位の成形痕が残るが、255がケズリやナデの痕跡であるのに対して、258は指頭による横位のナデとその後にケズリを施した痕跡が明瞭に観察できる。底部円板付近では指頭によるナデが螺旋状に施され、粘土の移動が底部を中心にして認められる。他の個体の器面にはケズリ痕のみがみられるので、258はその工程が途中で中断したものかもしれない。

259～273は上げ底の底部の中心にへソ状の粗面を残すものである。粗面はほぼ円形になるものが一般的で、周囲の平滑なナデ面との間には260、261、266、271の様に微妙な段差を作るものがある。265は底面の周囲に粘土が付着した痕跡が明瞭に認められるもので、これらは器体が大きく傾いており、バランスを修正するために底面に粘土を補強したものらしい。同様に264、266、271など器体の一部が遺存する個体は、器体が大きく傾くものが目立つのも、この時期のひとつの特徴となろう。またこれらの底部は、底径という面からみても、その多くが5cm前後という規格性の高さを示している。しかしすでに述べた様に、底径と器体のサイズにはむしろ対応関係が少ないという事実は、底部の形態やその製作法が、器種による使い分けといった土器自体の機能とはあまり関係を持たないということを暗示しているように思える。

267、274は小形の底部である。267は底面まで良く研磨されており、小形の精製土器のものらしい。274はわずかに底面が上げ底になる。器体は良く研磨されており外反角度が大きいので精製の浅鉢のものと想定される。深鉢B類、C類に相当する底部に対して、浅鉢、鉢類の底部は予想以上に少ない、これは大半が丸底であったか、遺跡における器種組成率の反映したものか、定かでない。

(阿部)

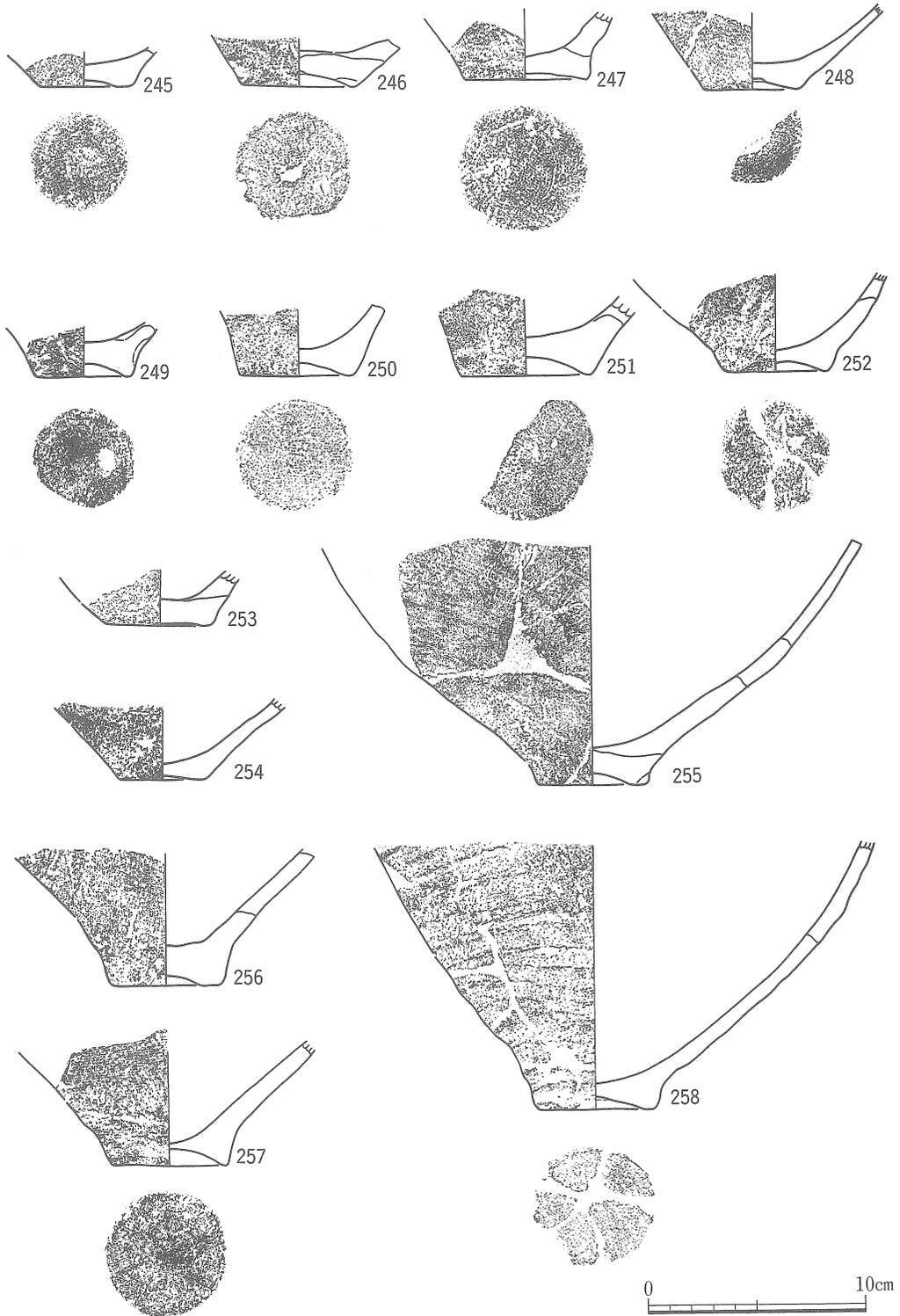


図64 25 a層出土遺物(26) (縮尺1/3)

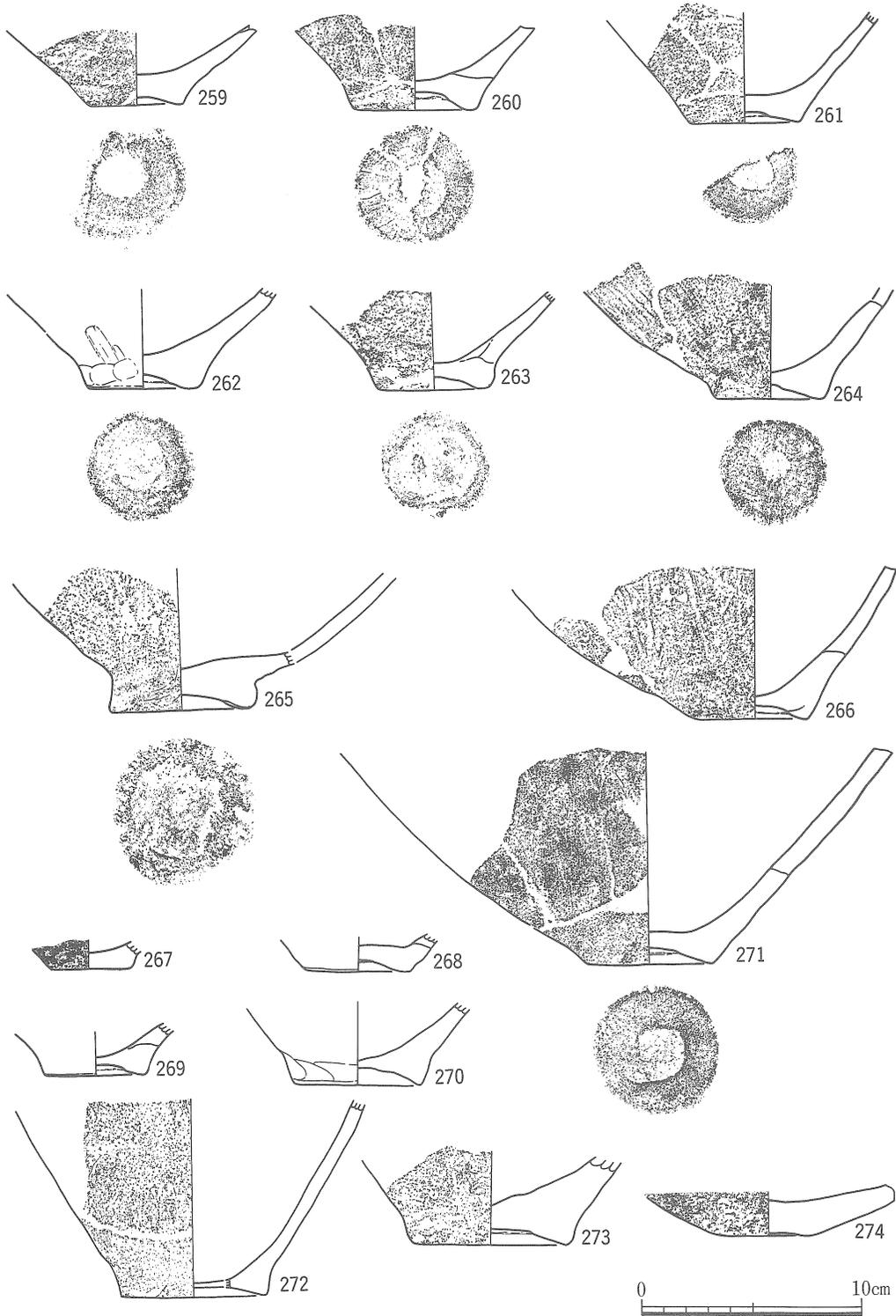


図65 25 a層出土遺物(27) (縮尺1/3)

3. 25 a 層出土石器 (図66~69)

調査区北斜面の25 a 層では141点の石器が出土している。土器型式からみると彦崎K 2 式に先行する段階で、27 b 層上面よりもやや新しい時期であるが、石器群の内容は27 b 層上面の石器群とほぼ同様である。石器組成は表5に示したとおりである。27b層上面で出土した石器群に比べると貧弱な内容で、安定した組成とは言い難いが、縄文時代後期にみられる主要石器は一通り出土している。調査時に、便宜的に調査区を12分割しており、石器は北東隅のE 1 区としたところから集中的に出土している。ただし、図68-E 2-1のみはE 1 区の南側のE 2 区から出土している。

石鏃 (図66-1~5) 基部の形態のわかるものはすべて凹基で、えぐりの深いもの(3、4)と浅いもの(1、2、5)とある。縁辺は総じて直線的である。

1はc面に素材面を残している。脚部はわずかに凹脚になっている。2は脚部がわずかに凹脚になっている。欠損はしていないが、脚部は左右非対照形である。3は素材面を残さないほどに加工が進んでおり、整った形態である。小型の部類にはいる。4は薄い剥片を素材としており、両面に大きく素材面を残し、周縁に両面から細かい加工をして形を整えている。5は脚部がわずかに凹脚になっており、形脚を欠損している。両面に素材面を残す。

石鏃未製品 (図66-6、7) 6は末端の折れた剥片を素材としており、a面右側縁に両面から浅い角度で加工している。a面左側縁は剥片の折れ面がそのまま残っている。7は上下両端を欠損しており、元の形態は不明である。a面中央とc面中央に素材面を残す。

尖頭器 (図66-8) 加工のしかたは石鏃と同様であるが、細長い形態であるから、石鏃とするよりも尖頭器としたほうが妥当であろう。a面右側に剪断面と思われる剥離面があり、楔形石器の削片を素材としていることが考えられる。

スクレイパー (図66-9、10) 9はa面下端部に両面から加工している。a面上部にわずかに残る自然面から、石理に沿って剥離した剥片を素材としていることがわかる。a面左右側縁にわずかながら石匙のつまみ部分を作り出すような剥離が入っていることから石匙の未製品の可能性もある。

10はa面左側縁に両面から浅い角度で加工をしている。b面に残る素材面は楔形石器の剪断面と考えられる、また、上端の打面が潰れていることから、楔形石器の削片を素材にしていると考えられる。なお、大型の石鏃の未製品の可能性もある。

楔形石器 (図66-11~19) 形態的に分類すると、扁平のもの(11~15)と角柱状のもの(16~19)に分けられる。12は両面に大きく素材面を残し、a面右側縁が折れている以外は全ての縁辺が潰れている。また、a面左側縁がわずかに摩滅していることから、打製石鏃の刃部片を素材としていることが考えられる。13はc面に自然面を残す。a面右側の上から打撃による剥離面は

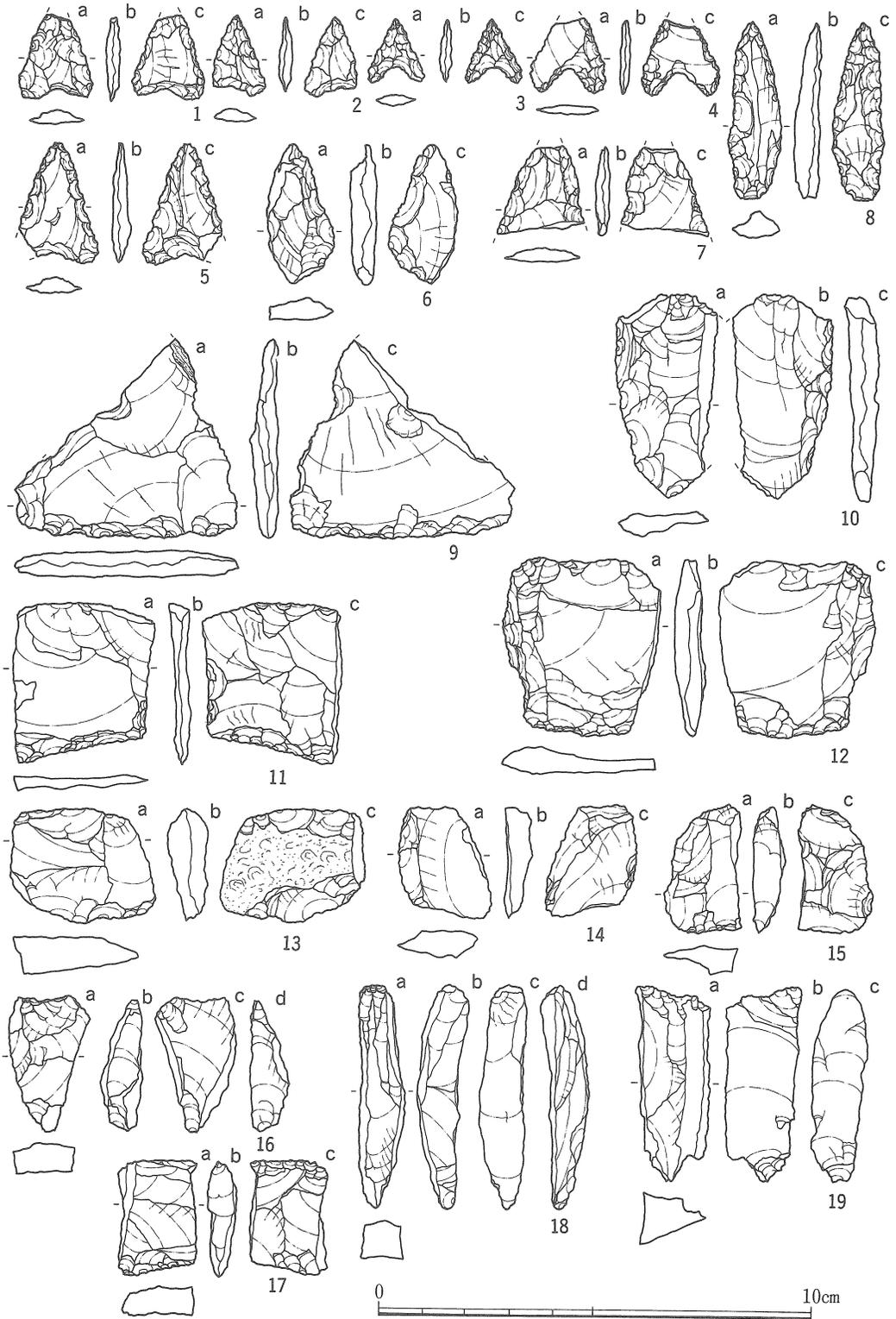


図66 25a層出土遺物(20) (縮尺2/3)

剪断面である。また、これは他の石材と違い、白く風化している。他の青灰色に風化している石材と原産地が異なっているのかもしれない。14は両面に大きく素材面を残す。a面左側の上からの打撃による剥離面は剪断面である。16は左右両側面に剪断面を残す。c面は素材面である。17はa面左側面が折れ面でb面は剪断面である。18は細長い角柱状を呈する。b面は素材面で、c面が剪断面である。19はc面に剪断面を持ち、この面が一番新しい剥離面である。

石核（図67-91） 厚い剥片を素材とし、素材剥片の主剥離面を打面としてa面側で剥片を剥離している。b面は剪断面で、さらに剪断面の上下両端が潰れていることから、両極打撃によって石核を分割したと考えられる。ただし、この剪断面が剥片剥離作業の以前に生じたのか、剥片剥離作業終了後に生じたのかは明かでない。

打製石鋏片（図67-133+134） 片理の発達した泥質片岩を石材としている。2点が接合している。下端が潰れており、ここが刃部であったと考えられる。片理に沿って割れている。

石錘（図135～137） 135は花崗岩の偏平な円礫の両端を打ち欠いて紐掛け部分を作っているが、下半部は欠損が激しい。136は粗粒安山岩の円礫の両端を打ち欠いている。実測図右面では上からの打撃が石錘の中心付近まで及んで、大きく欠損している。137は花崗岩の偏平な円礫の両端を敲打して紐掛け部分を作っている。

叩石（図67-138～図68-140） 図67-138は花崗岩の円礫の縁辺に敲打痕が残っている。半分ほどを欠損している。表面が摩滅していることから、磨石としての機能も有していたようである。図68-139は泥質片岩の細長い礫の一端が激しく潰れている。140は閃緑石の円礫の表面に敲打痕がある。敲打痕のついた面の反対側の面は欠損が激しい。

凹石（図68-141） 粗粒安山岩の円礫の両面に敲打痕があり、わずかにくぼんでいる。半分位を欠損している。

打製石鋏（図68-E 2-1） この遺物だけはE 2区出土である。ホルンフェルスを石材としている。両側縁を潰すように加工をして形を整えている。刃部がバチ形に開く形態である。

23層下面出土遺物

以下にあげる遺物は23層下面から出土した遺物で、直下の25a層の石器群に含まれる。

打製石鋏（図68-1～図69-3） 1はホルンフェルスを石材としている。風化が激しく、形態も整っていないが、スクリーントーンをかけた部分が摩滅していることから、打製石鋏の可能性のあるものとしてあげた。2はホルンフェルスを石材としている。風化が激しく観察が困難であるが、平面形から打製石鋏の可能性があるとここにあげた。図69-3はホルンフェルスを石材としており、風化が激しい。スクリーントーンをかけた部分が摩滅している。刃部がバチ形に開く形態である。上半部を欠損している。

25a層と23層下面で出土した打製石鋏はすべて地元で入手可能な石材で製作されている。

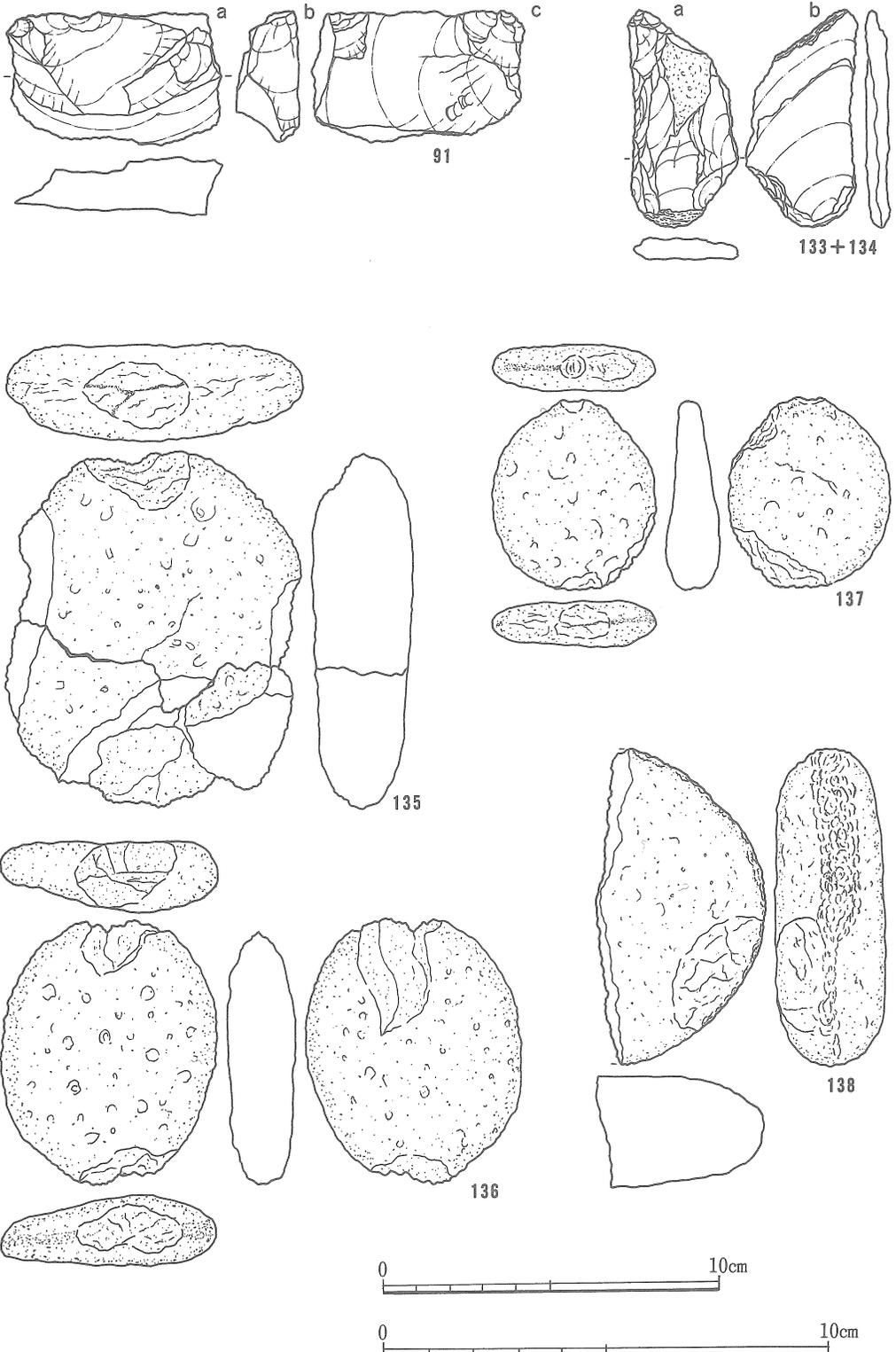


図67 25 a層出土遺物(29) (縮尺 91・133+134は2/3、135~138は1/2、91・133+134は下スケールに対応)

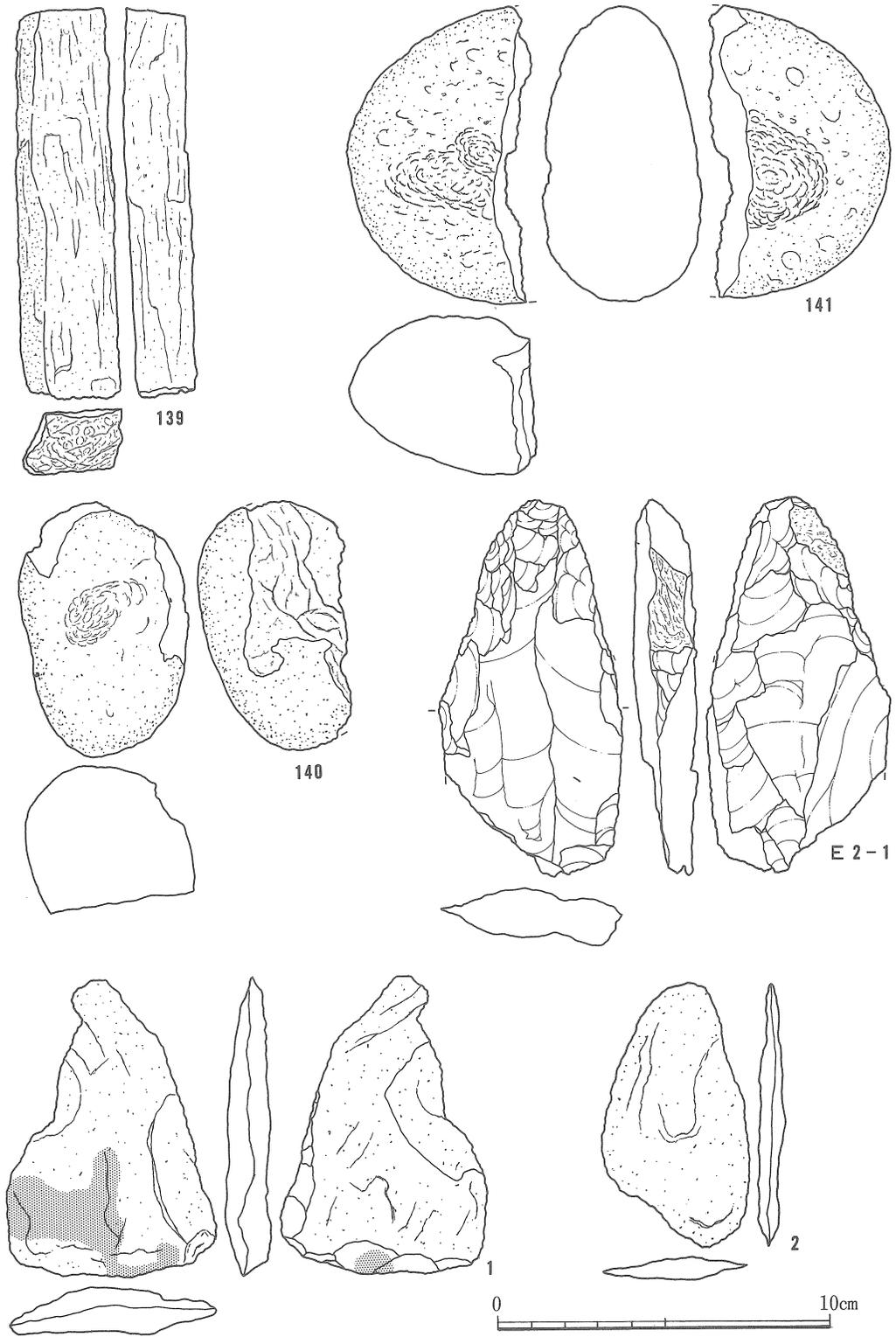


図68 25 a・23層下面出土遺物 (139~E 2-1は25 a層、1・2は23層下面、縮尺1/2)

石錘 (図69-4) ホルンフェルス製の細長い円礫の両端を研磨して紐掛け部分を作った切目石錘である。

叩石 (図69-5) 凝灰岩の円礫の表面に敲打痕がある。敲打痕のある面の反対側の面は大きく欠損している。 (富樫)

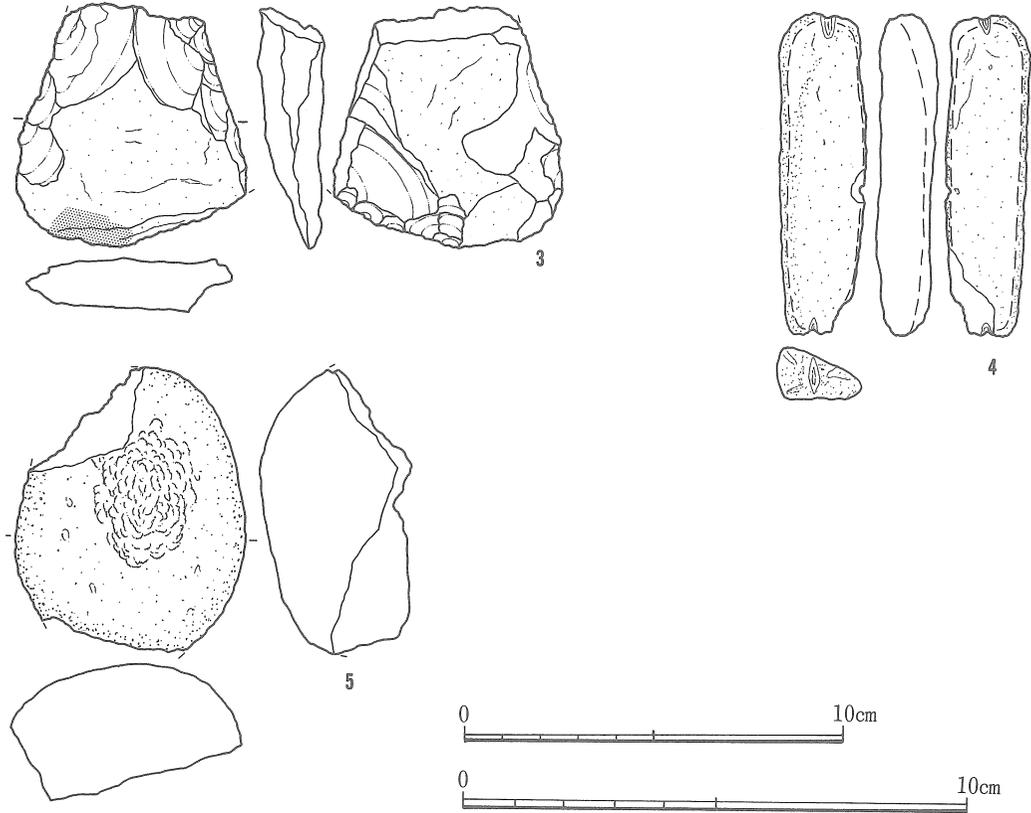


図69 23層下面出土遺物 (縮尺 3は2/3、4・5は1/2、1は下スケールに対応)

4. 27b層出土の土器・土製品（図70～111）

27b層からは大量の遺物が出土した。この層は各サブトレンチの内部において縄文後期の遺物が集中して出土したために、集中地点を中心にあらたにグリッドを設定して調査をおこなった（図70）。

グリッドは東西に流れる縄文時代の河道に沿うように設定し、その結果、遺物を含む本層が、河道内に堆積したものであり、また遺物の集中も、ほぼこの範囲におさまる広がりであることが確認できた。遺物は特にこの層の上面に集中しており、中位以下にはその包含が稀であった。

また遺物の回収は5mのグリッドを単位として行われているので、微細な分布状態については、特に所見もなく、復元することは不可能である。しかし整理分析の途上で、グリッドを単位とした土器の重量を計測し、その分布を見ると、N-7グリッドとS-4・5グリッドの2カ所に特に顕著な集中があることが明らかにできた（図70）。重量比によれば、2つの集中地点だけで全体の約57%を占めており、遺物の廃棄はこの両地点を中心にして行われた可能性が高い。先述したように、本層における遺物の出土状態は、層の上面を中心としていることから、遺物の廃棄はあまり時間を置かずに、中心を移動しながら行われたものと考えられよう。したがって、これらの遺物は、河道内にありながらも水流等の影響をあまり受けずに、廃棄された時点の状況を比較的良く留めているものと考えられる。

出土した遺物は土器を中心に石器や剥片類、土製品等多岐におよび、本地点が居住活動の中心的な舞台に付随して形成されたことを物語るであろう。以下、遺物の集中するこの2地点を、

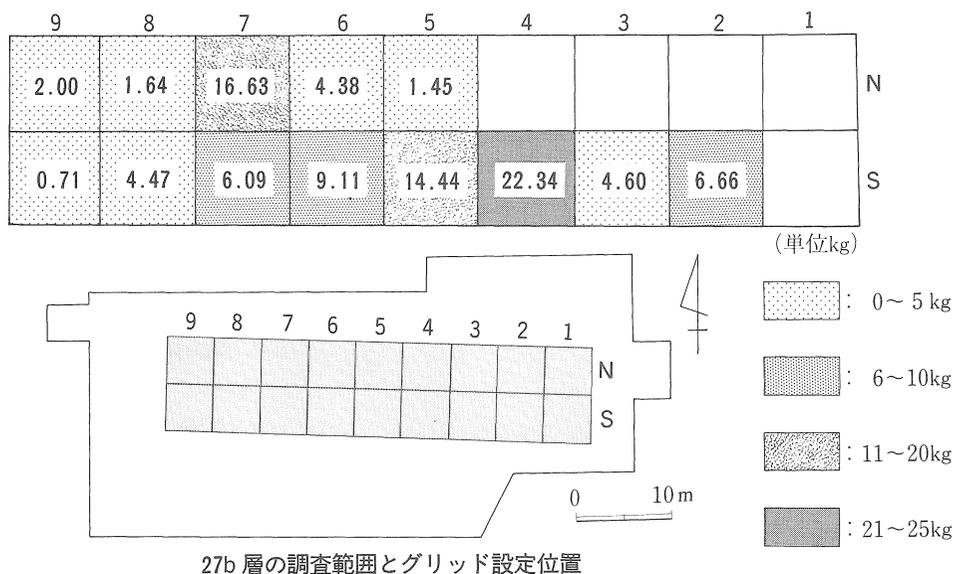


図70 27b層における土器の重量分布（グリッド単位）

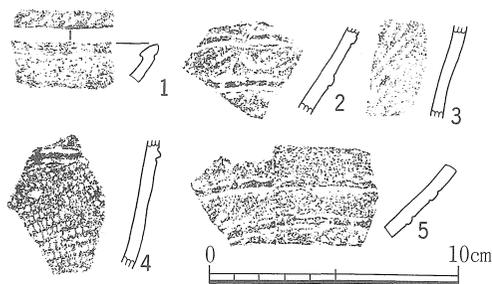


図71 27b層出土遺物(1)

東側からA、Bブロックと呼称して説明を行うことにする。

図71-1～5は同一個体と思われるもので、器面には細い紐線を横位に付け、紐線の両側に竹管様の工具による押し引きが行われる。全面に節のおおきな縄文を施文し、1の口縁部では口唇部内面の肥厚部分にもおこなわれる。粒度の細かい胎土を用いており、他の土

器とは顕著に異なる点が指摘できる。これらはその特徴から、前期後葉の里木I式あるいは彦崎Z II式に比定でき、いまのところ津島岡大遺跡では、もっとも古い縄文土器ということがができる。

図72-6、7は比較的薄い器体に太い沈線による文様を描く。1は口唇部に刻みを施し、口縁部には渦巻き状のモチーフが描かれる。これらは後期第I群に含まれる可能性がある。8～17は2本、あるいは3本の沈線により曲線的なモチーフを描いて、内部に縄文を充填する特徴をもつ。11～13、15は口縁部で内湾し、とくに13は波状口縁を成し、波頂下には渦巻き文が描かれる。15は口縁部に太い一条の沈線が周回し、口縁部断面が突出する特徴がある。縄文はいずれも充填縄文である。これらは後期第II群に比定される。

16～26は破片が細かいが、沈線により区画されたモチーフの内部に縄文を充填するもので、大半が第II群の胴部に比定できるであろう。

27は外削ぎ状に内折した口縁部に、太い丸棒状の工具による縦位の刻みを施すものである。こうした類の装飾は、岡山県津雲貝塚や、愛媛県平城貝塚などにも類例があるが、主体を成す地域は明確ではない。時期的には第II群よりも後出するであろう。ここでは第III群に含める。28、29は作りの粗雑な深鉢の口縁部で、29は内面にたどたどしい沈線が引かれる。28は外面に沈線による文様が描かれるが、意匠は明確ではない。

30～32は深鉢の頸部である。31、32は頸部を水平に区分する分帯部分に接続する部分である。30は口縁部付近で、2本が単位となる垂下線が描かれる。32は垂下線の内部に梯子状に横位の沈線が加えられる。34～38は同類の胴部と思われる。

39は口縁部から頸部にかけての資料で、口縁部には橋状の把手が付く。橋状把手から口唇部には太い沈線が巡り、この沈線は突起の肩部で、刻みにより区切られる。口唇部はこの沈線の外側部分に縄文が施文される。頸部は無文で、横位の成形痕が残る。頸部と胴部とは沈線で区分されるようである。把手の正面観は非対称で、末端を刺突で止める沈線が巡る特徴などから、第III群に比定した。

(阿部)

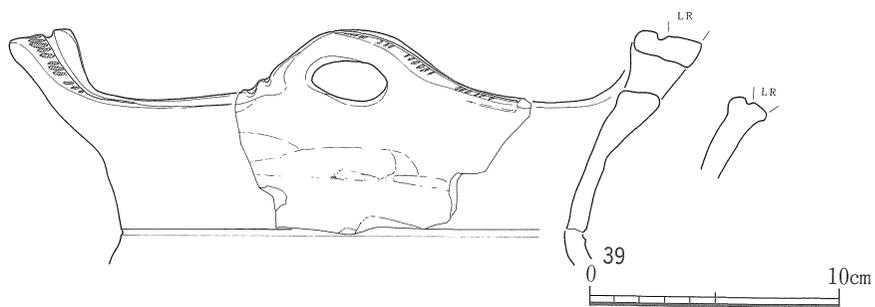
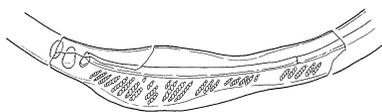


図72 27b層出土遺物(2) (縮尺1/3)